

のだ、露西亞貴族と結婚して縁を結んで、新しい係累の人達に擁護して貰ふやうにしなくてはならぬのだ」

「陛下、私は陛下の守護の下に、さうして陛下の御愛顧を蒙つてゐる幸福者でございます、私の皇帝陛下でしかも御恩人の貴方様よりも私が生き長らへないことは神様がお受合なされてをります。——それ以上何を望みませう、けれどもたとひ私に結婚しようといふ考かんがへがありません、若し令嬢やその親族の者が同意して呉れるでせうか、この顔で——」

「お前の顔でだつて？　なんといふ馬鹿らしいこつた！　それに、お前のやうな賢い奴が！　若い娘といふものはその両親の意志に従はなくてはならぬものだ、だから、わしがお前の仲人となつたら、ガヴリール・レゼフスキー爺が謂ふ事は解りきつてゐるよ。」

かう言ひながら、陛下は權を命じた。さうしてあとに残つたイブラヒムは深い想ひに沈んだ。

「結婚ができるかしら」阿弗利加人はかう思ひめぐらすのであつた。なぜ、できないのだ？　自分是不幸にして熱帯地方に生れたお蔭で、人間の最も神聖な義務と最大の快樂とを知らないで、一生獨身で暮すやうに運命づけられてゐるのだらうか。自分は戀されやうなんて、望むことはできない、何といふ子供らしい苦情だらう！　だが、いつたい戀といふものに信賴することができるだらうか。そして婦人の不眞面目な心に信賴ができようか、かやうな咬るやうな心得違ひを永久にかなぐり捨

てるとともに、自分をもつと實際的な性質をもつた思想に自分の注意を獻げなくてはならないのだ。陛下の仰しやることは本當だ。おれは自分の行末の事を考へねばならないのだ。レゼフスキー嬢との結婚は自分を立派な露西亞貴族と結合させもし、新しい祖國に寄寓しようなどとも思はなくならずであらう。自分の妻から、自分は愛を求めはしなからう、妻の誠實で満足しよう。さうして妻の友情で、自分は常に優しさと確信と信仰とを得よう。」

イブラヒムはいつもの習慣通りに、事務に熱中しようと思つたが、彼の空想はあまりに昂ぶり過ぎてゐた。彼は書類をほつたらかして、ネーヴァ河の堤の上を逍遙してゐた。不意に彼はペートルの聲が聞えた。彼はあたりを見廻して、陛下が權を乗り捨て、輝やかなしい顔附で自分の方へ進んでくるのを見た。

「萬事決まつたよ、君！」とペートルは彼の腕を捉へながら謂つた。「お前を許婚にしてきたんだ。明日は、出掛けて行つて、お前の舅を訪問しておいで。だが、あの男の子供らしい矜を満足させるやうに氣をつけるんだよ、まあ、言つてみりあ、門前で權を下りたら中庭を徒歩で行つて、あの男の公務と名聲とについて、談すんだ、さうすりや、あの男はすっかりお前が氣に入つてしまふ……では、ね、」と彼は威勢よく肩をゆすぶつて、後をつづけた。「破落戸のダニリッチのところへわしを案内してくれ、ダニリッチが最近やる、いたずらを相談しなけりやならんからね。」

イブラヒムは自分の爲めにこの父のやうな配慮をば、衷心からペートルに感謝して、メニシコーフ侯の壮大な御殿の邊までお伴をして行つた。そして、それから家に戻つた。

## 六

金銀造りの、きらきら輝く神聖な聖像を入れた硝子箱の前には、ランプが薄ぼんやり燃えてゐた。ちらちらする灯の光は、帷を張つた寢臺や附箋附きの薬瓶を載せた小さな卓子を、弱々しく照してゐた。燐燐に近く下婢が紡車を廻して坐つてゐた。そして紡錘の鈍い響きがその部屋の沈黙を破る唯一つの音であつた。

「そこにゐるのは、だあれ？」とかよわい聲が問ふた。

下婢はすぐに起ち上つて寢臺に近づくと、そつと帷をあげた。

「もうおつゝけ夜明なの」とナターシヤが訊いた。

「かれこれお午でございますよ」と下婢は答へた。

「あら、まあ！ それなにどうしてこんなに暗いの」

「貴嬢、<sup>おなた</sup>雨戸が閉まつてゐるんでございますもの」

「早く衣服を着せておくれ」

「そんなこと、なすつちやいけませんわ、お嬢様。お醫者様がおとめ申して参つたんですもの。」

「ぢやあ、妾、病氣なんだねえ、何日ほどこんな風にして寝てたの」

「十四日位になりますよ」

「そんなになるのかねえ、だつて妾が床に就いたのは、つひ昨日のやうな氣がするの……」

ナターシヤは黙つてしまつた。彼女は自分の散漫な思想をまとめようとした。何事か彼女の身に起つたことがあつた、が、それがどんな事であつたか、彼女には思ひ出せなかつた。下婢は彼女の吩咐を待ちながら、彼女の前に立つてゐた。その途端にこたごたする鈍い音が階下の方に聞えた。

「あれは、なあーに？」と患者は訊いた。

「お客様方のお食事が済んだんでございますよ、」と下婢は答へた。「食卓からお起ちになつたんですわ、タチャナ・アファナシージナ様が今にこゝへお出てになりますよ」

ナターシヤはかう聞くと嬉しさうに見えた。彼女はかよはい手を打ちふつた。下婢は帷を下ろして、再び紡車の傍の坐についた。

數分過ぎると、黒いリボン附きの、幅の廣い白の帽子を冠つた頭が、入口に現はれて、低い聲で訊ねた。

「ナターシヤはどんな鹽梅だい？」

「お伯母様、どう遊ばして」と患者は弱々しい聲で謂つたので、タチヤナ・アファナシーヴナはその方へ急ぎ寄つた。

「お嬢様はお正氣つきになりましたよ。」と、下婢は氣を付けて寢床の側に椅子を引寄せながら謂つた。老婦人は眼に涙を湛へながら、姪の蒼白い、氣力のない顔に接吻して、その側に腰を下ろした。ちようどそのあとから黒の下衣を着て醫者の假髪を冠つた獨逸人の醫者がやつて來た。醫者はナタリアの脈搏を見て、始めはラテン語で、次には露西亞語で危険状態は通り越したといふことを話した。彼は紙とインキを取寄せて、新しい處方箋を書きつけて出て行つてしまつた。老婦人は起ち上つて再びナタリアに接吻した。そして時を移さずガヴリール・アファナシーヴツチに吉報を知らせるために急いで階下へ下りて行つた。

客間には、制服を着て腰に劍を、手に帽子を持つた大帝の黒奴が、ガヴリール・アファナシーヴツチと恭々しく話をしながら坐つてゐた。コルサコーフはふんわりした長椅子の上に大の字なりになつて、彼らの會談に耳を傾けたり、年とつた獵犬にからかつたりしてゐた。さうした事にも倦きると、彼は倦怠を拂ひのける癖として、鏡に近づいた。そして鏡の中に彼はタチヤナ・アファナシーヴツチが、彼女の弟に向つて、人目にかゝらぬやうに合圖してゐるのが映つてゐるのを見た。

「ガヴリール・アファナシーヴツチさん、どなたか呼んでおいてになりますよ」とコルサコーフは彼

の方へ振向いて、イブラヒムの談話を遮つて謂つた。

ガヴリール・アファナシーヴツチはすぐ姉の方へ行つて、扉を閉めて出た。

「君の辛抱強いのにや驚くよ、」とコルサコーフはイブラヒムに謂つた。「まる一時間も、リコーフ家とレゼフスキー家との家柄が古いといふたは、ごとをうんと聞かされて、おまけに君までが萬々間違ひないと思ひを言ひ足すなんて！ 君の代りに僕が、あのお喋舌爺さんやあの連中のお相手になつてやらう、ナタリア・ガヴリロフナも入れての話だよ、何しろあの女は氣取つた娘つ子で、病氣のふりをしてゐるだけなんだよ——達者なんだ。正直に言つて呉れ給へ、君はあの小さな氣取りやさんを本當に愛してゐるのかね」

「いゝえ」とイブラヒムは答へた。「僕は全く戀して結婚しようといふんぢやない、慎重な態度で結婚するんだ。それも只あの女が僕を嫌ひだときめてしまはなければだよ」

「イブラヒム君、よく聴き給へ」とコルサコーフは謂つた。「こんどだけは僕の忠告に従ひ給へ。全く、僕は見かけよりかずつと分別があるんだからね。君のやうな馬鹿らしい思想は頭から除けてしまひたまへ。——結婚はしないことさ。君の花嫁さんは君を格別好いてるやうにや思はれないからね。世の中にやよくある事ぢやないか、例へば僕だつて本當はたいして悪い人間ぢやないんだが、それでも亭主達を囁すつてなこともあつたからね、神に誓つて言ふが、さういふ亭主達といふものは僕

より決して悪い事をする人間ぢやなかつたんだよ、それから君だつてさ。……君は巴里の友達、L—  
—伯爵を覚えてゐるだらう、何しろ婦人の貞操といふものには信頼がおけないよ、それを冷淡に見  
ることの出来る者は仕合せさ。ところが君は！……その熱烈な、物寂しい、疑ひ深い性質で、その  
平べつたい鼻、厚い脣、もぢや／＼の頭で、結婚生活のあらゆる危険に飛び込んで行かうなんて！  
……」

「君の御深切な忠告には感謝するよ」とイブラヒムは冷やかに口を挟んだ。「けれど『他人の子供達  
を揺すぶる義務はない』つて諺は御承知だらうね」

「おい、おい、イブラヒム君」とコルサコーフは笑ひながら答へた。「その諺の眞意も時に依つちや  
君は、文字通りの意味に使はないつてことに氣をつけて貰ひたいものだね」

兎角する中隣の部屋の會話が大聲熱してきた。

「貴方は、あの娘を殺すんですね」と老婦人がかう謂つてゐた。「あの娘にしたら、見るも堪らない  
に違ひありませんわ」

「だが、まあ、考へてごらんさいよ。」と頑固な弟は答へた。「二週間もつゞけて花聲のやうにこゝ  
へ來てゐるんだし、その間に一度だつて、花嫁に逢つてゐないんだよ。最後にや、あの男は、娘の  
病氣が單に造へ事て、私達がかうにかしてあの男を追ひ拂ひたいばかりに、只その機會のあるの

を探がしてゐたのだと考へるやうになるかも知れませんよ。さうなつたら陛下は何と仰しやるだ  
らう？ 陛下はもはや三度もナタリアの見舞をお寄越しになつてゐるんです。貴女の勝手になさる  
がいゝさ、だが、私はあの男と仲違ひするつもりはないんですからね」

「あゝ、神様！」とタチャナ・アフアナシーヴナは謂つた。「あの可哀相な娘はどうなるんでせう！  
せめて先へ妾が行つて、このやうな訪問に用意をさせておきませう。」

ガヴリール・アフアナシーヴナは賛成して、それから客間へ取つて返した。

「お蔭様で！」と彼はイブラヒムに謂つた。「危険も通り越しました。ナタリアはよつほどよくなつ  
てゐるんです。親しいお客さんのイヴン・エフガラフオウツチさんを、こゝへひとりぼつちにしてお  
きたくはないんですけれど、花嫁を一眼見せに、この方を二階へお連れしたいんですがね」

コルサコーフはガヴリール・アフアナシーヴナを祝福して、自分にとつて不快なやうなことは訊  
かない振りをして、直ぐ行かなけりやならん所がありますからと言つた。そして、彼を送り出さう  
とする主人を斷つて、客間を跳び出してしまつた。

その間にタチャナ・アフアナシーヴナは病人に恐ろしい客人の容貌に覺悟させて置かうと急いだ。  
部屋へ這入ると彼女は、寢床の側に息をこらして腰を下ろした。そしてナターシヤの手を執つた。  
けれども彼女がまた一言も言はないうちに、扉が開いた。

ナターシヤは訊いた。「誰が這入つてきたの？」  
老婦人はおぼおぼ振返つてみた。「ガヴリール・アファナシーヴチは帷をくぐつて、病みほうけた娘を冷やかに眺めながら、どんな鹽梅だねと訊いた。病人は彼にほく笑んでみようとしたが、出来なかつた。父の厳格な眼附に彼女は心打たれて、不安が宿つたのである。その刹那に彼女は誰か寢床の枕邊に立てゐるやうな気がした。彼女はやつと頭をあげたが、ふと陛下のネグロが眼にとまつた。するといろいろな事が彼女に思ひ出されてきて、行末のあらゆる恐怖が、彼女の前に現はれた。しかし疲れ果てた精力は目に立つやうな激動を受けなかつた。ナターシヤは頭を再び枕の上に横へて、眼を瞑つた……心臓は彼女の胸の裡に痛々しく波打つてゐた。タチャナ・アファナシーヴナは、病人が今眠たがつてゐるのだといふことを兄に眼くばせしたので、紡車の傍の座に戻つた下婢を、ぞく外は、皆しづしづと部屋を出て行つてしまつた。

不幸な美女ナターシヤは眼を開いて、もはや自分の側に誰もゐないのを見ると、下婢を呼び寄せ、乳母を呼んできて呉れと言つた。ところがその瞬間に、毯のやうにまん丸い婆さんが、ナターシヤの寢床へ轉がり寄つた。ラストチカ（乳母はさう呼ばれてゐた。）は短い足を一ぱいに伸して、ガヴリール・アファナシーヴチとイブラヒムとが階段を登るあとから、隨つてきたのであつた。そして女性が持つて生れた好奇心のすゝめるまゝに、扉の裏に身を隠してゐたのであつた。ナターシヤは

ラストチカを見ると、下婢に場を外させた。そして乳母は寢床の傍の腰掛に腰を下ろした。

かくも小さい體軀といふものは、さうして多くの根氣力をその内部に收めてはゐられなかつた。彼女は何事によらずしてしやばりて、いろいろな事に氣がついて萬事に氣忙しかつた。狡猾く取入るので乳母は主人方の寵愛をまんまと手に入れたが、彼女が極めて氣儘に取締る召使達からは嫌はれてゐた。ガヴリール・アファナシーヴチは彼女の申告や不平やちよつとした要求位は聴き容れて遣つてゐた。タチャナ・アファナシーヴナはいつも乳母の意見を求めて、その忠告に従つてゐたので、ナターシヤはラストチカに最も無限な愛情を持つて、十七の乙女心のあらゆる思想、あらゆる感情を彼女に打明けてゐたのである。

「ラストチカ、お前、知つてゐるでせう、お父様は妾を黒奴と結婚させようとしていらつしやるのよ」と彼女は言つた。

乳母は深い溜息を吐いた、そして皺だらけの顔を一層皺くちやした。

「見込みがないのかねえ、」とナターシヤは言ひつとけた。「お父様は妾を可哀相だとは思つて下さらないのかねえ、」

乳母は頭を振つた。

「お祖父様も、お伯母様も妾のために取なしては下さらないのかしら」

「いゝえ、お嬢様、貴女が御病氣中に黒奴が皆様をうまく誑しこんでしまつたんございます。旦那様は黒奴の事で夢中になつていらつしやいますし、侯爵様はおひとりて有頂天になつて黒奴を賞めておいてなさいますが、タチヤナ・アフアナシーヴナ様は、もつといゝ花弁が見つからないからといつて、相手がネグロぢやあんまりお氣の毒だつて、仰しやつていらつしやいます」

「あゝあ、神様！」と哀れなナターシヤは呟いた。

「お歎きなさいますな、お嬢様」と乳母はナターシヤのかよはい手に接吻しながら謂つた。「萬が一にも黒奴と結婚しなけりやならないことになりましたら、貴女、萬事氣儘をしておやりなさいませよ。今日此頃では昔のやうぢやございませんわ、旦那様達はもうもう奥様方に錠や鍵をかけられはしませんからね、それに黒奴はお金持ちだつていふ噂でございますよ。貴女のお家は満ち溢れた盃のやうになりませう。——貴女は楽しいお暮しをなさるやうになれませうよ」

「可哀相なヴァレリアンさん！」とナターシヤは謂つたが、あまりやさしい聲で、乳母にはその言葉が聞きとれなかつたので、彼女はやつとナターシヤの謂つた事を察したといふに過ぎなかつた。

「それ、そこなでございますよ、お嬢様」と彼女は秘密さうに聲を低くめて謂つた。「もし貴女がああゆみひきの弓術家の孤兒みなしのことをちつとも思つていらつしやらなかつたら、御病氣最中にあの兒の謔言なんぞ仰しやる筈もございませんでせうし、お父様もお腹立ちにはなりませんでせうに

ね。

「何ですつて！」吃驚してナターシヤは謂つた。「妾がヴァレリアンさんの謔言を言つたんですつて？ さうしてお父様がお聞きになつたの、それでお父様は御立腹になつたの」

「それがほんとうに御運が悪いでございますよ」と乳母は答へた。「もうかうなつては、お嬢様が黒奴と結婚しないと仰しやれば、お父様の方ではヴァレリアンのためだらうと思召になるに違ひありませんわ、どうにも仕様がありませんよ、御両親様のお心にお従ひなさいまし、物事はなるやうにしか、なりませんからね」

ナターシヤは返事をしなかつた。自分の胸の秘密を父に知られてしまつたといふ考へが彼女の想像の上に力強い結果を與へたのであつた。彼女には只一つの望みが残つてゐた。といふのは厭はしい結婚の成立しないうちに死んでしまはうといふのにあつた。この思考は彼女を慰めた。心に脆く、悲しくも彼女は運命に身を委せたのである。

## 七

ガヴリール・アフアナシーヴナの屋敷の、支關の右側に、一つ窓の狭い部屋があつた。その内部には毛織の上掛を冠ぶせた單用の寢臺が据ゑてあつた。寢臺の前には小さい縦の卓子があつて、そ

の上に脂肪蠟燭が燃えてゐた。さうして幾枚かの楽譜が披かれたまゝになつてゐた。壁には古びた青い制帽だの、それと同時代位の三角帽だのが懸つてゐて、その上の方には馬に跨つたチャールス七世を畫いた粗末な繪が三本の釘で留めてあつた。横笛の音は、この質素な住居の中から洩れてくるのであつた。俘虜の舞踏長は寝帽ナイトキャップと南京木綿の化粧服とを着て、何かかう古い瑞典の進行曲のやうなものを弾しながら、冬の夜のものうさを洩してゐた。まる二時間も一心にかうした稽古をしてから、瑞典人は笛をばらばらに取はずして、それを箱に收めて、衣服を脱ぎ始めた。……

譯者附記——この物語は不幸にして未完成のままに残つてゐるけれども、本質的な價值は別として、ブーシユキンの聖弗利加祖先の來歴に興味深き光を放けるものとしてこの集に收めせるのである。

令嬢田舎娘

Handwritten notes in the bottom right corner of the left page, including some illegible scribbles and the characters "R8 B3".

年時代に彼は近衛に奉職してゐたのであるが、千七百九十七年の始め頃その職を退いたので自分の所領地へ歸つて、それ以來再びそこから動かうとはしなかつた。彼は貧乏な貴族の令嬢と結婚したが、その令嬢は、彼が偶々所領地のある外田へ行つて留守の時に際して、俄かに産褥で死んだのであつた。彼はやがて世帯染みた仕事に慰安を見出した。彼は自分の設計で一軒の家を建て、羅紗製造場を設立し、その収入を旨く用ひた。そして、その地方一帯の迂遠な連中の中にあつて自分一人は最も實際的人物だと思ひ始めた。しかし彼がかう考へてゐても、家族を連れたり犬を連れたりして彼を訪問してくる近隣の人達は反對しなかつた。普段の日には、彼は天鵝絨の短衣を着てゐたが、日曜日と祭日には、彼の屋敷で製造らへた羅紗の外套を着てゐた。彼はすべての入費の計算を自分で取締つてゐた。そして「立法新聞」より外には決して何ものをも讀まなかつた。

一般に彼は高慢ちきだと思はれてはゐたけれども、好かれてはゐた。只一人彼をよく言はない人があつた。それは彼の最も近い隣人のグリゴリー・イワアノヴィチ・モオロムスキーであつた。この後者は、舊式な純粹の露西亞貴族であつた。モスコフで彼は財産の大半を費消して、殆んどそれと同時に鰥夫となつたので、彼は最後に残つた所領地に隠退して、其處で新奇な遣り方ではあるが贅澤な習慣に引ずられて放縱をつゞけてゐた。彼は英國式の花園を造へて、そのために殆んど残つて

ある所得の全部を費ひ果した。彼の馬丁達には英國の騎手のやうな服裝をさせてゐた。彼の娘は英國の女教師のやうな風をしてゐた。そして彼の畑は英國式の方法に做つて栽培されてゐた。

「しかし外國式では露西亞の穀物は實を結ばないものである。」そこで彼は費用を餘程縮小したにも拘らず、グリゴリー・イワアノヴィチの収入は増加しなかつた。彼は田舎に居つてすらも新しい負債を契約する手段を見出した。けれども彼は馬鹿者だと思はれてはゐなかつた。なぜならばその當時非常に複雑で又危険だと思はれてゐた手段を講じて——後見會議の保護のもとに自分の領地を抵當に入れようとの考へを思ひついたのは彼がこの州での最初の地主だつたからである。彼を非難したすべての人々のなかで、ベレストフは最も極端に見せつけた。あらゆる革新に對する嫌厭が彼の性質中の著しい特徴であつた。彼は隣りの英國心醉者については、自づと平氣で話をしてゐられなかつたので、機會のある度毎にいつも彼を非難してゐた。今もし彼がある客に彼の領地を見せた場合、彼の經濟的な整理に下された賞讃に應へて、彼は狡るい微笑を洩してかう謂ふのであつた。

「あゝ、さうです、私は隣のグリゴリー・イワアノヴィチと同じやうな譯にはいきませんよ、私達は露西亞式に餓を凌ぐためにも爲すべきことがまだく澤山あるのに、どうして英國式を眞似ねて自分から零落する必要がありません。」

これらの、そしてこれらと同様に皮肉な批評は、深切な隣人達の熱意のお蔭で、大變修飾されて



らいらして批評を我慢してゐた。彼は烈火の如く怒り猛けつて、その誹謗者を熊だとか、田舎者だとかと罵つた。

二人の地主の關係はこんな風であつたが、丁度その折に、ベレストーフの息子が父の所領地へ歸つて来た。彼はこれまで×××大學で教育されてゐた。そして軍隊生活に入りはしまいかと氣遣はれてゐたが、それには彼の父が同意をしようとしなかつた。この青年は文官といふものにちつとも愛好を持つてゐなかつたし、他人に頭を下げる事が大嫌ひだつたので、若いアレクセイは、かうしてゐる間にも貴族のやうな生活をして、兎に角口髭を生してゐた。

アレクセイは實に美しい若様であつた。そのほつそりした姿を軍服で引立たされることもなく、立派な軍馬に騎るかはりに高等法院の事務室で書類にこども込んで彼の青春時代を費さなくてはならぬといふことは誠に氣の毒なことであつたに違ひない。近隣の人は彼が常に狩獵に魁かけをなし、常に踏み馴れた道からはみ出す人であることに氣がつくと、彼は有用な官吏には決してなるまいと異議なく一致したのであつた。若い婦人達はちつと彼のあとを見送たり、時には彼に盗見眼ぬすみめを放げかけたりすることもあつた。けれどもアレクセイはまるで彼らを何とも思つてゐなかつた。で、彼らはこの無頓着を、何か秘密な戀愛事件があるためだらうといふことに歸してゐた。實際、彼のあ

る手紙の宛名の下書が人の手から手へと順々に渡つてゐた。「モスコイ市、アレクセイエフスキー寺院向ひ、金物商サヴェリーフ氏方、アクリーナ・ペトロフナ・カウロチキン様御許へ、この書面を御許様よりA・N・Rへ御届下されたし。」

わが讀者諸君の中で田舎にまだ住んだことのない人々は、かういふ地方の若い娘達がどのやうに美しいかは想像し得られない！ 彼女の花園の林檎の樹影に、清らかな空氣のなかに育つて、彼女らは、世の中や人生に關する知識を主として書物から引出すのである。孤獨と自由と讀書とは彼女らの心内に、都會生れの美人には見られない感情と慾情とを極めて早くから發達させてゐるのである。田舎の若い令嬢達にとつては驛馬車の鈴の音も一事變である。最寄りの市街までゆく旅びも、彼女らの生活に新生命を劃するものである。そして一人の客の訪ずれも末長く心に残つて、時とすると永久の回想ともなる。勿論すべての人々が彼女らの奇異な性質を嗤ふのは勝手であるが、皮相な觀察者の嘲笑は彼女らの本質的な眞價をば打消すことはできまい。して、その本質的な眞價の重なるものといふのは性格の個性で、ジャン・ポウルの意見によれば、それなくしては人間性の偉大さがありやう筈がないといふその個性なのである。大都會であつては恐らく婦人達はよき教養を受けるであらう。しかし世間と交渉するやうになるとまもなくその性格を平等にし、彼女らの魂を彼女らの頭飾りのやうにお揃にしまふのである。このことは賞讃や又は非難のために言はれるの

ではなく、ある批評家が書いてゐる如く「名譽のために」言はれてゐるのである。

アレクセイがこの若き婦人社交會にどのやうな印象を興へたか、それは容易に想像し得られるであらう。彼はあの憂鬱な、そして迷から醒めた彼女らの前に現れた最初の人であつた。失つた幸福について、凋萎した自分の青春について彼らに話しかけた最初の人であつた。搗て、加へて彼は、骸骨の頭を彫りつけた喪の指輪をはめてゐた。すべてこれはあの遠い國で、全く耳新しい事件が何かあつたのだ。若い婦人達はたゞもう彼のことで夢中になつてゐた。

しかしなかにも英國心酔者の娘リーザぐらゐ、いやグレゴリー・イワアノヴィチが常に呼んでゐたやうに言へばベツシイくらゐ彼に多くの興味を感じてゐたものはなかつた。彼らの親達は相互に訪ね合はなかつたので、近所界限の若い婦人達の間で、彼のことが唯一の話題となつてゐた頃ですら、彼女はアレクセイに一度も逢つたことがなかつた。彼女は芳紀まさに十七であつた。黒眼勝ちの眼は彼女の淺黒い、非常に快活な顔を華やかに飾つてゐた。彼女はまだほんの子供で、従つて、随分あまえてゐた。彼女の我儘と絶え間のないたずらは彼女の父を喜ばしたり、家庭教師のジャクソン嬢といふ氣障な四十年増の老嬢の心を失望で充たしたりした。このジャクソン嬢といふのは、顔に白粉をこつてり塗り、睫毛を黒く染めて、一年に二度「バメラ」(譯註) マミュエル・リツチャ 百四十年に初めて出版されたものである)を通讀して、そのために二千留貰つてゐたが、わが野蠻な露西亞人の家にゐるの

に殆んど死ぬほどの退屈を感じてゐたのである。

リーザにはナスチャといふ稍々歳古けてはゐたけれども、この女主人のやうな全く輕卒な女が仕へて居た。リーザには彼女が非常に氣に入つてゐたので、何事によらず自分の秘密を打明けて、彼女とぐるになつて悪戯をたくらんでゐた。一口に言へばナスチャは佛蘭西悲劇小説中の信任する人物よりも遙かに、ブクローチイナ村での重要な人物であつた。

「私は今日、訪問に出掛けても宜しうございませうか」ある朝、ナスチャはお嬢様に衣服を着せかけながら言つた。

「あゝいゝよ。だが、どこへ往くの？」

「あのベレストーフ家の、トীগロヴオさんのところへですわ、あそこの料理人のかみさんが今日、命名日のお祝ひをしようてんでね、昨日私達を中食の招待にきていつたんでございます。」

「そりや奇妙だわね。」とリーザは謂つた。主人同志が瞰み合つてるのに、下々の者達がお互にお祝ひし合ふなんて。」

「旦那様方が私達と何の關係がございませう」とナスチャは答へた。それに、私はお嬢様のお付きでこそあれ、旦那様のお付きぢやございませんもの、お嬢様だつて、ベレストーフの若旦那と何にも喧嘩していらつしやるんぢやございませんまい。もし御老人様方がお争ひなすつたり喧嘩をなすつ

たりするのがお好きなら、させておきなさいませよ。」

「ナスチャ、試しにアレクセイ・ベレストーフに逢つてきて御覽、それから私に、どんな風に見える人か、どんな種類の人か聞せておくれ。」

ナスチャはさうすることを約束した。そして一日中リーザは彼女の歸つて来るのを今か今かと待つてゐた。晩になつてナスチャがやつてきた。

「まあ、リザベータ・グレゴリーヴナ様、と彼女は部屋へ這入つて來ると言つた。若いベレストーフ様にお逢ひして參りましたよ、それに私達は終日一緒にゐたんですからよつくお目にかゝる機会が、たつぷりありましたの。」

「どうしてそんなことができたの、聞かせておくれ、ね、すつかり聞かせておくれ。」

「よろしうございますとも、私達は、私とアニシア・エゴロフナとネニラとドリーニカとで出掛けたんですが……。」

「さう、さう、知つてゐるよ、さうしてそれから？」

「御免を蒙りました、私は何もかも詳しくお話いたしません、私達はちやうど中食時にむかうへ着きましたのよ。部屋はもう一ぱいでございました。ザカレフスキー家の方やカロビンスキー家の方や、執事の奥さんやその娘さん方と同じやうに、コルビンスキー家の方もそこにいらつしやいまし

たわ……。」

「成程、さうしてベレストーフは？」

「まあ、お待ち遊ばせ、私達が食卓に着きますとね、執事の奥さんが上座に着きました。私はその次に坐りましたが……娘さん達はふくれ面をして、それが氣に喰はなかつたんですの、ですけれどそんなことなんぞに私は氣兼ねをしませんでしたわ。」

「あーあ、ナスチャ、お前は限りもなく細かく喋舌るんだもの、退屈つたらありやあしない！」

「なんてまあ、貴女は性急な方でせうね、ところで、私達が食卓から立ちあがりますとね……私どもは三時間も坐つてゐたんですよ、それに御馳走が素晴らしいんですよ、バステリー(麦粉を焼いた菓子)に白ジェリー(魚膠寒天葛粉等を牛乳に混ぜて製したもの)、青、赤、縞といった具合なんですの……さて、私達は食卓を離れて、鬼ごつこをしようといふので庭へ出て行きましたの、そこへ若様が出ていらつしやいました。」

「成程ね、で、本統にそんなに素的な好男子だったの？」

それは、それはお綺麗な方ですよ、丈がお高くて恰好がよくつて、紅い頬をなすつてね……。」

「全く？ だけれど私も美しい方の積りであつたのよ、でも、お前にやどう見えて？ 哀し相に、考へ込んでいらしたかい。」

「ちつともそんなことはありませんでしたわ！ あんな陽氣な人といつたら生れてから、私見たこ

とがありませんもの、私達の仲間に入つて遊びたがつてゐらつしやいましたよ。」

「お前達の遊び仲間に入るんだつて？ できやしないわね！」

「できないつてことはありませんわ。それに貴女、他にまだ何をしたがつていらしたか、お分りになつて？ 私達を皆接吻して廻りたいんですつてさ！」

「あら、いやだ、ナスチャ、馬鹿なことを云ふのね、」

「あら、いやだ、私、馬鹿なことなんぞ云つちやみせんわ、ほんとうに私、あの方に攫まるまいと、随分困りましたのよ。一日中私達に附まつていらつしやるんですもの。」

「けれど、あの仁は戀をしてゐて、誰にも眼を向けたいといふ噂ぢやないの。」

「そんなことは私、ちつとも存じません、私をちつと眺めていらしたわ、そして執事の娘のターニ

ヤヤコルピンスキー家のパーシャをもぢつと見ていらしやいましたよ、ですけど、それは誰かゞ癪に障つたからといふんぢやありません——あの方はまあ、さういふ面白い方ですのよ」

「まあ、途方もない！ ところで家庭ぢやどんな評判なの？」

「なんでも天晴れな旦那様つて言ふ話です——大變親切で、大變快活な方ですつて。強ひて捜せば

たゞ一つ缺點がありますつて。それは若い娘達のあとを追ひ廻すのが大好きなんだ相てございませぬ、けれども私に言はせればさほど大した缺點だとは考へられませぬわ、歳をとればしまりますも

のね。」

「私、どんなにあの仁に逢つてみたいか知れない！」と、溜息をついてリーザは言つた。

「貴女がお逢ひなさるのに何かお差支がございますの、こゝからトーギロヴォ村までは遠くもございませぬよ——たつた三露里ばかりなんですもの、彼地の方向へ徒歩なり馬にお乗りになるなりして、往つて御覽なさいまし、さうすりや、屹度、お逢ひになれますわ、あの方は毎朝早く獵銃を携へてお出かけになりますのよ。」

「いゝえ、いゝえ、そんなことはしたかない、私がああ仁のあとを追つかけてゐるやうに思はれるに違ひないからね。それでなくても親同志仲が善くないんだから、あの仁には附合へないし……

あゝ！ ナスチャ、私はどうしたらいゝだらうね、私は百姓娘のやうな服装をしようかしら！」

「さうねえ！ 粗末な繻絆と百姓上衣とを着て、トーキロヴォ村へ思ひ切つて行くんですわ、私は受け合ひます、ベレストーフさんは貴女に知らん顔して行き過ぎはしませんよ。」

「それに私はこの邊の百姓の話つぷりも知つてゐるからね、あゝ、ナスチャ！ 私の親愛なナスチャ！ なんて素敵な思考だらう！」

そしてリーザは寢室へ行つて、その計畫を實行することに確く決心した。

翌くる朝、彼女は其の考案を果す用意を了した。彼女は勸工場へ使ひを遣つて、粗末なリンネ

ルを少しに、青い紫花布ナシケンや銅の釦を買はせた。そしてナスチャに手傳はせて襦袢と上衣とを裁たつた。彼女はそこで、上むを得ない針仕事だけを女中達にやらせたので、日暮頃までには何も彼も支度ができ上つた。リーザは新しい衣裳を着て試て、鏡の前に立ちながら、嘗てこんな可愛らしく見えたことがなかつたと自分から思つた。そこで彼女の身仕度もできあがつた。彼女は歩きながら丁寧なお時儀をしたり、次には支那猫をまねて頭を五六遍揺ぶつたり、百姓訛りの話振をしたり、袖で微笑をかくしたり、さうしてナスチャがすっかり満足するまでにあらゆる事をやつてみた。唯一つこゝに彼女にとつてつらい事があつた。といふのは、彼女が跣足で中庭を横きつて歩いてみたところが、軟かい足が芝生でチク／＼痛むので、彼女は小石や砂利の堪らないことが解つたのである。ナスチャは早速彼女を援けに行つた。彼女はリーザの足の寸法を量つて、牧羊者のトロフィンを捜しに畑の方へ走つて行つた。さうしてトロフィンにしなのきの内皮で同じ寸法の靴を一足造るやうに吩咐けた。

翌朝、殆んど夜の明けない中にリーザは、もう眼を醒ました。家庭うちの中では誰も彼もまだ眠つてゐた。ナスチャは牧羊者を待ち合はせるために門の方へ行つた。角笛の音が聞えてきて、村人の群れがぞろぞろと村莊の前を通つて行つた。トロフィンはナスチャの傍を通りすがりに、小さい一足

の模様をつけたしなのきの靴を渡して、それと引換へに彼女から半留受取つた。リーザはひとりてそつと百姓の衣裳を着て、ジャックソソ嬢についての指圖をナスチャに囁き、裏の梯子段を降り、花園を通つて向うの畑へ彼女は進んで行つた。

東の空は一帶に紅らんで、黄金色に棚引く雲は、朝臣がその主君を待つてゐる如く、太陽を待つてゐるかのやうに見えた。晴れた空、朝の新鮮さ、露、微風、さうして小鳥の囀りはリーザの心を子供らしい悦びで充たした。誰ぞ知人に逢ひはせぬかといふ恐懼は、彼女に翼を與へるやうに思はれた。何故なら彼女は歩くといふよりか寧ろ飛んで行つたからである。しかし彼女は父の所領地の境界線になつてゐる森に近づくにつれて、歩調をゆるめた。こゝで、彼女はアレクセイを待ち受けようとして決心した。彼女の心臓は烈しく鼓動したが、自分では何故だか解らなかつた。しかしそれは吾々若い者の最も大きい魅力となつてゐる放縱に伴ふ恐怖ではあるまいか。リーザは森の繁叢に分け入つた。揺ぐ枝葉の深い眩きは、この若い乙女を迎へるやうに思はれた。彼女の浮き浮きした樂しさは消えてしまつた、段々彼等は甘い幻想に耽つていつた。彼女は考へ込んでゐた。——しかし十七の若い乙女が、春の朝六時頃に、森の中で獨り何事を考へたか、誰が判然言ひ得よう？ さて、こんな風にして彼女は物想ひに沈みながら、兩側の高い木立で影つた小徑を歩いて行つた。その時突然、見事な獵犬が吠え立てながら、はずみを打ちつゝ駈けてきた。リーザは吃驚して叫び聲をあ

げた。しかしそれと同時に人の呼ぶ聲がして「tout beau」(譯註「獵犬を呼ぶ止める間投辭」)スポガールよしつ!」……さうして若い狩獵人が灌木の林の背後から現れた。

「怖がらなくてもいゝんだよ。」とその男はリーザに言った。「わしの犬は咬みつきやあしないんだから。」

リーザはもはや彼女の驚愕から我に還つてゐたので、すかさずこの機会を捉へた。

「だつて、貴方……、彼女は半ば恐れるやうな、半ば極まりの悪いやうな風をしながら謂つた。「私、ほんとうにおつかないんですもの、随分猛烈な犬のやうだわ——また飛びかゝつて來さうよ。」

アレクセイは——もはやアレクセイとは讀者諸君が認めておらるゝであらう——、若い百姓娘をぢつと眺めた。

「怖けりやわしが送つて行つてあげるよ」と彼は彼女に言った。「しよに歩くのを許してくれようねえ。」

「誰に遠慮が要りませう」とリーザは答へた。「意志は自由ですし、道路はどなたにだつて開放されてゐるんですもの。」

「お前はどこから來たの。」

「ブリローチイナ村からですの、私は鐵匠のワシリーの娘なんですから、鞆をとりに入ります。」

したの「(リーザは腕に籠を提げてゐた)「ぢや、貴方は、あの? トーギロヴォ村からいらしたんでしよ、それに違ひありませんわ。」

「その通りだよ。」とアレクセイは答へた。「私は若旦那の從者の者なんだ。」

アレクセイは自分を彼女と對等にしておらうと思つた。けれどもリーザは彼を見て笑ひ出した。

「そりや虚言だわ、」と彼女は言つた。「私は貴方が思つていらつしやるほど馬鹿ぢやなくつてよ、貴方がその若旦那だといふことは、ぢやあんと分つてゐますわ。」

「どうしてさう思ふね。」

「そりやもういろいろな理由からさう思ひますわ。」

「だがね——。」

「まあ、旦那と下男とが識別られないものかなんぞのやうに! 貴方のお召物だつて下男のやうぢやなし、言葉使ひだつてさうですし、それから貴方が犬をお呼びなさるのだつて、私どもが呼ぶのは違つてゐますもの。」

リーザはアレクセイを悦ばせ始めた。彼は百姓娘と馴々しくしたことがなかつたので、彼女を抱擁しようと思つた。しかしリーザは飛び退いて、俄かに冷淡な、きつとした様子を見せたので、甚だ滑稽な話ではあるが、アレクセイは思ひきつてその試圖を新にしようとはしなかつた。

「若しこれからも仲よくしてゆかうとお思ひになるんでしたら」と彼女は嚴肅に言つた。うつつかりしたことはなさらぬのが一番よろしいわ。」

「誰からそんな智慧を教つたんだね」とアレクセイは吹き出しながら訊いた。あの、お前の若いお嬢さん付きの、ナステンカ(ナスチイヤの指小辭)ぢやないの？ さういふ具合に文明といふ奴は廣がるんだなあ！」

リーザは自分の役を脱線してしまつたのに氣がついて、すぐ氣をとり直した。貴方さうお思ひになりませんの」と彼女は言つた。私はお屋敷へ一度もあがつたことがなすつちやいけません、私は澤山いろんな事を見もしましたし、聞きもしましたか……でも」と彼女はつゞけて、「貴方とお話してゐると聲が摘とれませんか。さあ貴方、さつさとお出なすつて下さいましな、私は私でまゐりますから。では御免遊ばせ。」

そして彼女はまさに動き出さうとした。しかしアレクセイが彼女の手を捉へた。

「お前の名前は何といふの、え。」

「アクリーナ」とリーザは握られた指を放さうと努めながら答へた。でも、放して下さいな、もう私、歸る時刻なんですから。」

「さあ、僕のアクリーナさん、僕は屹度、お前のお父さんの、鐵匠のワシリイの家へ訪ねてゆく

よ。」

「何と仰しやいますの」とリーザは慌てゝ答へた。どんなことがあつても、そんなことをなすつちやいけません！ 私が森の中で旦那方と二人つきりでお話してゐたなことが家へ知とれましたら、酷い目に逢はされるんですからね——お父さんの鐵匠のワシリイは死ぬくらゐぶちますわ。」

「だつて、私はどうしてもお前にもう一度逢はなけりやならない。」

「ぢやあね、いつかもう一度こゝへ聲を探りに参りますわ。」

「いつ。」

「さうね、よろしかつたら、明日でも。」

「僕のアクリーナさん、僕は接吻したいんだ。だが、どうも……ぢや明日、同じ時刻にね、きつとだよ。」

「え、え、よろしうございますとも！」

「だが、お前、瞞しやあしまいね。」

「瞞すもんですか。」

「誓つておくれよ。」

「え、え、それぢやあ、神聖な金曜日（聖金曜日）に誓つてきつと参ります。」

若い二人の者は袂を別つた。リーザは森から出て、野を横ぎつて、庭へこつそり忍び込んで、それから、ナスチャが待つてゐる場所へ急いでやつてきた。其處で、彼女は自分を待ち兼ねてゐた腹心の友の質問に氣のない返事をしながら、衣裳を著更へた。それから彼女は居間へ赴いた。食卓は用意されてゐて、朝飯が備へられてあつた。そしてジャックソン嬢はもはや白粉をつけ、腰高のコツプのやうに見えるくらゐ腰を細く締めあげて、パンを薄くきつたり、牛酪をつけたりして居つた。彼女の父は、彼女が早くから散歩したのを賞めた。

「透明よろけに起きる位體軀のためにいゝことはないんだよ」と彼は言つた

それから彼は、英國の雜誌から蒐めた人の長命の例を五つ六つ引用した。そして百以上まで生きた人は皆、ブランデーをやめたり、夏冬ともに朝起きをしたのだと語つた。

リーザは彼の言ふことを聴いてはゐなかつた。彼女は心の中に、今朝の會合のいろいろな情景や若き狩獵人とアクリーナとの會話などを繰返してゐた。そして彼女の良心は、彼女を苦しめだした。無益ではあつても彼女は、自分達の會話が禮儀ある軌範を踏み外さなかつたことや、あの冗談が何ら眞面目な結果を惹起さないにちがひないといふことを自分自身に説き聞かせようと試みた。

——けれども彼女の良心は、理性よりもずつと聲が高かつた。明日逢ふ約束が他の何よりも一層彼女を悩ました。そして殆んどこの神聖な誓言を守らうといふ決心がつかなくなつた。けれどもさうなつ

たらアレクセイは空しく待つたのち、自分自ら村へやつてきて、鍛冶屋のワシリーの娘、本物のアクリーナ——あの肥つた痘痕あはたら面の百姓娘——を探し出すかも知れない、そして彼女が彼にしかけた悪戯がかういふ風に露顯するのではあるまいか、この考へはリーザをおびやかした。そこで翌くる朝、最初はじめてと同じ變装をして、あの小さな森へ再び行かうと決心した。

一方、アレクセイは有頂天になつて喜んでゐた。一日中彼はこの新しい知己のことを考へてゐた。そして夜は夢に、色の淺黒い佳人の姿が枕邊に現はれた。朝、殆んど夜が明けると明けない中に、彼はもはや着物を着替へてしまつた。銃を荷負ふ違もなく、彼は忠實なスポガールを連れて、野に立ち出て、約束した媾曳の場所へと急いだ。堪へ難い思ひで待つてゐる中に小半時は過ぎた。到頭彼は繁叢の間に青い田舎衣サラファンがちらと見えた。そこで、彼は可愛いアクリーナを迎へるために飛び出していつた。彼女は彼の有頂天になつて有がたがつてゐるのを見ると微笑んだ。しかしアレクセイは彼女の顔に悲哀と不安との痕のあるのをすぐに認めた。彼女はその原因を知りたがつた。リーザは、自分の行爲が甚だたはいいないやうに思はれること、それを自分は後悔してゐること、今度だけは約束を破りたくはなかつたが、この媾曳は最後のものとなるだらうといふことを告白した。そして、彼女はそれ故に、いづれ善い結果にはならないこの交際を絶つてくれと歎願したのであつた。すべてこれは、勿論百姓娘らしい話しぶりであつたのであつたけれども、かゝる思想や感情は



下等社會の單純な娘として、有り觸れたものではなかつたので、アレクセイは驚きに打たれた。彼はアクリーナにその目的を轉じさせるためにあらゆる雄辯をふるつた。彼は自分の心意が誠實であるといふことを確かめ、彼女に後悔させるやうなことは決してない、何事によらず彼女に服従するつもりで逢ふ喜びを奪つてくれるなど熱心に懇願した。彼は眞實の情熱をこめた言葉で語つた。そしてその瞬間には彼は眞に戀したのであつた。リーザは黙つて彼の言ふことに耳を傾けてゐた。「約束して下さいましな」と彼女はたうとうかう謂つた。「決して貴方が村へ私をたづねてお出でなさないといふこと、私の方で決める場合のほかには決して私と逢はうとなさないといふことをね。」

アレクセイは神聖な金曜日に誓つた。しかし彼女は微笑ながら彼を遮つた。

「私は誓つていたときはたたくはないんですよ」と彼女は謂つた。「貴方のお言葉で十分ですわ。」それから彼らは森の中を彼地此地逍遙しながら、二人とも狂々しい様子で話を始めた。が、つひにリーザは彼にかう言つた。

「もう私、家へ歸る時刻ですわ。」

彼らは別れた。さうしてアレクセイがひとり取り残されたときに、二度逢つたばかりで單なる田

舎娘がどうしてかゝる効果を自分に贏ち得たのか、合點がゆかなかつた。彼とアクリーナとの關係は、彼にとつて全部が小説的な魅力であつた。そして、この不思議な若い娘の禁止令が非常に苛酷に思はれたけれども破約しようなどといふ考へは、たゞの一度も彼の心に宿つたことがなかつた。實際アレクセイは、その縮命的なつながりにも拘らず、神秘的な交渉と、その憂鬱な迷に醒めきつたやうな様子にも拘らず、無邪氣な快樂を享け得らるゝ純潔な心を持つた善良な、情に脆い青年なのであつた。

私がおもひも單に自分の希望のみに耳を傾かせるべきものであつたならば、茲に若き男女の會合に就て、彼らの相互に高まりゆく情熱、彼らの信愛、占有、そしてその會話に就て精密な記述に立ち入るであらう。けれども私は、讀者諸君の大部分が、私の満足を分擔して下さらないことを承知してゐる。かやうな詳述は、いつも退屈な興味のないものと思はれるのである。それ故私はそれらを省いて、たゞかういふことを書くに留めておかう。つまり二ヶ月と経たない中にアレクセイはもはや絶望的に深く思ひつめてしまつてゐた。そしてリーザは事實をちつとも外面に表はさなかつたけれども同様であつた。二人とも現在は幸福で、未來のことなどは聊かも思ひ煩らはなかつたのである。

解き難い躑躅に繋がつてゐるといふ思想は、屢々彼らの心をかすめた。けれども、彼らはその事については斷じてお互に話し合つたことがなかつた。その理由は明白であつた。アレクセイは、か

の可愛いアクリーナに非常に惹きつけられてゐながらも、自分と貧乏な田舎娘との距たりを忘れることが出来なかつた。然るにリーザの方では、兩家の父親の間の憎しみ合ひを知つてゐたので、互の和解を敢て望むわけにゆかなかつた。剩へ、彼女の我儘は、トギロヴォの地主を、最後にブリローチナの鍛冶屋の娘の足下にしてみてやりたいものだといふ漠然としたロマンティックな希望によつて密かに勵まされてゐたのであつた。全く突然に、彼ら相互の關係を中斷せんばかりに脅かした重大事件が起つた。

ある晴れた冷い朝——かういふ朝はわが露西亞の秋の季節には極めて普通なのであるが——イワアン・ペトロヴッチ・ベレストーフは六匹の獵犬と、一人の犬守と數人の鳴子を持つた馬丁とを連れて、馬に騎つて出掛けた。それと同じ時刻に、ゲレゴリー・イワノヴィチ・モオロムスキーはこの美しい日和に誘われて、<sup>きり</sup>截尾の牝馬に鞍をおかせて、英國式に耕されてゐる領地を訪づれてみようと思つたのであつた。森へ近づくと彼は、かの隣人が狐の皮のついた外套を著て馬上に意氣揚々とまたがりながら、從者達が大きな聲をあげ、鳴子を鳴らして矮林の中から追ひ出す野兎を待つてゐるのを見た。もしもグリゴリー・イワノヴィチがこの遭遇を豫想してゐたならば、確かに彼は異つた方向へ行つたであらうが、しかし彼は全く思ひがけなかつたので、著彈距離以内でベレストーフとばつたり顔を合してしまつたのであつた。もうどうにも仕方がなかつた。モオロムスキーは文

明的歐洲人らしく敵の方へ馬を進ませて、慇懃にベレストーフに會釋した。ベレストーフは主人の命令に従つて公衆にお辭儀をするところの、鎖で繋なされた態のやうな特殊な體裁で挨拶を返した。

その瞬間に、野兎が森から追ひ出されて、野を横つて走つて行つた。ベレストーフと犬守とは大聲に叫んで、犬を放ち、それから跡を追つて馳せ去つた。モオロムスキーの馬は獵に慣れてゐないので、驚いて、駈け出した。モオロムスキーはたくみな騎者であることを自ら誇つてゐただけあつて、手綱をしかり引緊めた。そして不快な仲間から救ひ出してくれたこの出來事を内心喜んだ。しかし馬は豫じめ氣附かなかつた峽谿のところまで來ると、突然棒立ちになつたので、モオロムスキーは鞍から轉げ落ちた。非常な力をもつて凍つた地面へ叩きつけられた彼は、自分の截尾の馬を呪ひながらそこにぶつ倒れてゐた。が、その馬は驚愕から我に還つたかのやうに、騎者のゐないのを感じずるや否や、俄かにそこに立留まつてしまつた。

イワアン・ペトロヴッチは急いで彼の方へやつてきて、彼に負傷はなかつたかどうかと訊ねた。その中に犬守は過失をした馬を落着かせて、今しがた轡をとつて引張つてきた。彼はモオロムスキーを鞍に手傳つて乗せた。そしてベレストーフは自分の家へ彼を案内した。モオロムスキーは、彼の恩を感じてゐたので、その案内を拒むわけにゆかなかつた。それで、ベレストーフは兎を捕へた上に自分の仇敵までも、まるで俘虜のやうに怪我させて連れてきたので、喜び勇んで家に歸つた。

この二人の隣人は朝食を一緒に喰べて、互に非常な親しい様子で話をし合つた。モオロムスキーは四輪馬車を貸してくれるやうにと、ベレストーフに懇望した、といふのは打撲傷のために馬に騎つて、家へ歸るやうな容態ではないといふことをどうしても白状せねばならなかつたからである。ベレストーフは石段まで彼を送つて行つたが、モオロムスキーは、明日彼がアレクセイ・イワノヴィチと連れ立つて来て、ブリローチナで親しく會食をしてくれるといふことを、彼に約束させるまでは立ち去らうとしなかつた。こんな風で長い間の深く根ざしてゐた敵意も、きり截尾の馬の驚き易かつたために、明らかに結末が齎らされたのであつた。

リーザはグレゴリー・イワノヴィチを迎へに駈け出して来た。

「どうなさいましたの、お父さま」と彼女は吃驚して言つた。「どうしてびつこをひいていらつしやるの、お父さまの馬はどこにゐるの？ この四輪馬車は誰のでございますの。」

「お前には到底察しはつかないよ、ねえ」とグレゴリー・イワノヴィチは答へた。それから彼は今日起つたすべての事を彼女に話した。

リーザは自分の耳が信じられなかつた。彼女が氣を落ちつける迄もなく、グレゴリー・イワノヴィチは立続けに、明日は二人のベレストーフ——父子——が會食をしに来るといふ話を告げ知らせた。

「何と仰しやいますの」と彼女は眞蒼になつて叫んだ。「ベレストーフが父子で明日私達と會食に參るんですつて！ いゝえ、お父さま、御勝手になさいまし、けれど私はどうしたつて出やしませんよ。」

「お前は氣でも違つたのか？」と彼女の父は答へた。「いつ頃からお前は、そんなに恥かしがるやうになつたのだい、それともお前は小説の女主人公のやうに、親譲りの恨みを固守するといふのかね、いゝ加減に、馬鹿な眞似はしなさんな。」

「いゝえ、お父さま、どんな物をもつてきたつて、どんな寶をもつてきたつて、私、ベレストーフ家の人の面前にや出ません。」

グレゴリー・イワノヴィチは肩をすくめた。そしてそれ以上彼女と口論はしなかつた。何故なら彼は、反對したところで彼女をどうすることも出来ないといふことを知つてゐたからである。彼はそれ故に、あの大變な乗馬の疲れを休めに行つてしまつた。

リザヴェータ・グレゴリーフナは彼女の居間へ退いて、ナスチアを呼び寄せた。彼ら二人は差迫つてゐる訪問について永い間話し合つた。もしアレクセイはかのアクリーナが育ちのいゝ若い令嬢であることを知つたら、何と思ふであらう？ 彼女の行爲について、彼女の立居振舞について、彼女のよく氣が利くことについて彼はどんな意見を懷くであらう？ また一方では、リーザはこんな思

ひがけない會見によつて、いかなる印象を彼に與へるか見たいものだとしてそれを非常に望みもした。……不圖、ある思慮（か）が彼女の心の中を閃きすぎた。彼女はそれをナスチャに傳へた。二人ともそれを面白がつた。そして彼らはそれを實行に移さうと決心した。

翌くる日の朝食時に、グレゴリー・イワノーヴィチは娘に、猶（ま）お前はベレストーフを避ける心算かどうかと訊ねた。

「お父さま」とリーザは答へた。「お父さまがお望なら、私、あの人たちをお迎へしますわ、けれど、一つ条件があるのよ、それはね、私が、どんな風をしてあの人達の前に出てもまた、どんなことをしても、お父さま、叱つちやいけないのよ、それから少しでも驚いた風をなすつたり不快な素振をお見せなすつちやいけないのですよ。」

「またなにか新しい氣まぐれかな！」とグレゴリー・イワノーヴィチは笑ひながら謂つた。「よいとも、よいとも、承知したよ、好きなことを遣るがいよ、わしの黒眼、かちのおはねさん。」

かう言つて彼は彼女の額に接吻した。それからリーザは彼女の計畫を實行するために駈け出して行つた。

かつきり二時になると、六頭の馬に牽かせた露西亞式の四輪馬車が芝地をめぐつて、中庭へ這入つてきた。老ベレストーフは、モオロムスキー家の仕着せを着た二人の従僕に助けられて、石段を

登つた。彼の息子はそのあとから馬に乗つて隨いてきた。そして二人は一しよに食堂へ這入つた。其處には食卓が既に備へられてあつた。モオロムスキーは至極慇懃にその隣人を迎へて、彼らが中食にかゝる前に、花園と庭とを見ていたよきと言つて、手入の行届いた砂利道を連れて歩いた。老ベレストーフはこんな無益な嗜好に消費された時間と努力とを内心慨嘆したが、彼は禮義をはづさないやうに口を噤んでゐた。彼の息子は經濟的な地主の非難にも、大法螺吹きの英國狂ひの心酔にも、ともに與からなかつたけれども、彼がいろいろと噂を聞いてゐたその家の主人の娘が出てくるのを待ち遠しがつてゐた。それに彼の心は、讀者が知らるゝ通り既に約束済みだつたのに、若々しい美は常に彼の空想の上に要求されてゐたのであつた。

客間に歸ると、彼らは皆其處へ坐つた。さうして老人達は自分らの若い頃のことを追想したり、銘々の經歷のうちの逸話を語り合つたりしてゐる間に、アレクセイはリーザの面前でどんな役割を演ずるのであらうと心の中で考へてゐた。彼は冷たい無頓著な様子をしてゐることが、この場合最も適當であらうといふ結論に達したので、従つてそれを實行する用意をしてゐた。扉が開いた。彼はどんなすれつからしの婀娜者の心をも嘸ぞかしぞつとさせたに違ひないほどの平然とした、横柄な平氣さをもつて頭を振り向けた。生憎リーザではなく、それは老嬢のジャックソンであつた。彼女はこつてり白粉をぬり着物を着飾つて、伏目がちに低いお時儀をしながら部屋へ這入つてきたので、

アレクセイの嚴肅な軍隊式の擧手の禮も彼女には氣が附かなかつた。彼はこの混亂を沈めきれないでゐるうちに扉がまたもや開いた。そしてこんど這入つて來たのがリーザその人であつた。

皆立ちあがつた。彼女の父は今しも客人達に紹介しようとしたが、そのとき俄かに彼は罷めてしまつて、唇を噛んだ。……リーザは、かの黒い顔のリーザは、耳の上あたりまで眞白に塗つて、ジャックソン嬢よりも一きわ派手やかに着飾つてゐた。匱の縮れ毛は彼女の髪の毛よりもずつと明るく、ルイナ四世頃の靈のやうに頭にかぶさつてゐた。彼女の袖はボムバドウル夫人の箍骨の入つた袴のやうに馬鹿々々しく張り擴がつてゐた。その胸はといへば、Xといふ字のやうに締めあげられて、まだ曾て質屋にやられたことのない彼女の母のあらゆる寶石が、彼女の指といはず、頸といはず、それから手といはず、輝いてゐたのであつた。

さすがアレクセイもこの變挺な、けばけばしい若い令嬢があつたアクリーナだとは認めることができなかつた。彼の父は彼女の手に接吻した。そこで、彼も非常にいやではあつたが、その例に倣つた。彼が彼女の小さい白い指に觸れたとき、彼にはその指が震へたやうに思はれた。その中にわざと突出されたいかにもコケットらしく靴のために一層引立つて見える彼女の小さい足がちらと彼の眼にとまつた。これは彼女の衣裳の他の部分に對して彼を稍や點頭させたのであつた。衣裳や化粧については是非打明けておかせねばならないといふのは、單純な彼の心が最初の一瞥でそれとは氣附かなかつ

たのであつて、ずつと後になつては疑ひもしなかつた。グレゴリー・イワノヴィチは約束を思ひ出したので、聊かも驚いた色を見せないやうにぢつと辛抱してゐたが、娘の醉狂が堪らなく面白かつた。けれどもどうにかかうにか怵へられさうであつた。しかし笑ふどころでなかつたのは、かの氣障な英國の女教師であつた。彼女は衣裳や化粧が自分の筆筒から引き出されたものであらうと拔目なく邪推してしまつて、憤怒の深い赤らみが彼女の顔の技巧的な白さの下に明らかに見えてゐた。彼女は憤怒の一瞥をその若い悪戯者に放したが、その若い悪戯者は、後で説明をしたのであるが、それには一向氣がつかないやうな振をしてゐた。

彼らは食卓に坐つた。アレクセイは無頓着と失念とを裝ふ自分の役を演じつゞけてゐた。リーザは氣取つた風をして、口の中で佛蘭西語ばかりで話してゐた。彼女の父は、彼女の目的は理解らぬながらも、たゞ萬事非常に面白いことゝして、絶えず彼女を眺めつゞけてゐた。英國人の女教師は怒りに氣が茫つとなつて、一言も物を言はなかつた。イヤアン・ペトロヴィチひとり、氣樂さうであつた、彼は二人前も喰ひ、随分飲んで、獨りて冗談を言つては笑ひ興じ、そして一瞬間毎に益々お喋舌になり、快活になつていつた。

遂に彼らは皆食卓から立ちあがつた。客人達は別れを告げた。そしてグレゴリー・イワノヴィチは自由に哄笑したり責問したりする吐口はげちが興へられた。

「どうしてあの連中にあんな馬鹿げたことをしようなんていふ考へが、お前の頭に這入りこんだの  
だい」と彼はリーザに言つた。だが、お前はどう思つてゐるね、あの化粧は天晴よく御前に似合ふ  
よ、わしは婦人のお化粧のどんな秘訣があるか知らうとは思はないが、もしもわしかお前だつた  
ら、もう疾くにお化粧するやうになつてゐるだらうよ。勿論あんまりこつてりしてはいかん、まあ、  
薄つすらとだね。」

リーザは彼女の計略が成功したのを喜んだ。彼女は父を抱きしめて、父の勸告についても熟考し  
てみせようと約束した。それから憤慨してゐるジャックソン嬢を宥めに急いで行つた。ジャックソ  
ン嬢は非常に不承不承扉を開けることを許して、彼女の辯解を聴いた。リーザは黒い顔のまゝで他人  
の前に出るのが恥しかつた。彼女は別に懇願はしなかつたが……屹度人の善いジャックソン嬢は  
恕して呉れるだらうといふ氣がしてゐた。ジャックソン嬢はリーザが自分の眞似をして、物笑ひの種  
子にしようと思つてゐたのではないと説き伏せられたので、心も和らぎ、彼女を接吻して、和解の  
記念に英國製の顔料の小さな壺を贈物にしたので、リーザは全く眞面目に感謝してゐるやうな風で  
それを受取つた。

讀者諸君はその翌朝リーザが小さき森の密會所へ時を違へず赴いたといふことを容易に想像せら  
るゝであらう。

「貴方は昨日、私達の且那のところへいらつしやつたんでせうね」と彼女は早速アレクセイに言つた。  
「あのお嬢さまをどう思ひになりました？」

アレクセイは彼女を注視しなかつたと答へた。

「まあ、惜しいこと！」とリーザは答へた。

「といふのはどうしてだい」とアレクセイは訊ねた。

「私、噂が本當かどうか、お訊きしたかつたんですもの——」

「どんな噂だね。」

「あの方に私が大變よく似てゐるつて噂なんですが、本當でせうか。」

「なんだ馬鹿々々しい！ お前に比較べたら全くありや怪物だよ。」

「まあ、貴方、そんな言方をなさるものぢやありませんわ、あのお嬢さまは本當にお綺麗で、しか  
もお洒落てすもの！ どうして私なんぞ比較ものになりませう！」

アレクセイはこの世のあらゆる美しい、若い女よりも彼女の方がずっと美しいといふことを誓つ  
た。そして彼女を十分に宥めようとして、リーザが心の底から笑ひ出したくらの滑稽な言ひ方で、か  
のお嬢さんのことを話しました。

「けれど」と彼女は吐息をついて言つた。「そりやお嬢さまが可笑しいかも知れませんが、私は

あの方にくらべたら、貧乏な、無學文盲者ですわ」

「おゝー」とアレクセイは言った。「そんなことでお前は力を落してゐるのかい、お望みならすぐ私が読み書きを教へてあげよう。」

「えゝ、本當？」とリーザが言った。「なぜ私は習はうとしなかつたんでせうねえ」

「あゝ、いゝよ、いゝよ、さあ早速始めようね、」

彼らは腰を下ろした。アレクセイは衣囊から鉛筆と手帳ノートブックを取り出した。そしてアクリーナは驚くほど迅くアルファベットをおぼえこんだ。アレクセイは彼女の智力を全く賞讃せずにはゐられなかつた。翌くる朝彼女は書き方をやつてみることにした。最初のうち鉛筆が彼女にうまく使へなかつたが、數分間の後には、彼女はかなり正確に文字を綴ることができるようになつた。

「全く不思議だ！」とアレクセイは言った。「私達の仕方は確かに、ランカスター式（註現世記の初期カスター氏が紹介した教育方式を暗示していつたのである）よりずっと速成の結果になるだらう、」

さうして事實、第三回目の授業の時にはアクリーナは、アレクセイの全然驚愕すつかりに充たされた注視の下に彼女の通讀を遮へぎられつゝ、「ナタリー・ポヤード家の娘」を啜り讀み始めた。さうして彼女は同じ物語から引出したいつかの警句を一枚の紙に一杯書いた。

一週間経つて、交通が彼らの間に始まつた。彼らの郵便函は古い樫の木の洞穴で、ナスチャがその傳達者となつて働いた。そこへアレクセイは大膽な太い力のこもつた筆跡で書いた自分の手紙を持つていつては、そこで、戀人が優しい筆の跡を走らせた簡単な青い紙片を見出すのであつた。アクリーナはその表言にめつきり優雅な文體を自得するやうになり、彼女の才能は驚くべき迅速で、發達し始めた。

兎角する中イヴァン・ペトロヴィチ・ベレストーフとグレゴリー・イワノーヴィチ・モオロムスキーとの間に最近成立つた交情は、間もなく次のやうな事情のもとに眞誠な友情と變るにいたつた。モオウロムスキーはイヴァン・ペトロヴィチが死んだなら彼の所有は悉くアレクセイ・イヴァノーヴィチの手に譲り渡されるだらう、その場合にはアレクセイはこの州での最も富有的な地主の一人になるだらう、して見るとリーザを彼に娶せることも決して悪くはないと屢々考へた。老ベレストーフの方では、彼の隣人である警澤屋といふよりは彼が名付けてゐたやうに英國狂ひとして認めてはゐたけれども、彼が多くの秀れた性質を、例へば彼が珍らしい手腕を持つてゐるといふことを全く是認しようとしてゐたのであつた。グレゴリー・イワノーヴィチは、名聲噴々として大勢力のあるブロンスキー伯と近い親戚であつた。その伯爵はアレクセイのために頗る役に立つことであらう、モオロムスキーは（さうイヴァン・ペトロヴィチは考へた）定めし彼の娘がそんなに都合よく結婚するの

を見て、喜ぶであらう。かういふ思想を断えず意に留めてゐたために、遂に二人の老人は彼らの思想を互に傳へ合つたのであつた。彼らは互に甘諾し、二人ともこの事件をうまく纏めるために全力を盡さうと約束して、彼らは早速銘々勝手に着手した。モオロムスキーはかのベツシーがかの記念すべき晩餐以來、逢つたことのないアレクセイと一層親密な仲になるやうに説きつけるのは聊か困難だといふことを豫め知つてゐた。彼らは殊更お互にさほど乗氣てはなからうと彼は思つてゐたのである。少くともアレクセイはブリローチナをちつとも訪づれなかつたし、又リーザはイワン・ベトローヴィチが訪ねて来る時にはいつも彼女の部屋に引込んでゐた。

「しかし」とグレゴリー・イロターヴィチは考へた。「アレクセイがもし毎日のやうにわれわれに逢ひに来るとすれば、ベツシーは戀に陥おちすにはゐられまい、それは自然の成ゆきだ、時といふものが何事も定めてくれるのだ。」

イワン・ベトローヴィチは、彼の計畫の成功について少しも不安を感じなかつた。その同じ日の暮方、彼は自分の部屋へ伴を呼びよせパイプに火を點けて、長い間を置いたのちかう謂つた。

「さて、アリオシヤ(註：アレクセイの指小辭)お前はどうしようと思つてゐるね、久しく軍隊のことは何にも言ひ出さないぢやないか、それとも、驃騎兵の軍服がお前に魅力がなくなつたのかい」

「どうぢやないんです、お父様」とアレクセイは恭々しく答へた。「けれどお父様は僕が驃騎兵隊へ

はいらうといふ考へをお好みにならんやうですからね、それにお父様に服従することは僕の義務なのですからね」

「よろしい」とイワン・ベトローヴィチは答へた。「お前が従順な伴であることは、わたしには分つてゐるよ、それがわたしには非常な慰めなのだ。……わたしの身になつてみれば、お前に強ひたくはなし、強ひて……すぐに文官にさせたくもないのだ、が、それはさうと、近々わたしはお前を結婚させようと思つてゐるんだよ。」

「誰とです、お父様」と吃驚してアレクセイは訊いた。

「リザヴェータ・グレゴリーヴナ・フェオロムスキーだよ」とイワン・ベトローヴィチは答へた。

「あれは可愛い花嫁だよ、さうぢやないか」

「お父様、僕はまだ結婚しようなんて考へてゐないんです」

「お前が考へてゐないから、わしがお前の替りに考へて遣つてゐるんだよ、」

「それはお父様のお勝手ですが、僕はリザヴェータ・フェオロムスキーをまるで何とも思ぢやゐないんです」

「今に彼女ちねが好きになるよ、戀愛ラブといふものは時がたつにつれて起るものなんだよ」

「僕はあの人を幸福にすることができるやうな氣がしません」



「あれを幸福にさせることなんぞ、心配しないがいよき、何だ？　それが父の望みを尊重する遣方かい？　そんならいよよ！」

二三三

「お勝手になさい、僕は結婚したくないんです、そして結婚はしません」

「お前は結婚するんだ。さもなければお前を勘當する。さうしてわしの財産はな、どんなことがあろうとも、わしは賣り拂つて、その金を蕩盡して、鏝一文だつてお前に残してはやらん、この事に つひちや三日間お前に考へる餘裕を與へておかう、で、その間はわしの眼に觸れないやうにして居れ。」

アレクセイは彼の父が一度思ひこんだとなると、タラス・スコーチニンが喜劇の中で謂つてゐるやうに、針でも追し出せないことを知つてゐた。しかしアレクセイも父に似てゐて、恰度父と同じやうに片意地であつた。彼は居間へ這入つて世襲權の範圍について考へ始めた。それから彼の思想は、リザヴェータ・グレゴリーエフナの上に轉じ、彼を乞者にして遣るといふ父の嚴かな誓言の上を轉じ、さうして最後にはアクリーナの上に歸つた。初めて彼は、彼女を熱烈に戀してゐるといふことをはつきり知つた。田舎娘と結婚して、兩人の手でする労働によつて生活しようといふロマンチクな想念が、彼の頭に泛んできて、さういふ決定的な第一歩を考へれば考へるほど、益々それが合理的なものらしく思はれてくるのであつた。こゝ暫く森での逢曳は雨天のために絶えてゐた。彼はアタ

リーナに宛て、彼らを脅かす不幸を告げ知らし、結婚を承諾してくれといふ手紙を、最も讀み易い筆跡で書いた。彼は早速森の中の郵便函へ持つて行つた。そして、非常に満足して寢床に這入つた。

翌日、アレクセイはいよいよ彼の決心を固めたので、モオロムスキーを訪ねて、彼に事の顛末をざつとばらんに打あけようと、朝早くから馬で出掛けた。彼はモオロムスキーの義侠心を刺劇して自分の味方に抱き込んでしまふと望んだのである。

「グレゴリー・イワノヴィチさんは御在宅ですか」と彼はプリローチイナの村莊の石段の前で馬を駐めて訊いた。

「いゝえ、」と召使が答へた。「グレゴリー・イワノヴィチ様は今朝早くから馬でお出掛けになりました、まだお歸りになりません。」

「それは困つたな」とアレクセイは考へたが……「ぢやリザヴェータ・グレゴリーエフナさんはいらつしやるかね、」と彼は訊いた。

「はあ、いらつしやいますよ、」

アレクセイは馬からひらりと跳び下りて、手綱を従者にあづけ、さうして取次がせもせず奥へ這入つて行つた。

「萬事は今、解決しなければならぬ」と彼は客間の方へずん／＼歩み向けながら考へた。「俺は萬事を直接リザヴェータに打明けてしまはう。」

彼は這入つて行つた……と、恰も化石したかのやうにちつと突立つてしまつた！ リーザが……否……アクリーナが、可愛らしい、髪の黒いアクリーナが、今は田舎女の衣裳ではなく、眞白な朝衣を着て、彼から届いた手紙を読みながら窓際に坐つてゐたのであつた。彼女は彼の這入つて來たのが聞えなかつたほど氣をとられてゐた。

アレクセイは歡喜の叫びを抑へきれなかつた。リーザは吃驚して、頭をもたげて、叫び聲をあげた。そして部屋から遁げ出さうとした。しかし彼は彼女の前に身を投げて、彼女を引きとめた。

「アクリーナさん！ アクリーナさん！」

リーザは彼に掴まれてゐるのを撈ぎ放なさうと身を悶へた。

「放して下さいな……まあ、どうなすつたの」と彼女は身をひねりながら言つた。

「アクリーナさん！ 私の可愛いアクリーナさん！」と彼は彼女の手を接吻しながら繰返した。

この場の目撃者たるジャックソン嬢には何が何だか薩張わけが分らなかつた。その瞬間に扉が開いてグレゴリー・イワノヴィチが部屋へ這入つて來た。

「あゝ！ あゝ！」とモオロムスキーは言つた。だが、お前さん方の仲はもう萬事話が纏つてゐた

と見えるねえ」

讀者諸君はこの物語の大團圓を記述する不必要な責任を私に恕して下さいであらう。

發

射

私たちはN——といふ小さな村落に駐屯してゐた。野戦將校の生活はすでに知られてゐる。朝あしたには學課と乗馬。晝食は聯隊長の家かまたは猶太式の料理屋で。夕にはぼんす酒と骨牌。N——には一軒の開かれたる家もなく、妙齡の女一人ゐなかつた。私たちはお互同志の部屋でのみ逢ふのが常であつた。そこでは自分たちの軍服の他には何一つ見ることができなかつた。

軍人ではないが、たゞ一人の地方人が私たち交際ソサエタイの仲間入りを許されてゐた。その男はかれこれ三十五歳くらゐであつた。従つて私たちは彼を年長者として尊敬してゐた。彼の經驗が吾々の間にあつて彼に多くの特權を與へ、そして彼がいつもの無人相、頑くなゝ根性、及び皮肉な口調が、私たち若い者の心に深い印象を残した。何らかの秘密が彼の存在を取巻いてゐたらしい。彼は露西亞人の容貌を持つてゐたが、それであつて外國人の名を名乗つてゐた。彼は以前に驃騎兵隊に奉職したことがある、しかも高官で。その服役から彼を隠退せしめ、そしてかかる貧しい村落に——彼はそこで貧しくはあるがしかし放埒に暮してゐた——住むに至らしめた原因については誰とて知つてゐる者がなかつた。彼はいつも皺くちやな黒のフロックを着て、いつも徒歩であるいてゐた。けれども私たちの聯隊の將校は彼の響應に招かれたりなどした。彼の響應といつても事實は、退職軍人のお手

い

製で二皿か三皿、それ以上の獻立にはならなかつたのだが、それでも三鞭酒は瀧のやうにそゞがれた。誰も彼の境遇がどんなであるか、収入がどれほどあるかは知らなかつたし、それらに就て敢て彼にたづねる者もなかつた。彼は重に兵書と僅かばかりの小説とでなれる書籍を蒐集して持つて居た。讀む人があれば彼は喜んでそれらを貸したが、曾て催促したこともなく、その代り彼は借りた書物をその持主に返済したこともなかつた。彼の重なる娯樂は拳銃を發射するにあつた。彼の部屋の壁といふ壁は彈丸に射抜かれてまるで蜂の巢のやうに穴だらけであつた。拳銃の夥しい蒐集が彼の住む貧しい茅屋に於ける唯一の贅澤品であつた。彼の愛好する武器をもつて到達した巧みさは一途に信じられぬほどのもので、もしも彼が誰かの略服帽につけた梨を射落さうと云ひ出したならば、私たち聯隊の者は一人として自分の頭上を狙はれるのを躊躇しなかつたであらう。

私たちの談話はしばしば決闘のことに移つた。シリヴィオ——私はさう呼ぼう——は斷じてそれに加らなかつた。彼に決闘したやうな場合があつたかと問へば、彼は冷淡にあつたとは答へるが、しかしその詳細には立入らなかつた。即ちかゝる間は明らかに、彼に好ましくなかつたのである。私たちは彼の良心に、彼の驚くべき熟練の裏面の不幸な犠牲のやうなものが思ひ出されるのであらうと、推斷するやうになつた。それ以上彼に何ら臆病らしいものがありはせぬかといふ疑ひは私たちの腦裡に決して入らなかつた。世の中には單に容貌だけで、かやうな疑惑を斥けるに十分な人があ

るものである。ところが偶々思ひも掛けぬ出来事が起つて私たち皆んなを驚かした。

二四〇

ある日、私たち將校の十人ばかりがシリヴィオの許で會食した。例によつて私たちは所謂大酒を呷つた。食事のあとで私たちは骨牌戲の賭事ギャンブルをなすべくバンク(カルタの名)を持つてきて呉れるやうにと私たちの主人公に申し出た。日頃殆んど札を手にしない彼は暫らく拒んでゐたが、たうとう札を持つて来るやうに吩咐けて、卓子の上に五十ダカートの金貨を置き、さうして勘定するために腰を下ろした。私たちは彼を取まいて遊び始めた。シリヴィオの癖として骨牌戲の最中は全く沈黙を保つて、決して他人と争ふこともなければ辯解もしなかつた。相手の方で誤算することがあつても彼はすぐ不足を拂ふかまたは過剰のものを記入するといつた風であつた。すでに彼のこの癖を知つてゐる私たちは、彼がなすまゝに任せて置いた。ところがこゝにつひ近頃他所から轉してきた一人の將校が居合せた。賭事ギャンブルの進むうちに、この將校は浮つかり一ポイント餘計に得點した。と見たシリヴィオは例の癖で白墨を執つて正しい數を記入した。將校は自分が過失であることを思つて、辯明しようとし出した。シリヴィオは黙つて計算をつゞけた。その將校は我慢し切れなくなつて、刷子ブラシを執ると、彼に無益な記入と思はれる箇所を消してしまつた。シリヴィオは白墨を執つて再び採點を書いた。それを酒と骨牌とまた同僚たちの笑聲とに昂奮させられた將校は、自分をひどく侮辱せられたものと思つたので、憤激の餘り圓卓の上の眞鍮の燭臺を掴みとつてシリヴィオへと投げつけた。シリヴィオはや

つこのことで、その擲け附けられたものをば避け得たのである。私たちは驚愕に充たされた。シリヴィオはくわつとなつて立ち上つた。そして眼をきらきら輝かしながら言つた。

「貴方、出て行つて下さい、でもこんなことが私の家で起つてよかつた。」

この結果がどうなりゆくかについては、聊かの疑問も私たちの間で差挿む者はなかつた。そして私たちは新參のこの同僚をばもはや殺されるものとして眺め遣つたのである。將校はシリヴィオが所望のぞむならばどんな方法であつても、この侮辱の復讐に對して準備があるぞと言ひ捨て、戸外に出て行つた。骨牌はなほ數分間つゞいたが、私たちの主人おほいにとつては骨牌どころではあるまいと感じたので、私たちは續々とおいとました。そして近々聯隊に缺員が出来る模様だなど、口數少くない言ひ交はしながら銘々の屯營所へ散り去つた。

翌日、馬術學校で私たちはもう、あの憐れな中尉は今も猶生きてゐるかどうかと相互に訊ね合つてゐる折しも、中尉自身が姿を現はした。私たちは彼に同じ質問をした。すると彼はまだシリヴィオから何の音沙汰もないと答へた。さう聞いて私たちは驚いた。私たちがシリヴィオの住家へ行つてみると、庭で門の上に糊附けにした骸子を續け撃ちに射撃しつゝある彼を見出した。彼は平常のやうに私たちを迎へたが、前夜の事件に就ては一言も言はなかつた。三日を経過したが、中尉は依然として生きてゐた。私たちは呆氣にとられて話し合つた。シリヴィオはいつたい、決闘しないでゐら

れるのだらうか」と。

シリヴィオは決闘しなかつた。彼は至極軽い申譯で満足し、彼の敵と和解することになつた。これはすべて私たち青年の輿論を非道く挫いた。何よりも膽力に缺けてゐるといふことは青年たちには最も怒し難いものである。すべて青年たちは常に勇敢であることに於て人の價値の最上を認め、且つあらゆる悪癖をも、たと勇敢なるが故に許すものである。けれどもすべての事は次第々に忘れられていつて、シリヴィオは茲に以前の權力を取戻すに至つた。

なかに一人、私のみはなほ彼に近附くことが出来なかつた。性來ロマンチックな想像を賦與されてゐる私は、生活振が諷してしかも私には神秘的な物語の主人公のやうに見える彼に、他の誰よりも一しほ強く惹きつけられてゐたのであつた。彼は私を愛してゐた。少くとも私と二人つきり居るときには、彼の習癖の冷笑的な口調を罷めて、質朴と異常なる親密とをもつて色んな問題を話し合つたものである。併しながらあの不幸な出来事の晩からは、彼の體面は汚され、其恥辱をすら對手の望にまかせてその儘に彼が許して遣つたのだといふ思想が、私の心に浮んで、従前のやうに彼に伍することを妨げた。私は彼に逢ふのさへ恥ぢた。シリヴィオは賢く、經驗家であつたので、私のこの感情の原因を洞察してゐた。これは彼を惱ましたやうに見えた。少くとも私は一二度彼が、おのれの事を私に辯明しようと望んでゐる所を見抜いた。けれども私はさういふ機會を避けてゐた。それでシリ

ヴィオはその企てを抛つてしまつた。それ以來といふもの、私はたゞ同僚たちの面前でのみ彼に會ひ、従つて前のやうな私たちの打解けた話は止んだ。

職業上の多くの事や娯樂やに依つて心を領せられてゐる都會の住民たちは、村や小さい町に住む人々よりか餘程氣輕で、多くの感覺に對する念を持つてゐないのである。たとへば郵便物の到着を待つてゐることでもさうである。日曜と金曜とはきまつて私たちの聯隊の事務所は將校たちで充滿した。あるものは金を待つた。あるものはまた手紙を、また新聞を。通常封書はそこで開封され、新聞記事の項目は一人から幾人かへ傳へられて、従つて事務所は最も盛んな光景を呈した。シリヴィオは私たちの聯隊に宛名されてくる手紙を受取ることになつてゐたので、大概それらを受取るために其處に居た。

或日、彼は一通の手紙を受とつて、その封を頗る堪へられないやうな面持で引裂いた。彼はその内容を讀んだとき、その眼は光つた。銘々自分自身の手紙に忙殺されてゐる將校たちには、何にも眼に止まらなかつた。

「諸君」とシリヴィオが言つた。「私は速刻お別れしなけりやならない事情がありました、今夜立ちます。どうか諸君、お別れの晩餐に私宅へ來て頂きたい。私は皆さんを待つてゐます」私の方へ向つて彼は附け足した。「屹度いらして下さる。」

かう言ふと彼は急いで出て行つた。そして私たちはシリヴィオの家で逢ふのを同意しつゝ、それ  
その屯營所へと解散した。

私は定められた時刻にシリヴィオの住家に着いた。そして殆んど聯隊のものが全部そこにゐるの  
を見た。すでに彼の道具は荷造りされてあつて、彈丸の穴のあひた露出の壁のほかは何も残つてゐ  
る物はなかつた。私たちは卓につひた。私たちの主人公は極めて剽輕にしてゐた。その快活さが  
速かに他の者たちにまで移つていつた。木栓は一瞬ごとに抜かれ、盃は斷え間もなく泡立つてゐた。  
さうして私たちは此上なき熱誠をもつて、私たちの別れゆく友達の楽しき道中とあらゆる幸福とを  
希がつた。夜も更けて私たちは卓子から立ちあがつた。皆の者の別離の挨拶の済むのを待つてゐた  
シリヴィオは、私が立ち去らうとした恰度その瞬間、私の手を捉らへて引きとめた。

「貴方にお話したいことがある」と彼はひそやかに謂つた。  
私は背後の方に突立つてゐた。

客は出て行つた。さうして私たち二人だけが残つた。互に相對坐して私たちはパイプをくゆらし  
た。シリヴィオは先刻の激動した喜びの跡もなく、ひどく困惑してゐるやうに見受けられた。彼の  
緊張して、蒼白い顔、輝やける眼、それに口から流れ出づる濃い煙は、眞個に惡魔のやうな相好を  
彼に與へた。數分經つて漸くシリヴィオは沈黙を破つた。

「ことによるとこれで私どもはお眼にかゝれないかも知れませんよ」と彼が言つた。お別れする前  
に私は貴方にお話しておきたいことがあります。貴方は私あまり人の評判を氣にかけない男だと  
思つてゐるでせう、しかし私は貴方が好きなんです。だから貴方の心に悪い印象を残したまゝで出  
のが心苦しく感ぜられるのです。」

彼はこゝで鳥渡言葉を切つて、パイプの灰を落し始めた。私はぢつと坐を眺めたきり、口を襟む  
で坐つてゐた。

「そりや貴方には不思議に考へられたでせう」と彼はつゞけた。「私がああ酔どれの白痴のR——に  
本懐を遂げる要求をしなかつたことはね。だがね、私に武器を選択させてくれたら、私の生命こそ  
大した危険はないが、あの男の生命は私の掌中にあることを君は承認してくれてせう、それも私  
が寛大にしてやつたばかりに穩當に行つたのです、しかしながら私は嘘は言ひたくない。萬一私の  
生命に些しの危険もなしに、R——を罰することができたならば、それこそ私は決して彼を宥さな  
かつたのです。」

私は驚いてシリヴィオを眺めやつた。かやうな告白はまるで私を仰天させた。シリヴィオはあと  
をつゞけた。

「眞個にさうです。私は自分を死に陥れる權利を有つてゐません。六年以前でしたが、私は鬚打を受

けたことがありました。しかもその敵は今だに生きてゐるんです。」

私の好奇心はひどくそゝられた。

「貴方はその男と決闘しなかつたのですか」と、私は訊いた。「きつと何かの事情が引分たのでせう？」

「私は決闘しました」とシリヴィオは答へた。「そら、こゝに決闘の記念がある。」

シリヴィオは起ち上つて、ボール箱から金の總と縫箔とにしてある赤い帽子を取り出した。それには佛蘭西人が「警官の帽子」と呼ぶところの條がついてゐた。彼はそれを冠つた。——額の上一吋位のところが弾丸に射ぬかれてあつた。

「私が驃騎兵のある聯隊に奉職してゐたことは。」とシリヴィオはつゞけた。「それは貴方も御存知のはづです。私の氣性はといへば貴方がよく知つてゐなされる。私は人を指揮することに慣れてゐました。少年時代からこれは私の熱望してゐたところのものでしたのです。その頃は亂暴するのが一種の流行で、なかにも私は隊中のあばれ者の隨一でした。私たちは酒浸りになるのを誇りにしてゐました。私はね、あのデニス・ダウイド(譯註「アレキサンダー一世の時」)と謳はれたあの有名なブオルツォ(譯註「暴飲家として評判」)の(譯註「高橋驃兵將校である」)にさへ飲み勝ちましたつけ。私たち聯隊の決闘は頻々として起り、その度ごとに私は證人であるか、當事者だつたのです。同僚たちは私を崇拜してゐました。しかるによく

交送する隊長は避けられない悪魔だとして私を眺めてゐるのでした。

「私は密かに自分の名聲を喜んでゐたのです。その頃、私たちの聯隊へ財産家で名門の一青年が、——その名は申されないが——入營しました。ほんとうに私はまだ生れてからあんな好運見に出遭つたことがない！ 想像しても見たまへ、若くて、伶俐で、美しくつて、しまりのないほど快活で、極めて向う見ずの勇敢な、名望あり、言ひ盡せない程の資産のある青年を——これらのすべてを想像して見たまへ、さうすればその男が私たちの間に確かに生ぜしめたであらう結果の、幾分の思想を貴方は形ち造ることが出来ます、私の權勢ときたら振つたものでしたよ。私の名聲に眩惑されたその男は、親交を求め始めてきたのですが、私は冷淡に受け流したので、少しも残念がりもしないでその男は私から遠のいていきました。私はその男を憎みました。聯隊に於ける、また婦人社會に於ける彼の成功は、私を全く失望の淵にと連れてゆきました。私はそろそろ喧嘩して遣らうと求めだしたので、こちらが短詩を作ると、彼も短詩で答へる。しかも彼のはいつも奇想天外的のもので、私のよりも鋭かつた。その上比較にならないほど面白いものだつたのは言ふまでもありません。彼はそれを笑談でしたのであるが、さて私にとつては怨みでした。たうとう波蘭士人の地主の開いた舞踏會で、彼がすべての貴婦人達、取りわけ私の關係してゐる女主人の注目の目標となつてゐるのを見ると、私は彼の耳に、あるつまらない粗野なことをさゝやいたのです。彼は憤慨しました、そして私に鬚打を與



へました。私どもは軍刀を握つた。貴婦人たちは氣絶して倒れました。で、一時は私たちは引分けられたのですが、その同じ夜に私たちは決闘しに出掛けて行つたのです。

「ちやうど夜が明けようとしてゐた頃でした。私は指定された場所に三人の介添人と共に立つてゐました。言ひ難いいらした氣持で、私は相手を待つてゐたのです。春の太陽は昇つて、もはや暑くなりかゝつてゐた。私は遠くに彼が来るのを認めました。彼奴は徒歩で、一人の介添人を従れてやつてきたのです。私たちは逢ふために進んでゆきました。彼は櫻桃の實を一ぱい入れた軍帽を手にしながら近附いてきたのです。介添人たちは私どもの距離を二十歩量かつて呉れました。まづ私が發射することになつたのですが、しかし私の胸の動揺はいかにも強くて、私は自分の手を確かに信賴することができなかつたのです。そこで私は自身を静める猶餘を與へられたいと思つて、最初の發射を彼に譲りました。これには相手が同意しませんでした。そこで籤で決めることにしました。最初の番はやはりあの永久に幸福を愛する奴に定まりました。彼は靦を私につけました。そして私の軍帽を射抜きました。こんどは私の番になつたのです。彼の生命はたうとう私の手の裡にあつたのです。私は幽かでも彼の中に不安な影があるかどうかを看破しようと努めながら熱心に彼を眺めました。彼は私の拳銃の下に立つてゐました。それにも拘らず彼は軍帽から熟した櫻桃の實を選み出しては種子を吐き出すので、その種子は私のところまでも飛んでくるのでした。かうした彼

奴の無頓着さは私を極度に悩ました。彼が自分の生命にかゝはる悉くを、價值のないものに歸してゐた場合には」と私は考へました。(彼の生命を奪ひ取つたところで何の役に立たう?) 邪惡な思想が私の胸に閃めき過ぎていつたのです。私は拳銃を下ろしました。

(君は今死に面して準備してゐるやうには思はれない。)と私はその男に言ひました。(君は朝飯がやりたいんだね、僕はその邪魔はしたくないよ。)

(いや、少しも邪魔にはならない。)とその男は答へました。(さあ、どうぞお射ちなさい。だが君の氣まゝにしたまへ射つのは君の番だ。僕は君が射つのを、何時でも御座あれと用意してゐるんだ。) 私は介添人の方へ振向き、今日は射ちたくないと言つたので、かうしてその決闘も終りを告げたのです。

「私は現役を辭して、この小村へ隠退しました。その時からといふものは一日たりとも復讐に就いての思慮を持たないで過こした日とはありません、さうして今その秋がきたのです。」

シリヴィオは衣囊ポケットからその朝受とつた手紙を取り出して、私に讀めと言つて渡した。ある人——彼の代理人と思はれるある人がモスコイから、彼に書いたもので、それには某氏が若い、しかも美しい令嬢と正式の結婚をしようとしてゐるとあつた。

「君にはこの某氏が誰だかといふことはお察しがつきませう。」とシリヴィオは言つた。私はモスコ

1に行きます。今あの男が結婚に際しても、曾て櫻桃の實を食べながらしたやうに、あの無頓着さで死に面接するかどうかは観物です！」

かう言ひながらシリヴィオは起ち上つて帽子を床の上に投げつけた。そして檻の中の虎のやうに部屋をあちこち大股に歩きだした。私はじつと彼の話を聴いてゐた。妙にこんがらがった感情が私を擾き亂した。

下婢が這入つてきて、馬車の用意されたことを告げた。シリヴィオは私の手を堅く握つた。そして私たちは互に抱擁した。彼は馬車の中に席をとつた。そこには二箇の鞆が横はつてゐて、一箇は拳銃が、一箇は彼の所有品が収まつてゐた。私たちはもう一度さやうならを云つた。そして馬は駆け出していつた。

二

數年か経過して、家庭上の事情から私はM——郡の貧しい寒村に住むのを餘儀なくさせられた。農業に従事しつゝ私は、以前の騒々しく、煩ひ多き生活を考へるとひそかに嘆息せずにはゐられなかつた。あらゆる事の中で最も困難なのは春と冬の晩、全く孤獨で過すやうに慣れねばならない事であつた。夕食時分までは仕事場を巡視したり、或は新しい建築物を見廻つたりして村長と打語ら

ひつゝ、どうにかかうにか私は時間を潰すことができたのだが、黄昏になるや否や、私はいかに身を處すべきかを知らなかつた。戸棚や物置で私が搜し出した數冊の本はもう暗誦してゐるほどであつた。私の家主のキリロフナが憶えてゐるすべての物語は、どれもこれも再三再四繰り返し聞かされた。百姓の女どもの唄は私に憂愁を感じさせた。私は酔ひ心になつてみようと試みた。けれどもそれがために頭痛を覚えるばかりであつた。それに猶白状するが、實際私は單なる懊惱から酒呑みに、所謂私たちの地方に前例の多い、悲惨な飲だくれの仲間になつてゆくのを懼れてゐたのである。

僅かに二人三人の酔どれのほか私の周圍には近い隣人はなかつた。その隣人たちの話といふものは大部分吃逆や溜息から成り立つてゐる始末である。孤獨は彼ら社會に對して寧ろ採るべきものであつた。最後には私は能るだけ遅くまで飲んで、能るだけ早く床につくやうに決めた。かういふ仕方では夜間を短かめ、晝間を長くした。そしてその計畫が私に非常に良く、適應されたことが見出された。

私の住家から四露里の所にB——伯爵夫人に屬する富な領地があつた。しかしそこにはたゞ管理人のほか、誰も住むてはゐなかつた。伯爵夫人は結婚した年に僅か一回きり、その領地を訪づれたがそれも一ヶ月足らずしか駐つてはゐなかつた。ところが私が隱遁した次の春に、伯爵夫人はそ

の良人と一緒にそこで避暑するために彼女の領地へ来るといふ噂が廣まつた。その噂は眞個になつた。何故といつて彼らは六月の上旬に到着したのだから。

この富める隣人の到着はまさに田舎人の生活に重大なエポックを劃したものであつた。地主や地主の屋敷の者たちは二ヶ月前から、そして三年後までもこの噂で持ち切つてゐた。私にあつては、實際のところ若く美しい隣人のきたといふ通知が強く私を惹きつけた。私は堪へがたく彼女を見ようと熱望した。それ故、彼女の到着後第一の日曜に私は午食もそこそこに、彼らの最も近い隣人であり、且つ最も恭順な下僕として伯爵夫人と彼女の良人とに敬意を表さむがためにA——村へ赴いた。

從僕が私を伯爵の書齋に導いて置いて、すぐ取次ぐために出て行つた。廣やかな部屋はすべて手の行届く限りの贅澤品が備へ附けられてあつた。壁の周囲には書籍のぎつしり滿まつた戸棚が立つてゐて、その上に青銅製の胸像が載つてゐた。大理石の煖爐棚の上には大きい鏡があり、床には一面に緑色の毛氈が敷きつめられてあつた。自分の見窄らしい隠家にある、贅澤品に慣れてゐないうへに長い間、財産家らしい人に逢はなかつた私は、恰も地方の請願者が大臣の到着を待つやうに、幽かに戦慄きながら伯爵の出てくるのを待ち受けてゐた。扉があいて、眉目秀麗な三十年輩の人が部屋に這入つてきた。伯爵は隔てなく懇懇な態度で私に近づいた。私はつとめて自分を勵まし、まづ自

分を紹介したが、それも彼は、私を先んじてしまつた。私たちは坐つた。彼の穩やかな快い話し振りは、直きに私の氣拙い羞恥を追ひ拂つてくれた。で、私はもはや平常の沈着さを恢復しかけてゐた。その矢先に伯爵夫人が突然這入つてきたので、私は前よりも一層ときまぎしてしまつた。彼女は實に美人であつた。伯爵は私を紹介した。私は打解けた様子を繕はうとしたが、しかし寛ろいだ態度をとればとるほど自分の氣拙さを感じるばかりであつた。夫妻は私に落着く暇を與へ、新しい知己に慣れしめるために、私を良い隣人として待遇しながら遠慮なくお互に話しを始めた。その間私は部屋の内を、書物や繪畫を見ながら歩き廻つてゐたが、なかに一枚の繪が私の注意を惹いた。それはスイスの風景が描かれたものであつた。けれども私を驚かしたのはその出来榮えてはなく、カンパスが二つの彈によつて——一つは他の恰度眞上になつてゐた——射ち貫かれてあることであつた。「ほう、見事に射つたもんですなあ」と私は伯爵の方へ振返つて言つた。「いかにもさうです」と彼は答へて「有名な射手なんだからね……貴方も射撃は得手ですか」と言葉をつづけた。

「え、可なり」と私は答へた。到頭會話が自分の精通してゐる問題に向いたのを、心中喜びながら、「三十歩のところなら、私は間違ひなくカードに命中することができます——勿論手なれた拳銃でね。」「まあ」と伯爵夫人は非常に興味ある面持をして言つた。「ぢや貴方、貴方も三十歩の所でカードに

命中あてられて？」

二五四

「あゝ、いつか私たちもやってみませうね」と伯爵は答へた。「以前は私もかなり射やつたものです、だが、私も拳銃を持たなくなつてからもう四年になるからね。」

「ぢや」と私が言つた。「そんなては閣下が二十歩のところのカードにも命中らないのは賭けるまでもありませんね、私の實驗では拳銃はまづ毎日練習せねばなりませんからな、隊にゐる時は私も上手な射手の一人に數へられてゐました。あるときのこと自分の拳銃を修繕にやつて、一ヶ月間ずつと拳銃を手をいたしませんでした。するとどうでせう、閣下、まづ最初第一回の射撃で、私は硝子瓶の目標に二十五歩の所で四度つゞけさまに失敗しました。私たちの中隊長は口の悪い、面白い男でしたが偶然にもそこに居合せてゐまして、私にかう言ひましたよ、（おい、君、君の手は屹度瓶にねらひがつかないだらう）つて。いや、閣下、練習を輕んずることはできませんな、でないとおあたりませんか、ところがその頃私の逢つてゐた上手な射手は毎日少くとも食前三回は射撃しましたね、こりや、その人が日々飲むブランデーの盃數よりも多かつたんです。」

伯爵夫妻は私の話し始めたのを喜んでゐるやうに見えた。

「で、その人はどんな風に射撃しました」と伯爵は私に訊ねた。

「まあ、こんな鹽梅しほばいでした、閣下。その人が壁にとまつてゐる蠅を見つけると——おや、奥さま、笑

つていらつしやいますね、けれどそれは誓つて眞個ですよ、もし蠅を見るとその人はかう呼びました、（おい、クジカ、拳銃を——）クジカは裝填した拳銃を持つてきます、と、——バンクー——さうして蠅は壁に射ち潰されし了ぶのです。」

「や、驚きましたな」と伯爵が言つた。「で、その男の名は何と言ひましたね。」

「は、シリヴィオ。」

「シリヴィオ！」と伯爵は座席から躍り立ちながら叫んだ。「貴方、シリヴィオを御存知ですか。」

「どうして知らないことがありませう、閣下、私たちは親友だつたんですもの、シリヴィオはわれわれの同僚として扱はれてゐたのです、しかしそれからもう彼此五年、あの男のことについては何のおとづれも聞きません。して見ると、閣下も御存知ですか？」

「おゝ、さうとも、知つてゐますとも、ときにあの男が貴方に何か變な事件を話したことはありませんでしたか。」

「閣下、それは舞踏會でいたづら者がシリヴィオに鬚打を喰はしたといふことですか。」

「その横着者の名をあの人は話しましたかね。」

「いや、閣下、それは申しませんでした。……あゝ、閣下！」と私はその眞相を推測しながらつゞけた。「お許し下さい、……私は知りませんでしたから……それや全く貴方ではなかつたでせうか。」

發射

二五五

「やうです。この私です。」と伯爵はひどく掻き亂された體で答へた。さうしてこの射抜かれた繪こそは私たちの最後の會見の遺物なんです。」

「あら、あなた。」と伯爵夫人は言つた。「どうぞそのことについてちやおつしやつて下さいますな、私、聽いてるばかりでも、恐ろしすぎるんですもの。」

「いや、さうでない」と伯爵は駭して「私は何も彼も話してしまはう、この方は、私がこの方の友達をどうして侮辱したかを御存じなんだから、ね、シリヴィオがどんなに讐返したかとお知りになりたいのは却つて當然だよ。」

伯爵は私の方に椅子をすまませた。そして私は燃え立つやうな興味をもつて、次のやうな物語に聽き入つた。

「私が結婚したのは今から五年前でした。最初の月——ホネムーン密月に私はこの村のこゝで過しました。この家に對しては私は生涯に最も幸福だつた僅かの間の生活とよもに、一生の中で最も苦痛であつた思ひ出を有つてゐるのです。」

「ある夕方、私たちは騎馬で一緒に出かけました、と妻の馬が進まなくなつたのです、妻は怖がつて、手綱を私に渡しました、そして歩いて家に歸りました。私は騎馬で一足先へ戻つてくると、中庭に旅行用の馬車が駐まつてゐるのを見ました、そして私の書齋で、名は明あきなかつたが單に私に

用があるといふ一人の男が私を待つてゐると聞きました。私が部屋に這入つてゆくと暗がりの中に埃にまみれ、數日生えのびた鬚を生やした男が、こゝの燠爐の傍に立つてゐました。私は男の風手で憶ひ出さうと努めながら近寄つてゆきました。

（君は僕が解らないのか？ 伯爵。）とその男は慄へ聲で言ひました。

（シリヴィオ！）かう叫んだ私は、實際きよつとして身の毛のよ立つのを感じました。

（確かにさうだ）と彼は續けました。（僕には一發借りがあるから、拳銃の支拂にやつてきたんだ、用意はいゝか？）

「シリヴィオの拳銃は横衣囊からはみ出てゐました。私は十二歩量つて、あそここの隅に立ちました。その間も妻が戻つて來ないやう、また相手の發射が一刻も早いやうにと希つてゐました。シリヴィオは躊躇しました。そして燈りをつけて呉れと云ひました。蠟燭を持つて來させました。私は扉を閉めて、誰も這入つて來ないやうにして再び發射してくれと願ひました。シリヴィオは拳銃を引出して覗ひをつけました。……私は秒數を數へてゐました。……彼女のことを考へました。恐ろしい瞬間が過ぎました！ シリヴィオは手を下ろしました。」

（残念だが、）とシリヴィオは謂ひました。（この拳銃は櫻桃の實で裝填されてゐない。……丸は重い。これが僕には決闘ではなくて人殺しのやうに思へる。僕は素手の者を覗ふのは不慣なんだ。もう一

度初めつから遣り直さう、儂たちは誰が先手か、籤で決めよう。」

「私の頭脳はぐらぐらしてきました。……私は同意したやうに思ひます……。たうとう私たちはもう一度拳銃を装填しました。二つの札を選んで、シリヴィオはそれを、曾て私によつて射貫かれた軍帽の中へ入れました。ところが私がまた最初の番に當つたのです。」

「君は悪魔のやうに運のいゝ人だね、伯爵」とシリヴィオは冷笑を含めて言ひましたが、私はその冷笑を決して忘れることはできません。」

「私は一體どうしたのか、シリヴィオがどうして私にさうさせたかは解りません……。とにかく私は發射しました、さうしてそこの繪に當つたのです。」

伯爵は指で、射貫かれた繪を指差した。その顔は火のやうに赫くなつてゐた。夫人は彼女のハンカチーフよりも白かつた。そして私は絶叫するのを抑へることができなかつた。

「私は發射した」と伯爵はつゞけた。「けれど幸にも私の狙ひは外れました。そのときシリヴィオは……その瞬間、シリヴィオが本當に恐ろしかつたのです……。シリヴィオは私に狙ひを附けるために手を挙げました。突然、扉があいて、マーシヤが部屋へ駆け込んで、悲鳴をあげながら私の肩に飛びつきました。彼女の出現がすべて私の勇氣を復活させました。」

（あ、お前。）と私は彼女に謂ひました。お前、解らないのかい？ 私たちは調弄つてゐるのだよ。な

ぜお前はさう怖がるのだ！ 水の一杯も飲んでからこゝへ來なさい、私は古い同僚の友人をお前に紹介してあげよう。」

マーシヤは猶も疑つてゐました。

（話して下さい、主人の申しますことはほんとうでせうか？）と妻は物恐ろしいシリヴィオに振返つて言ひました。（ほんとうに貴方がたは笑談をなすつていらつしやるのでせうか？）

（ところが奥さん、御主人はいつも笑談ばかりだ。）とシリヴィオは答へました。（以前に一度この人は笑談に私の顔に鬢打を喰はしました。そら、笑談に私のこの軍帽を射抜いたのです。たつた今も私に對して笑談に射損じをやつた所です。今度は私が笑談をしなければ……）

「かう言つてシリヴィオは私を覗はうとして拳銃を擡げました——妻の面前で！ マーシヤはシリヴィオの足元に身を投げました。」

「立ちなさい、マーシヤ、恥ですぞ！」と私は物狂ほしく叫んだのです。（どうぞ、君、憐れな家内に對して笑つて下さるな、さあ、撃つか、どうか？）

（いや、撃たない）とシリヴィオは答へました。（僕は満足した。君の狼狽を、君の驚いたのを見たからなあ、そして君をして僕に對して發射せしめた。これで十分だ。どうか僕を憶へておいてくれたまへ。ぢや君を君の良心に委せる。）

シリヴィオ

「かうしてシリヴィオは出て行かうとして振返つたが、戸口に鳥渡立ち止り、私の射抜いた繪を眺めてゐましたが、彼は殆んど狙ひもしないであれを射つて姿を消しました。妻は悶絶して倒れ、下婢どもは敢て彼を止めようとしませんでした。下婢どもはたゞあの男の容貌だけですつかりおじけつてしまつてゐたのです。シリヴィオは玄關へ出て馭者を呼び、私の我れに返る前に行つてしまひました。」

伯爵は黙つた。かやうにして私は、その最初あれまでに深く印象された物語の結末を知つたのである。それ以後、私はこの物語の主人公に一度も逢つたことがない。シリヴィオはかのアレキサンダー・イブシランチの暴動に際しヘタイリストの分遣隊を指揮して、スクリヤナ附近の戦闘で死んだとのことである。

驛 長

W.M.

驛長を誰とて悪く言はない者があり、誰とて驛長と口論しない者があらうか。誰とて憤慨した瞬間に、彼らの強奪や粗暴や怠慢に對して甲斐なき不平を書留めんがために致命的な上申書を驛長に請求しない者があらうか。誰とて彼らを、死人の代理か若しくは少くともモーロムの山賊にも等しい人種の怪物か何ぞのやうに眺めない者があらうか。とは言へ、吾々は公平な心になつてみよう。吾々自身が彼らの地位になつてみよう。さうすれば恐らく吾々ほもつと寛大に彼らを判断するやうになれるであらう。驛長とはいつたい何だ？ これこそ第十四級の眞の殉教者であつて、(譯註)ニツクス、若しくは露西亞の官吏の貴族は十四階級に分れてゐるので、第十四級といふのはその最下級にある。この後百の階級の人々は以前には駝奴から進級せられるといふことは稀であつた。唯かういふ位階によつてのみ毆られるのを免かれてはゐるが、それとても、いつもさうとばかりは行かない。(これは讀者諸君の良心に訴へておかう) ヴィアセルスキー公が洒落(シヤレ)て呼んでゐるこの執政官といふ役目は、抑々どんなものであらうか。彼は實際の濫刑罪人(ギアレ！スレーヴ)ではあるまいか。彼は夜晝息む暇がないのである。旅人は退屈極まる旅びの道中に積り積つたあらゆる不満を、驛長に當り散らすのである。堪らない天氣だとか道路が非道く悪いとか、馭者が強情だとか、馬が手におへないとかと——非難されるのは驛長である。驛長の貧しい住居へ這入つてくると旅行者達は、彼を仇敵のやうにねめつける、だから驛長はこの招きもせぬ客人を速座に追拂ひ得た場合には仕合せである。しかし馬が一匹も居なかつたりするやうな事があつたら！……これこそ大變だ！ どのやうな悪口の連發が、どのやう

な威脅が彼の頭上に降り注がれることぞ！ 雨や霰の降る中でも彼は中庭に出て居らねばならぬ。暴風雨の時であらうと、身を切るやうな霜の降りる時であらうと彼は激昂せる旅行者達の叫喚やし合ひからほんの一瞬時憩ふとすれば、入口にでも身を隠す所を捜し求めて満足する位が關の山である。

一人の將軍が到着くと、びくびくして驛長は早飛脚の用意にしまひ込んでおいた二臺(トポイカ)りしかない四輪馬車を將軍に與へるのである。將軍は一言の禮も述べないで去つてしまふ。五分も経つと鈴の音だ！……さうして早飛脚が元氣のいゝ繼馬を出せといふ命令書を、驛長の前の卓子へ放り出すといふ始末。……すべてこれらの事を吾々はよく心に留めて置かう、さうすれば腹が立つどころでなく、吾々の心は衷心からの同情で充たされるであらう。もう少し話してみる。私は二十年前も露西亞の各地方へ遊歴してゐるうちに、驛路といふ驛路は殆んど全部覚えこんで、幾代もの馭者達とも懇意になつた。個人的に知らない驛長は極く少なく、私の用向に關係しなかつた驛長も少なかつた。私は旅行中に書き附けて置いた種々珍しい話を追々發表したいと思つてゐる。現在のところでは私は驛長の身が世人に誤解されてゐるとこれだけを言つて置かう。これらの大變中傷されてきた官吏達といふものは概して頗る溫和な人柄で、生れ付き深切で、社交に氣を配ばり、外見控目で利慾に耽るといふことは滅多にないものである。彼らの會話からは、(旅びする紳士達が輕蔑す



るのは甚だ不條理なことで、興味もあり教訓的にもなる多くの事柄を學び得るのである。私自身について云へば、私は公務を帯びて旅行する第六級の或る官吏達の話よりも彼ら驛長の話の方が好きだと告白する。

私がこの廢潔なる驛長達の味方をするといふことは察するに難くはあるまい。實際、そのなかにもある一人の驛長の記憶は私にとつて懐しいものなのである。嘗てある事情で私達は一緒になつたことがあつたので、今私が温厚なる讀者諸君の前に語らうと思つてゐるのも、その男に就てである。千八百十六年の五月のこと、私は偶々N—州の、今は跡方もない道路を通つて旅行することになつた。その當時私は低い身分だつたので、二頭の馬を賃借して驛場から驛場へと旅してゐた。その結果、驛長は些かの尊敬の念もなく私を取扱つたので、屢々私は當然自分に屬すべきものと、信ずるものをも、無理矢理に奪はねばならなかつた。年も若く、情熱的だつた私は、驛長が私の爲めに用意しておいた馬を、地位の高い官吏の四輪馬車にとりつけたりした時には、驛長の卑劣と怯懦とに憤慨したのであつた。それに私は、役所の食卓でさへ不公平な召使から番外として取扱はれるのに慣れることが出来たのも長い間のことであつたのだ。今日では自分は自分、他人は他人といふのが物事の自然の秩序であるやうに私には思はれる。實際一般に遵奉してゐる「階段をして階段を尊敬せしめよ」といふ方則がもし轉用して例へば、「心をして心を尊敬せしめよ」となつたならば、吾々はいつたいどうなるであらう？ どんな爭論が持ちあがるであらう！ そして給仕達は皿を配るのに誰から始めるであらう？ それはさておき私の物語に立戻らねばならぬ。

その日は暑かつた。A—から三露里ばかりはびしよびしよ雨が降りつゞいてゐたが、二三分の中に車軸を流す大降りになつたので、人は肌まで水浸しになつた。驛に着いて私が第一に望んだのは能るだけ早く着物を着更へることよ、次には茶を少し貰ふこととであつた。

「おーい！ ドウニヤ！」と驛長は叫んだ。「お茶壺の用意をしておくれよ、それから、クリームを取りに行くんだよ」

この言葉に従つて十四位の女の子が中仕切の蔭から出てきて、玄關へ駆け出して行つた。その美しさに私は驚いた。

「あれはあなたの娘さんですかい」と私は驛長に訊いた。

「私の娘でさあ」と彼は嬉し相な誇らしげな顔をして答へた。「あれは死んだ母親似で、仲々はしつこい、惻巧ものなんです」

それから彼は私の旅行券を登録しだした。で、私はこのさゝやかな部屋を飾つてゐる縮を一つ一つ調べて見ることに没頭した。それらの繪は放蕩息子のお話を圖解したものであつた。第一番目では寢帽と寢巻とにくるまつた一人の神々しい老人が、落着かない青年に別離れようとしてゐるとこ

ろて、青年は熱心に老人の祝福とお金の袋とを受取つてゐる。第二の繪には青年の放埒な生活が生しい色彩をもつて描かれてゐる。彼が悪友達や恥知らずの女達と、一つ卓子を圍んで坐つてゐるところが描かれてある。更に進むと、零落した青年が襤褸を身に纏ひ三角帽を冠つて豚の番をしたり餌を分けてやつたりしてゐる。その顔には深い悲愁と悔恨の情とが表はれてゐる。最後の繪では彼が父親の所へ歸つてきた所で、善良な老人は前と同じ寢帽に寢衣着を着て、息子に逢はうと駆け出して來てゐると、放蕩息子が跪いて倒れてゐる。遠くの方では料理人が肥えた犢牛を殺してゐる。で兄息子は此祝ひ事のわけを下僕達に訊いてゐる。どの繪の下にも私はそれに適當した獨逸語の詩句を讀んだ。すべてこれらは、鎮痛油の小瓶や斑點だらけの蔽ひのかゝつた寢床やその他私の周圍にあつた種々の物と同じやうに、今日までも私の記憶に残つてゐる。私は現在も尙、あの色褪せたリボンに三つのメタルをつけた長い、緑色のフロック形の外套を着た五十歳ばかりの若々しい、壯健な主人その人を見ることが出来る。

私は年老つた馭者に勘定を拂つてやるかやらぬに、ドウニヤが茶壺を持つて歸つて來た。この小さなコケットは二度目に見た私かどのやうな印象を受けたかを見てとつて、大きな碧い眼を伏せた。私は彼女に話しかけた。彼女は少しも臆せず、世間に慣れてゐる娘のやうに答へた。私は彼女の父に一杯のぼんす酒(火酒に鶏と砂糖と、れもん汁等を和した酒)を、ドーニヤには茶を興へて、それから私達三人は恰も古く

からの知合でもあるかのやうに一緒に話を始めた。

馬はもう疾たぎくに用意されてゐた。けれども私は驛長とその娘とに別れてゆくのが厭であつた。到頭私は彼らにさやうならを告げた。父親は私に御機嫌ようと言ひ、娘は私を馬車まで送つてきて呉れた。入口のところで私はつと立ち止まつて彼女に接吻させて下さいと頼んだ。ドーニヤは許した……その時以來私は随分澤山の接吻を數へあげることが出来るが、これほど永い間、これほど楽しい想ひ出として残つたものは一つもない。

數年は過ぎ去つた。そして種々な事情から私は再び同じ道の、同じ場所へ行くことになつた。「しかし」と私は考へた。「おほかた、あの爺さんの驛長は變つてしまつたらう、さうしてドウニヤは最早結婚してしまつたかも知れない」

彼らの中どちらかど死んだのではあるまいかといふ想念が矢張り私の心の中に閃めいた。そして私は悲しい豫感をもつて、A——驛へ近づいた。私は例の小さい驛場の前まで來た。部屋に這入つてゆくとすぐ、私は放蕩息子の物語を圖解した繪を認めた。卓子も寢床も以前の通りに同じ場所にあつたが、草花はもはや窓敷居の上にはなくて、四圍のあらゆる物は衰微と等閑とを示してゐた。

驛長は羊皮の外套にくるまつて眠つてゐたが、私が到著くと眼を醒まして起ち上つた……それはまがふ方なきセミオイン・ヴィリンであつたが、まあ、なんといふ老け方だらう！ 彼が私の旅

行券を書き留めてゐるうち、私は彼の灰色の髪の毛や長い間剃刀をあてない顔の深い皺や曲つた腰を眺めてゐるが、あの強壯で活潑だつた人がどうしてこの三四年の年月にかうまで弱々しい老人に變り果てゝしまつたのかと思つて驚いた。

「あなたに私が分りますか」と私は彼に訊いた。「私達は古馴染ですぜ」

「さうかも知れない」と彼は悲しさうに答へた。「こゝは街道筋だから、旅行する人が大勢落ち合ひますからなあ」

「あなたのところのドウニヤさんはお達者ですか」と私はつゞけた。  
老人は顔を曇らした。

「神様が御存じです」と彼は答へた。

「お嫁かたづきになつたんでせうね」と私は言つた。

老人は私の質問が聞えない振りをして、低い聲で私の旅行券を讀みつゞけるのであつた。私は尋ねるのを止めて、お茶を命じた。好奇心が私を苦しめだした。で、ぼんす酒がこの老ひふけた知人の舌をゆるめてくれ、ばいゝがと思つた。

私の考は外れなかつた。老人は差出された洋盃を拒まなかつた。私はラム酒が彼の憂愁を鬱散させるのに氣が附いた。二杯目になつて、彼は語りだした。彼は私を思ひ出した。いや、思ひ出した

やりに見えたのだ。そして私は彼から一篇の話聞いた。その話は、その時、私に深い興味と感動とを與へた。

「成程、貴方はドウニヤを御存じでしたね」と彼は始めた。「しかし誰があれを知らないものがあつたでせう、あゝあ、ドウニヤ、ドウニヤ！ 何といふ娘だつたでせう！ この道を通る人は誰も彼もあれを褒めて下すつた。誰も一言だつて逆つて物を仰しやつた人はありませんでした。御婦人方は、やれハンケチだとかそれ耳環だとかつてね、——贈物をして下さいましたよ、且那方は晝食するとか夕飯を認めるとかいふやうな振りをして、わざわざ立寄つて下さるのが常でした。が、その實は娘を長い間見たいばかりにだね。且那方がどのやうに腹を立てゝいらしても、あれの前では静かになつてしまつて、私にもやさしく物を言つて下さるのでした。早飛脚や政府の使ひの人達は一氣に三十分も彼女を相手に話をして行きなされるのでしたよ。ね、貴方、それを信じて下さいませうね、家を保つていつてくれたのは娘でした。娘は萬事の整理をしたり、萬事の用意をしたり、萬事に世話を焼いたりしてくれました。そして耄れて馬鹿のやうな私は、十分に彼女を顧ることでもできず、十分彼女を尊重することもできなかつたのです。私がドウニヤを愛してゐなかつたでせうか、私かわが娘をあまやかしては居らなかつたでせうか、彼女の生活は幸福ではなかつたか。だが、いづれにせよ、不幸は逃れつこはない。つまり運命さだめられた所ものは避けられないのです」

そこで彼は自分の悲しみを細々と語りだした。三年以前のある冬の夕べのこと、驛長は新しい帳面を調べ、仕切壁の蔭では彼の娘は着物を縫つてゐた。するとその時、サアカシア人風の帽子に陸軍の外套を着て、襟巻をすつぽり巻いた一人の旅人が、部屋へ這入つてきて、馬を求めた。馬はすつかり出拂つてゐた。この事を聞くと旅人は聲を荒らげ鞭をふりあげた。ところがこのやうな場合に慣れてゐるドウニヤは、仕切壁の蔭から駈け出してきて、旅人に召上るものは何が宜しうございませうねえ、とやさしく訊いた。

ドウニヤが現はれた事は、いつもの通りの効果を與へた。旅人の憤怒は解けた。彼は馬を待つことを承諾して、夕飯を誂へた。雨に濡れた粗毛の帽子をとつて襟巻と外套とを脱いでしまふと、その旅人は眞黒な口髭を蓄へた、脊の高い、若い驛騎兵だといふことが分つた。彼は驛長と仲好くなつて、驛長とその娘と三人で話を始めた。夕飯は認められた。兎角する中に、馬が歸つて來たので驛長は馬糧もやらずに早速そのまゝ、旅客の幌轎キレトカに附けるやうに吩咐けた。ところが部屋へ歸つて來てみると彼は青年がベンチの上に殆んど意識を失つて横はつてゐるのを見た。青年は酔ひが巡つて、頭がずきずき痛むので、旅行を続ける事が出来なくなつたのだ。どうしたらよからうか。驛長は自分の寢床へ彼を寝かせて、若しこの病人が快くならないやうだつたら翌くる日は〇——へ醫者を呼びにやることに決心した。

翌日、驛騎兵は尙更悪くなつた。彼の従者は街へ醫者を迎へに馬で出掛けた。ドウニヤは辛子に浸したハンケチで彼の頭を巻いてやつた。そして彼の寢床の側へ針仕事をしながら坐つてゐた。馭者がゐるところでは病人は吐息つをくのみで、殆んど一口も喋舌シヤらなかつた。けれども彼は珈琲を二杯飲んで、溜息をつきながら晝食を誂へるのであつた。ドウニヤは彼の側を離れなかつた。彼が絶えず何か飲む物を求めるので、ドウニヤは自分で拵へた濃椽水シモンの瓶を彼に與へた。病人は唇を濕して、その度ごとに瓶を歸しては、謝意を表するしるしにドウニヤの手を力なく握るのであつた。晝食になる頃に醫者が著いた。彼は患者の脈を見て、獨逸語で彼に話してゐたが、彼に唯安靜のみに必要であること、さうして十四、五日もすれば旅は續けられるだらうと露西亞語で宣告した。驛騎兵は醫者の往診料として二十五留拂つて、晝食までもふるまつた。で、醫者はその招待を承けた。彼らは兩人とも多分な食欲をもつて喰べたり、酒を一瓶呑んだりして、お互にたいへん満足して別離れた。

一日過ぎると、驛騎兵は再びすつかり快くなつた。彼は格別元氣になつて、やれドウニヤ、やれ驛長と、ひつきりなしに冗談を言つたり口笛を吹いたり、旅行者とお喋舌をしたり、旅行者の旅行券を驛傳帳に寫しとつたりした。そしてこんな風にして到着してから三日目に驛長殿がこの懐しい客と別れることを惜しがつた位までに彼は驛長を丸めこんでしまつた。

その日は日曜であつた。ドウニヤは彌撒に行く支度をしてゐた。驛騎兵の幌轎はすっかり用意ができてゐた。彼は驛長に暇乞ひをして宿泊料と賄料とにたつぷり支拂ひをしてから、ドウニヤにも別れを告げたが、村端はらに在る教會まで一緒に乗つて行つて呉れと頼んだ。ドーニヤは逡巡たぐらつつた。

「何をお前怖がつてゐるんだい」と彼女の父は訊いた。「閣下は狼ぢやあるまいし、お前を喰べようといふんぢやないしさ、教會までぐらゐはお伴をするがいよよ」

ドウニヤは幌轎にはいつて、驛騎兵と隣り合つて腰かけた。馬丁は車體に跳び乗つて、馭者は口笛を吹いた。さうして馬は駈け出して行つた。

憐れな驛長はどうして自分がドウニヤに驛騎兵ともに乗つて行くのを許したのか、どうして自分がさう盲目だつたのか、又その時どういふ氣持になつてゐたのか解らなかつた。三十分とは經たない内に彼の心は悲しくなりだして、心配と不安とがもはやぢつとはしてゐられない程に募つてきたので、自分で彌撒へ出掛けて行つた。教會へ着くと彼は、もはや人々が退散しだしてゐるのを見たけれども、ドウニヤは寺庭にも入口にも居なかつた。彼は急いで教會の内へ這入つた。牧師は祭壇を去らうとしてゐたし、僧侶は蠟燭を消さうとしてゐた。二人の婆さんはまだ隅の方でお祈禱をしてゐた。が、ドウニヤは教會の中にも居なかつた。哀れな父親は十分な決斷を振ひ起して、娘が彌撒に出席したかどうかやつとの思ひで僧侶に訊ねることができた。執事は彼女が出席しなかつたと答へ

た。驛長は生きて心地もなく家に歸つた。一つの望みのみが彼には残つてゐた。ドウニヤは無分別な若氣のいたりて、ふと、彼女の教母が住んでゐる次の驛まで行かうと考へ附いたのかも知れなかつたからである。苦しくいらくした中に、彼は、彼女を乗せて行つた幌轎の歸るのを待つてゐた。馭者は中々歸つて來なかつた。到頭夜になつて馭者ひとり酔つぱらつて歸つて來て、次の驛からドーニヤは驛騎兵と一緒に行つてしまつたといふ恐ろしい報告を齎した。

老人はこの不幸を耐へ忍ぶことができなかった。彼はすぐに、昨夜まであの若い誑惑者の寢てゐたその同じ寢床にもぐり込んだ。あらゆる事實を綜合してみると驛長は、いよいよあの病氣は假病に過ぎなかつたのだといふ結論に到達した。この哀れな人は激しい熱を患つてねつてしまつた。彼は〇―へ移されて、當分の間その後釜に別な人が任命された。驛騎兵を診察した同じ醫者が又もや彼を診察した。醫者はあの青年が全く健全であつたこと、自分が彼を往診した時彼に何か悪い企があるのを感じたこと、しかし驛騎兵の鞭が怖かつたので黙つてゐたといふことを驛長に斷言した。その獨逸人は眞實を話したのか、それとも己の爛眼を誇りたいがためだけだつたのか、この消息は哀れな患者に何らの慰藉をも與へなかつた。驛長はやつと本腹するかせぬに、〇―驛長に二ヶ月間の賜暇を願つて、自分の意向を誰にも口外せずに、娘の行衛を徒歩で捜しに出掛けた。旅行券を調べて、彼はミンスキー大尉がスモレンスクから聖ペテルブルグへ旅行してゐるのが解

つた。彼を乗せて行つた馭者が、ドウニヤは自由意志で行くやうではあつたが、道すがらずと泣きつゞけてゐたといふことを話した。

「多分」と驛長は考へた。「俺の迷つた牝羊は家へ連れてかへれるだらう。」

かう思ひながら彼は聖ペテルブルグに着いて、彼の舊友の一人で、退役士官の宿營所であるイスマイロフスキー聯隊の兵營に寄寓して、それから搜索を始めた。彼は間もなくミンスキー大尉が聖ペテルブルグに居て、デモートフ・ホテルに暮してゐるのを嗅ぎつけた。驛長は彼を訪問しようと思つた。

朝早く、彼はミンスキーの控室へ這入つて行つた。そして一人の老兵がお目に掛りたがつてゐるといふことを、閣下に通じて貰ひたいと申込んだ。従卒は靴型の上に長靴を載せて磨いてゐたが、主人はまだ寝こんでゐるし、それに又十一時前には誰にも決して逢はないのだといふ事を知らせた。驛長は一度引退つたが、指定の時間に戻つて行つた。ミンスキーは寢衣着のまま赤い頭布を冠つて出て来た。「やあ、驛長さん、何かご用かね、」と彼は訊いた。

老人の心は煮えくり返りだした。涙が眼から溢れ出た。そして彼は震へ聲でかう言ふことが出来ただけであつた。

「閣下！……私を憐れに思つて下さいまし！……」

ミンスキーは素速く彼をちらと見て、どきまぎして、彼の手を執つて自分の部屋へ連れ込んで扉に錠を下ろしてしまつた。

「閣下！」と老人は續けて言つた。「乗てられた者は途方に暮れますだよ、せめて私にあの可哀相な娘のドウニヤを還して下さい、貴方はあれを弄み物になすつたんです。が、すつかり倫落させなして下さい。」

「済んでしまつたことはどうすることも出来ないよ」と青年は全くしどろもどろになつて言つた。

「君の前にや僕は罪があるんだから、許して貰はうとは思つてゐるのだが、ドウニヤを乗てるとは思はないでくれたまへ。僕は誓つて言ふが、ドウニヤは幸福になるんだ。どういふわけて君はドウニヤが欲しいのだね、ドウニヤは僕を愛してゐる。以前の生活を思ひ出さなくなつたんだ。君も彼女も嘗て起つた事を忘れはしないだらう。」

それから彼は老人の袖に何物かを押し入れながら扉を開けた。そして驛長はどうしたか覺えてゐないが、再び街路の中に自分自身を見出した。

永い間彼は身動きもせず立つてゐた、が、遂に彼は袖口に卷いた札があるのを發見した。それを取り出して見ると、數枚の五十留の札が擴がつた。涙が再び彼の眼に充ちた。憤怒の涙だ！彼は札を玉に丸めて地上に叩きつけ、その上を長靴の踵で踏み躪つた。そして立ち去つた……五六歩

行つてから彼は立ち止つて、思ひ返して、戻つてきた……しかし、その札はもうそこにはなかつた。立派の身装の若い男が、彼を見ると、辻馬車の方へ駆けて行つて慌てゝ跳び込んで「出せ！」と馭者に叫んだ。

驛長はそのあとを追はなかつた。彼は自分の驛へ歸らうと決心をしたが、さうする前にもう一度哀れなドウニヤに逢ひたいものだと思つた。そのために彼は二日おいてミンスキーの宿へ再び行つたが、從卒は言葉も荒々しく、主人は誰にも逢はないと言つて、控室から彼を衝き出して彼の鼻の先へ扉をばたんと閉めてしまつた。驛長は暫く心待ちに立つてゐたが、やがて歩み出した。

その同じ日の暮方、彼は受難者の教會のお勤めに行かうとしてリテナイア街をぶらぶら歩いてゐた。突然粹な三頭馬車が彼を乗り越した。と、驛長はミンスキーが眼にとまつた。三頭馬車は、ある入口の閉まつた三階建の家の前で駐つて、驛騎兵がその石段を駆けあがつて行つた。幸福な思考が驛長の心の中に閃いた。彼は引還して別當に近づいて、

「もし、もし、これは誰の馬だね、」と訊いた。「ミンスキーさんのぢやありませんか。」

「いかにも、さうだよ」と別當は答へた。「なにか、お前さん、用かね」

「え、お前さんの主人からドウニヤさんのところへ手紙を誂らはつてきたのだが、ドーニヤさんの住んでゐる所を忘れてしまつたのだ。」

「此處に住んでおいでだ、二階にだよ、だが、お前さんの手紙はもう遅いぜ、兄弟、日晷は今時分ご一緒にいらつしやるんだからな。」

「そんなことはどうでもいゝんだよ。」と驛長は言ふに言はず胸をとどろかせながら答へた。「よく教へて下さつてありがたう、だが俺は役目をどうして果したのかなあ」さうして、かう言ひながら彼は段梯子を登つていつた。

扉には錠がかゝつてゐた。彼は呼鈴を鳴らした。手間取つてゐる數分間が心苦しかった。錠がガチャガチャ鳴つて扉が開かれた。

「アブドーチヤ・セミヨノヴァさんは御在宅ですかい」と彼は訊いた。

「はい」と若い女中が答へた。「どういふ御用ですか」

驛長は返事もしないで、部屋へ這入り込んだ。

「貴方、這入つちやいけません、這入つちやいけませんつてば！」と女中はその背後から叫んだ。「アブドーチヤ・セミヨノヴァ様にはお客様があるんですから。」

けれども驛長は、女中に頓着なしにさつさと進んで行つた。最初の二つの部屋は眞暗だつた。三番目の部屋は明るかつた。彼は開け放しの戸口に近づいて、ちよつと立ち止まつた。美しく裝飾したその部屋の中には、ミンスキーが深い想ひに沈んで坐つてゐた。ドウニヤは最も優美な恰好に身

を着飾つて、英國式の鞍につた乗馬婦人のやうに、ミンスキーの椅子の肘掛に腰かけてゐた。彼女は優しくミンスキーを眺めながら、彼の黒い縮毛を彼女の輝く指に巻きつけてゐた。可哀相なのは驛長だ！自分の娘がかやうに美しく見えたことはこれまでに只の一度もなかつたのだ。彼は自分の意志に反して娘を賞讃してゐたのである。

「そこにあるのはだあれ？」と彼女は頭もあげずに訊いた。

彼は黙つてゐた。返事がないので、ドウニヤは頭をあげた……さうして一聲叫んで彼女は敷物の上に倒れた。吃驚したミンスキーは急いで彼女を抱き起したが、突然入口の老驛長がちらと眼にとまると、彼はドウニヤを離れて憤怒のあまりぶるぶる震へながら彼の方へにぢり寄つた。

「何用があるんだ？」と彼は齒をきりきり喰ひしりながら彼に謂つた。「何故君は盗賊のやうにどこへでも俺のあとをつけてくるんだ。それとも俺を殺したいのか。さあ、出てゆけ！」そして力の強い手で彼は老人のカラーのところを攫んで、驛長を階段から衝き落した。

老人は自分の宿舎へ歸つた。彼の友人は告訴しろと勧めたが、驛長は思ひ返して手を振つた。さうしてこの事件にはこれ以上立ち入ることを差控へようと心に決めた。二日の後彼は聖ペテルブルグを後にして、自分の職務に復するために彼の驛へと歸つて來た。

「ドウニヤがゐなくなつてから、これで三年目になります」と彼は話を結んだ。「彼女おれについてちや一

言も聞きません。生きてゐるのやら死んだやら——神様のみが御存じです、いろいろ多くの事件が起るものでさあね、無頼漢たらしものの旅人に唆かされて、東の間は繼續するものゝ、それから捨てられてしまふのは、彼女おれが初めてでもなく、最後でもないんです。聖ペテルブルグにや、今日は縋子や天鷲絨にくるまつてゐても、明日は居酒屋の淺ましい厄介者と伴れだつて街路を泣き歩くといふやうな若い阿呆者が澤山ゐるんです。どうかすると私がドウニヤもそんな成りの果になるんぢやあるまいかと思ふ時にや、われながら罪なことだが、彼女おれが死んでくれればいゝがと思ひますよ……」

かういふのが私の友なる老驛長の物語であつた。話は一度ならず涙に妨げられたが、彼はドミトリエフの美しい俗謡の中の情熱的なレンティチのやうに上衣の袖で、繪に描いたやうに拭ふのであつた。これらの涙は彼が談じてゐる間に五杯も飲んだぼんす酒によつて半ばはそゝられたのであつたが、兎に角それは私の心に深い印象を與へた。彼に別れてからも私は暫くの間この老驛長が忘れられなかつた。そして暫くは哀れなドウニヤのことを考へてゐた……

先頃×××といふ小さな街を通過して、私はこの友の事を思ひ出した。私は彼が管理してゐた驛が廢止されてしまつたといふことを耳にした。「かの老驛長はまだ生きてゐるかしら」かういふ私の質問に誰一人満足な返答のできる者はなかつた。私は馴染の場所を訪づれてみようと決心して、馬



を備つて、N—村へ出掛けた。

頃は秋であつた。灰色の雲が空を掩ひ、冷たい風が刈りつくされた野面を吹きまくつて、風を受ける木といふ木からは赤や黄色の木の葉を吹き飛ばしてゐた。私は日没頃に村へ著いて、さうやかな驛舎の前に止つた。玄關へ（そこは曾てドウニヤが私に接吻した所であつた）頑丈な婦人が私を迎へ住んでゐるのである。そして自分がその醸造人の女房であることを話して聞かせてくれた。私は自分の無益な旅びを、且つ七留無駄に費したのを後悔しだした。

「何病氣で死んだんだね」と私は醸造人の妻に訊いた。

「旦那、あんまり酒を飲んだんですよ」と彼女は答へた。

「で、どこに埋葬つてあるんですか」

「村の端れでね、あの人の亡くなつた細君のそばなんでござんす。」

「誰かその墓へ私を連れて行つてくれませんかね」

「ようござんすとも！ おい、ヴァンカや、随分長いことお前は猫と遊んでゐるぢやないか、この旦那を墓地へおつれ申して、驛長さんの墓を教へておあげよ」

かう言はれて、こつちを眺めてゐた襤褸の衣服を着た赤毛の若者が、私の方へ駈けて来て、早速

埋葬地の方へ案内しだした。

「お前はあの死んだ驛長さんを知つてたかい」と私は道々彼に訊いてみた。

「どうして私が知らないことがありませう！ わしや、吹竹の切り方をあの人に教へて貰ひましたつけ、あの人が居酒屋から出て来ると、（可哀相に！）私達はその後を追つかけていつて、「お爺さん！ お爺さん！ 胡桃をおくれよう！」つていつも頼んだもんですよ、さうするとお爺さんはいつも胡桃を放げてくれたつけ。あの人は、しよつちゆ私達と遊んでたんです。」

「ぢや、旅行する人達はあの人のことを憶えてゐるかね」

「まあ、あんまりありませんなあ、お役人が時々この街道を通るんだけれど、死んだ人達のことなんぞ何とも思つてゐませんぜ。去年の夏、女の人がこゝを通つて、驛長の爺さんの安否を尋ねてね、墓へおいでになりましたつけ。」

「どんな風の婦人だつたか」と私は珍らしさうに訊いた。

「どうもたいへんに綺麗な人でした」と若者は答へた。「六頭立の馬車に乗つて、三人の小さい子供衆と乳母と、それから小さな黒い犬とを連れていらつした。が、村の者が驛長のお爺さんは死んだちまつたつて云ふとね、その女の人はもう泣き出してしまつたよ、さうしてお見さん達にね「おとなしくしておいで、お墓へ行つてくるから」つて言ひました。私が道をご案内しませうつて言つた

ら、貴婦人は「道は知つてゐるから」つてんで、私に五、ベック錢を一枚呉れました……まあ、こんな親切な奥さんでさあ！」

二八二

私達は少しの圍ひもない、物淋しい墓地へ著いた。木の十字架があちこちに立つてゐた。しかしそこには影を放げる一本の樹木もなかつた。私は生れてから曾てこのやうな陰氣な墓地を見たことがなかつた。

「これが驛長爺さんのお墓です」と若者は砂の塚をまたぎながら私に謂つた、そこには銅像の附いた黒い十字架が樹つてゐた。

「で、その女の人はこゝへ來たんだね」と私は訊いた。

「へい、さうです」とヴァンカは答へた。「私は遠くから見てもたんだがね、その人はこゝへ跪いて、長い間跪いたまゝでぢつとしてゐましたよ。それから村へ歸つて、祭司様を呼んできて、いくらもお金を寄進してから馬車で行つてしまひました、私に五、ベック錢を一枚下すつたからね、……本當に素的な奥様だつた！」

そして私も亦、若者に五、ベック錢を興へた。そして、私はもはやこゝまできた事も、そのお蔭で七留費つた事も後悔はしなかつた。

キ  
ル  
ヂ  
ヤ  
リ

キルヂヤリは生れ付きブルガリア人であつた。キルヂヤリとは土耳其語で、武者修行とか大膽な奴とかいふ意味である。彼の眞個の名をば私は知らない。

キルヂヤリは追剣を業としてゐたので、モルタヴィア一帯では怖がられてゐた。彼について幾らかの觀念を與へるために、私は彼の手柄話の一つを述べることにする。ある夜、彼はアルノウト・ミカエラキと一緒にブルガリヤの一村へやつてきた。二人は村家の兩端に火を點けて、小屋から小屋へ渡り歩き出した。キルヂヤリは住民達を手早く殺し、ミカエラキは掠奪品を運び去つた。二人とも「キルヂヤリだぞ！ キルヂヤリだぞ！」と叫んだ。村中遁けてしまつた。

アレキサンダー・イブシランチは謀叛を宣告して、兵士を徵集しだした時に、キルヂヤリは自分の舊い仲間を幾人か連れてきた。謀叛の眞の目的は謀叛人達に誤解されてゐたに過ぎなかつたが、さて戦争をしてみると、土耳其人の（恐らくはモルタヴィア人までも）入費をかさばらせる機會を與へるに過ぎなかつた。けれども謀叛人達の眼にはそれで十分なる目的であつた。

アレキサンダー・イブシランチといふ男は、個人的には勇敢であつたが、そのやうな銳氣やそのやうな粗暴をもつて威張るやうな役目として必要な性質を持つてゐなかつた。彼は自分が指揮しなければならぬ部下の者達をさへ、どう支配したらいいか知らなかつた。部下の人達は彼を尊敬もせず信頼もしてゐなかつた。希臘青年の花を朽らしたあの不幸な戦ひのあつたあとに、イオルダーキ・

オリムピオチは彼に退職するやうに勸告して、自分がその職に就いた。イブシランチは埃大利の國境に落ちのびて、そこから自分が賣國奴とか、卑怯者だとか、又は無頼漢だとかと呼んでゐた人達へ自分の不幸な身の名を書き送つた。これらの卑怯者や無頼漢の大部分は、彼らの同勢の十倍もある敵を必死に禦ぎながら、セコの修道院の中や、ブルス河の堤で戦死したのであつた。

キルヂヤリはデヨージ・カンタクチンの分遣隊にゐたのであつたが、彼について話す段になるとイブシランチについてお話ししたと同じ事を繰返すことになるのである。スクリヤナ附近の戦ひのその前夜、カンタクチンは吾々露西亞の國境へ入れてくれと露西亞官憲に頼みにきた。分遣隊はキルヂヤリやサファイアノースやカンタゴニイの他、別に統率者もなしにあとに残つてゐたが、その部下の者達にとつては統率者といふ者は更に要らなかつたのである。

スクリヤナ附近の戦ひは誰一人その傷ましい事實を有りの儘に記してゐないやうである。千五百の土耳其騎兵の姿を見て退却するやうな武藝の觀念のない七百人の——アルノート人や、アルバニア人や希臘人やブルガリア人や、さうしたあらゆる種族の鳥合の衆——を想像して見たまへ。この分遣隊はブルス河の堤に接近して、ヂヤシイの、要塞司令官の中庭で見受けるやうな祝賀する場合に禮式として發砲する慣しの小さい二つの大砲を前に据ゑてゐた。土耳其人は彈藥か使へるので嬉しがつてゐたが、これは決して露西亞官憲の許可を受けなかつたのではなかつた。といふのは、その

彈丸はわが露西亞人のある岸邊の上をうまく飛び越えていつたからである。わが露西亞の司令官(今は故人となつた)は軍隊に四十年の間も務めてゐたのであるけれども、生れてから以來彈丸のヒューヒューいふ音をまるで聞いたことがなかつた。が、天は遂にそれを聞かねばならぬやうにした。彈丸は五つ六つ彼の耳元の風を切つて行つた。老人は恐ろしく腹を立て、オクホットスキ一歩兵聯隊の少佐を罵つて、戦線を進ませることにした。少佐はどうしていか判らないので、河の方へ突進した。河の向ふには騎馬の叛徒が少し許り乗り廻つてゐたので、雜作もなく威脅した。叛徒達はこれを見ると、くるりと振向きさま土耳其の分遣隊を全部引連れて遁走してしまつた。何の雜作もなく嚇しつけたその少佐はコルチフスキーと呼ばれて居た。彼がそれからどうなつたか私は知らない。

ところが翌日になつて土耳其はヘタイリスト軍を攻撃してきた。銃丸も砲弾も一切用ひないで、彼らはいつになく冷たい双金を用ひることに一決した。その戦ひは激戦の一つであつた。ヤタガン(譯註「殺い」)が自由に使はれた。土耳其軍側ではこれまで一度も使つたことのない槍が見受けられた。これらの槍は露西亞のものであつた。ネカラスオヴィスト人は隊伍を整へて戦つた。ヘタイリスト人はわが露西亞皇帝の許可によつてブルスを通過することを許されたが、わが露西亞軍の戦線内へ這入ることは拒絶された。彼らは横斷し始めた。カンタゴニイとサファイアノースは最後まで土耳其

の堤に留まつてゐた。キルヂヤリは前夜に負傷して 既にわが軍の陣中に横はつてゐた。サファイアノースは戦死した。非常に剛健な男であるカンタゴニイは胃に槍の傷手を負つた。彼は片手に劍をあげ、一方の手で敵の槍を握つて自分でぐつと一層奥へ刺し込んだ。そして、こんな風にして彼の劍は彼の下手人に届いた。二人とも一緒に打倒れた。

すべては片が付いた。土耳其軍は勝つてしまつた。モルダヴィア人は一揆の軍勢を綺麗に追つ拂つてしまつた。六百人許りのアルノート人はベサアラビヤを通つて影もなく消え失せた。さうしてアルノート人それ自身でどう維持してゆくか分らなかつたけれども、彼らは露西亞がまだ擁護してゐてくれるのを有がたがつてゐた。彼らは淫蕩な生活ではなかつたが、懶怠な生活をしてゐた。彼らはいつも半土耳其ベサラビヤの珈琲店で口に長い煙管を啣へたり、小さいコップから珈琲の滓を啜つたりしてゐるのを見ることが出来た。飛白のジャケツや赤い前の尖かつたスリツパはもはや、かれこれ擦れきれかけてゐたのに、總の下つた胃だけは頭の横つちよにのせてゐて、ヤタガンや短銃が幅の廣い飾帶の下から喰み出でゐるのであつた。これらの哀れな、平和らしい人達がモルダヴィア名題の暴徒達で、兇猛なキルヂヤリの同僚であること、そしてキルヂヤリ自身がその連中の中に交つてゐることを想像するには難くはなかつた。

ヂヤシイを管理してゐた總督は、この事を報告に及んだ。そして條約した通りに山賊を引渡して

貰ひたいと露西亞の當局に申込んできた。

警察では搜索を開始した。キルヂヤリは確かにキシネーフにゐるといふことが判つた。警官達は僧侶の家で、夕方キルヂヤリが七人の仲間と暗がりくらがりに坐つて夕飯を喰つてゐる所を捕縛した。キルヂヤリは逮捕された。彼は事實を隠蔽し様とはしなかつた。自分がキルヂヤリだと白状した。

「しかし」と彼は附け加へた。「私がブルスを横つてきてからは、他人の財産にはこれつばかりも觸りませんでしたし、漂流者ゾプシイをすら觸著しませんでした。土耳古人やモルダヴィア人やワラチアン人にとつては、私は疑ひもなく山賊に違ひありませんが、露西亞人には、私はお客様です。サファイアノースは自分の弾丸を射ちつくしてしまつてから、露西亞の戦線を踏み越えてきて、最後の發砲の用意に、負傷した者から蒐めた鉤や釘や時計の鎖やヤタガンの紐を私は彼から二十ベシリクスで買ひとつて、私は一文の金もなしに立ち去りましたよ、私、キルヂヤリが義捐金で暮してゐることは神様が御存じていらつしやいます。それなのに露西亞人は何故かうして私を敵の手にお渡しなさるのですか。」

その後、キルヂヤリは口を噤んでしまつた。そして靜かに彼の運命を決すべき判決を待つてゐた。長らくは待たされなかつた。當局者はロマンチックな方面から山賊を觀察しようとはせず、それ相應の罪を認めて、キルヂヤリをヂヤシイに送るやうに命じた。

その當時若い無名の役人で、今は重要な地位を占めてゐる情あり智長けた一人の男が、彼の出立の時の模様を生々と私に書いておいてくれた。

牢獄の門前にはカロウツアが駐つてゐた……諸君は大方カロウツアが何だか御存じあるまい。それは低い、籃つきの運搬車で、餘程以前からではないが、六頭か八頭かの瘦馬を繋ぐのが一般の慣しになつてゐた。口髭を蓄へて羊皮の帽子を冠つたモルダヴィア人が、その中の一頭に跨りながら、絶えず喚わめひたり、鞭をびしり／＼あてたりして、哀れげな馬をかなり速く急がして走りつゞけるのであつた。その中の一頭の馬がもし歩調をたると始めると、その男は恐ろしく叱りつけてその馬を解いて、馬の運命がどうならうとおかまひなして道においてきぼりにしてゆくのであつた。旗をしての歸り途でその男は屹度同じ場所に例の馬が緑の草原をちつと眺めてゐるのを見つけるのである。八頭の馬にひかせて驛場を出發した旅人が、たつた二頭の馬になつて次の驛場へ著くといふ事は屢々ある事である。殆ど十五年も以前からさういふ慣しになつてゐた。現今露西亞化したベサラヴィアでは、露西亞馬具と露西亞の四輪馬車とを採用してゐる。

かやうなカロウツアが千八百二十一年の九月の末つ方、牢獄の門前に駐まつてゐた。縮りのない袖にだらしないスリツパを穿いた猶太人だの、襤褸の、それでも晝のやうに鮮やかな衣裳をつけたアルノート人だの、腕に黒眼がちの乳呑兒を抱いた恰好のいゝモルダヴィアの女達だのが、そのカ

ロウツアを取巻いてゐた。男の連中は沈黙を守り、女の連中は熱心に何物かを待ち構へてゐた。門が開いた。そして數人の警官が往來へ出てきた。その背後から二人の兵士が鎖に繋いだキルヂヤリを連れて出た。

彼は三十歳位に見えた。その陰鬱な顔の相好は整つてゐたが、残酷さうであつた。丈は高く、肩幅は廣くて、並々ならぬ肉體的の力を賦與されてゐるやうに見えた。染別けの頭巾は彼の頭の片側を蔽ひ、幅の廣い帯は細やかな腰にくるぐる巻かれてあつた。濃い暗緑色の長い上衣やシャツの廣い褶は膝頭の下まで垂れ下がつて、美しいスリッパは彼の仕著せの残り布で造へてあつた。彼の風彩は傲慢で、しかも平靜であつた……一人の役人は釦の三つぶら下つてゐる著古しの制服を著た。顔の男だつたが、白蠟の眼鏡の、紫色の把手を掴んで鼻にかけながら、書類を展げて鼻聲の、モルダヴィア語で朗讀しだした。段々尊大に彼は繋かれたキルヂヤリを眺めるやうになるので、その書類はキルヂヤリに關したものである事が判つた。キルヂヤリは注意深くそれを傾聴してゐた。役人は朗讀を終ると、書類を疊んで、宣告は済んだからカロツカアに乗せてひき出すやうに命じて、人々に荒々しく叫んだ。するとキルヂヤリは彼の方へ振り向ひて、モルダヴィア語で二言三言云つた。彼の聲は震へた、顔色は變つた、彼はわつと泣き出して、足械を鳴らしながら警察官の足下に打倒れた。警官は怖かつて、跳び退いた。兵士達はキルヂヤリを引起さうとしたが、彼はひとりて起き

て、鎖をたぐりながらカロツアへ乗り込んで、「ひき出せッ！」と叫んだ。憲兵は彼の隣に席をおろし、モルダヴィア人は鞭を打揮つたので、カロツアはひき出された。

「キルヂヤリは君に何と言つたね」と警官の若い方が訊いた。

「キルヂヤリの妻や子供の面倒を見てやつてくれつて頼んでゐたよ」と警官は微笑みながら答へた。「家族の者はキリアからあまり離れてゐないブルガリアのある村に住んでゐるんだとさ、キルヂヤリが云ふのにや自分のために妻子が窘められるだらうつて心配してゐるのさ。暴れ者なんていふものは、かうした間拔けたものだよ！」

若い警官達の談話は私を深く動かした。私は憐れなキルヂヤリを氣の毒に思つたのであつた。長い間私は、彼の運命がどうなつたかちつとも知らなかつた。幾年かたつて、私はその若い警官に邂逅した。私達は昔のことを語り出した。

「君の惡意なキルヂヤリはどうしたね」と私は訊いた。「どうしたか、知つてゐるかい。」

「勿論、知つてゐるとも」と彼は答へた。そして次のやうな話を私に語つた。

ヂヤシイに運ばれて行つたキルヂヤリは、彼に磔を宣告した總督の前に連れ出された。死刑執行はある祭日まで猶豫された。その間彼は監獄に禁錮されてゐた。

囚人は七人の土耳古人（罪人ではなかつたが、彼らの心の中はキルヂヤリその人よりもよつほど

山賊であつたのだ。によつて警護されてゐた。彼らは彼を尊敬してゐた、あらゆる東洋人のやうに彼の珍しいいろいろな物語に飽くことなく傾聴するのであつた。

護衛兵と囚人との間に親密な交情が湧いた。ある日キルヂヤリは彼らに向つて、「兄弟達！ 私の死ぬときも近づいてくるのだ。誰とて私の生命を救ふことのできる者はない。程なく私は君達とお別れするよ。何か私の思ひ出になるやうな者を君達に残してゆきたいものだ。」

土耳其人達は耳を欷てた。

「兄弟達」とキルヂヤリは後をつづけた。三年前、死んだミカエラキと二人つきりて強盗を働くのに浮身を窺してゐた時分のことだ、私達はヂヤシイから餘り距らない野原に、金を一杯つめた湯沸しを埋めておいたんだ。勿論私もミカエラキもその蓄財を使ふやうなことはないだらう。だから君達はそれをとつて、仲よく別けてくれたまへ。」

土耳其人達は殆んど氣が遠くなるやうな氣がして、問題はどうして彼らがこの恵まれた場所を見つけたらいいかといふことになつた。彼らは考へに考へて、最後にキルヂヤリ自身をその場所へ案内させることに決めた。

夜がきた。土耳其人達は囚人の足から鎖を取拂つて、手を縛てからげた。さうして街を出て、野原を指して彼と一緒に掛けて行つた。

キルヂヤリは丘から丘へと同じ方向を辿りながら、彼らを案内して行つた。彼らは長い間歩きつづけた。到頭キルヂヤリは大きな石の近くまで來ると立留つて、南に十二歩量つたが、足踏みして「こゝです」と謂つた。

土耳其人達は彼らの手筈をきめだした。なかの四人はヤタガンを抜いて、地面を掘り始めた。三人は護衛をして残つてゐた。キルヂヤリは石の上に腰を下して、彼らの仕事を見成つてゐた。

「さあ、どれほど深く掘れましたね」と彼は訊いた。「出てきませんか。」

「まだ出て來ない」と土耳其人達は答へた。さうして汗が霞のやうに流れるほど熱心に彼らは働いた。

キルヂヤリはじれつたい容子を見せだした。

「なんといふ人達だらう！」と彼は叫んだ。「どれ位掘つたらいいのか、分らない人達だなあ、私なら瞬く間にすつかり仕事を仕あげてやるんだがね、若い衆！ 手を解いておくんなさい、さうしてヤタガンをお貸しなさいよ。」

土耳其人達は勘考して、ともどもに相談を شدした。「どんな危険があらう？」と彼らは論談した。「手を解いて、ヤタガンを渡してやらうぢやないか、むかふはたつた一人だし、こつちは七人だし、そして土耳其人達はキルヂヤリの手を解いて、ヤタガンを渡した。

到頭キルヂヤリは自由になつて、武器を持つた。その刹那に彼はいかなる事を感じたであらうか！……彼はさつさと掘り出したので、護衛兵もその手傳をした。……不意に彼はヤタガンをその中の一人に撃ち込んで、その胸に刀物をとどめたまゝ、彼は二挺の短銃を帯の間から掘み出した。残りの六人の者は、キルヂヤリが二挺の短銃を握つたのを見ると、遁け去つた。

キルヂヤリは今、ヂヤシイの附近で本職の山賊をつとけてゐる。つひ先達も彼は知事に五百レウス(一レウスは十ペンスに換する。)を強請る手紙を書いた。そしてその金銭を呉れない曉にはヂヤシイの街に火を點けて、知事その人をまでも焼き殺すぞと、脅嚇した。五百レウスは彼に渡された！  
かういふのがキルヂヤリである！

吹

雪



われわれにとつて記念すべき時代である千八百十一年の末つ方、ガヴリール・ガヴリロヴィチ・――は、ネナラドウヴァの所有地で暮してゐた。彼は愛想がよい上に親切だといふので土地中の評判がよかつた。近所界限の人達は絶えず彼の許に訪づれた。なかには馳走のために来る者もあり、なかには彼の妻のブラスコーヴィア・ペトロヴナと五哥賭の「ポストン」を遊びに来るものもあり、又なかにはこの家の娘マリア・ガヴリロフナといふ十七の蒼白い、すらりとした少女を見に来るものもあつた。彼女は申分のない結婚をするものと考へられてゐた、そして多數の人から自分の妻に、若しくは自分の伴に貰ひたいと、彼女は望まれてゐた。

マリア・ガヴリロフナは佛蘭西の小説に仕込まれてゐたので、従つてもう戀に陥ちてゐた。彼女の選んだ相手は、貧乏な陸軍中尉で、其の頃賜暇で彼の村にきてゐた男であつた。その青年が彼女の戀情に、同じ燃ゆる思ひを報いてゐたことも、又彼の戀人の親達が兩人の好き合つてゐる仲に氣ついて、娘に彼を思ひ切らせやうと、彼を免職された陪席判事よりもずつと酷く遇らつてゐたことも、殆んど述べるまでの必要がないことであつた。

この戀人は互に文通をしたり、毎日毎日二人つきりて小さな松林のなかや古い會堂の近所で逢つたりしてゐた。彼らは其所で永久の愛の誓ひを交はしたり無情の運命を啣つたり、いろいろな計畫をめぐらしたりした。かうした文通や相談は極めて自然に彼らを次のやうな結末に達せしめた。

もし私達がお互なしに生き存らへることができないならば、そしてあの無情な親達の意志が私達の幸福な行手に立ち塞がるならば、何故私達は親達なしに爲すことができないのか。

この幸福な思想は、青年の心に創造せられたもので、そしてそれが、マリア・ガヴリロフナのロマンチックな空想に適合したといふことは、言ふ迄もない話である。

冬が来て、彼らの逢瀬は堰きとめられたけれども、文通は一層盛んになつた。ウラディミル・ニコラエヅチは手紙の度ごとに、自分に彼女の身を委せて呉れ、秘密に結婚して呉れ、暫くの間身をおくすやうにしよう、それから後に、二人揃つて兩親の足下に身を投げ出せば遂には戀人同志の雄々しい契と不幸とに動かされて、「子供達よ、われらが腕に來れ！」と屹度云つて呉れるに相違ないだらうと、彼女に懇願するのであつた。

マリア・ガヴリロフナは永い間躊躇してゐた。そして出奔に對するさまざまの計畫は幾度か斥けられた。到頭彼女は承諾した。指定された日には彼女は晚餐をせずに頭痛がするといふ口實の下に彼女の居間に引籠ることにした。彼女の女中もその隠謀の仲間に入つてゐた。それで彼らは二人で裏手の階段から庭に下りて行くと、庭の背後に一臺の櫓が用意されてゐるのを見つける、彼らはそれに乗ると眞直にネナルドウヴァから五露里許りあるチャドリノ村の教會へ眞直ぐに駆けつける、其處でウラディミルは彼らを待ち合せてゐるといふことになつてゐた。

決定した日の前の晩には、マリア・ガヴリローフナは夜どほし眠らなかつた。彼女は肌着やその他衣類の品々を纏めたり縛つたりして、彼女の友達の若い感傷的な娘と両親とに宛て、長い手紙を書いた。彼女は自分の取つた手段を辯明する時には熱情の打克ち難い力に促されて、いかにも哀つばい言葉で彼らに別れを告げた。そしていつかわが愛する父母の足下に身をなげることの許される時を、私は一生の中で最も幸福な時と思ふに違ひない、と書いて筆を結んだ。

親と友とに燃ゆるやうな心を夫々ふさはしい文句で刻みつけた二通の手紙を封蠟で封じ終つて、彼女はちやうど夜明け前に寢床に身を投げて假睡んだ、けれども絶えず恐ろしい夢に襲はれて目を醒ました。最初、彼女は家出して結婚しようとするに、櫓に乗つたその刹那に、父が彼女を押し止め、恐ろしい速さで雪の上を曳きずつて行つて、彼女を眞暗な、底知れない深淵に投げ込んだ、で、彼女は云ふに云はれぬ沈んだ心持で眞倒様に落ち込んで行くやうに思はれた。それから彼女はウラディミルが蒼白くそして血にまみれて、草の上に打倒れてゐるのを見た。彼は絶え入り相な呼吸の下から鋭い聲で、自分と早く結婚してくれと嘆願した！……いろいろな奇異な、馬鹿氣た幻がそれからそれと彼女の眼の前に浮んできた。到頭彼女は起き上つたが、いつもより蒼白く、本當に頭痛をさへ覚えてゐた。彼女の父も母も彼女の不安相な様子を見て、やさしい氣遣ひからかう間斷なく尋ねたのである。

「マーシヤ、お前はどうしたのだ」病氣なのかい、マーシヤ」と。彼女は斷腸の思をするのであつた。彼女は親達を安心させようとして、元氣さうに見せようとしたが、しかし無駄目であつた。

晩になつた。彼女が自分の家庭の人と親しくしられるのもこれが最後の日だといふ思ひは彼女の胸を重苦しくした。彼女は生きてゐる、といふより寧ろ死んだものゝやうであつた。ひそかに彼女はあらゆる人達や周囲のすべての物に別れを告げた。

夕食が供へられた。彼女の心臓は烈しく鼓動しだした。震へ聲で彼女は何も喰へたくありませんと言ひきつて、父と母との傍を去らうとした。彼らはいつものやうに彼女を接吻して祝福してくれた。そして彼女はやつとの思ひで泣くのを押し止へることができた。

自分の居間に着くと、彼女は椅子に身を投げて、わつとばかりに泣き出してしまつた。彼女の女中は、彼女に氣を静めて勇氣をお出ささいと勵ました。萬事の用意は整つてゐた。半時間のうちに、マーシヤは永久に親の家から、彼女の部屋から、別れて行くのである。さうして彼女の平和な乙女の生活からも……。

戸外の中庭には、雪がしとしと降つてゐた。風は咆えて鐵戸がゆすぶられたりかたがた鳴つたりしてゐたので、何も彼も彼女には、不幸の前兆のやうな氣がされた。

間もなく家のなかには静まり返つた。誰も彼も眠りに就いた。マーシヤは肩掛シヰトクにくるまり暖かい外套

を着て、手に小さい箱を持つて裏手の階段を下りて行つた。彼女の女中は二つの包を持つてその後を續いた。彼らは庭へ下りた。吹雪は静まつてはゐなかつた。風は恰も若い罪人を押止めようと試みるかのやうに彼女らの顔に吹きつけた。どうにかかうにか彼らは庭の端まで辿りついた。往來には櫓が待つてゐた。寒さに半ば凍つた馬は、ちつとしてはゐなかつた。ウラデイミルの馭者は、いらだつ馬を制しようとしながら彼らの前を行つたり來たりした。彼は令嬢と女中とを櫓に助け乗せ、箱と包みとを車體に積みこんで手綱を握んだ。さうして馬は駆け出した。

この令嬢は運命の手と馭者のテレシユカの伎倆に委せることにしておいて、吾々はわが若い戀人の方に立還つてみることにしよう。

ウラデイミルはその日は一日中乗り廻つて暮した。朝のうちにはヂヤドリノの牧師の許を訪問して、苦心慘愴した揚句やつと承諾させたので、そこで近隣の地主達の中から立會人を捜しに出掛けた。第一に訪ねて行つたのは、四十歳許りの退職騎兵匠手で、名をドラヴィンといつたが、その男は喜んで承知してくれた。ウラデイミルが言ふやうな冒険は、その男にの青年時代のことや、驃騎兵隊にゐた頃の悪戯を思ひ出させたのであつた。彼はウラデイミルに食事をして行くやうにと説き薦めて、あと二人の立會人を見つけるのは譯はないと請合つてくれた。ところが實際、食事が済むと直きに、口髭を生して柏車をつけた檢察官のシュミットと、警察署長の息子で、近頃槍騎兵に入つた十六に

なる少年とがやつてきた。彼らはウラデイミルの頼みを引受けてくれたばかりでなく、彼の爲めには生命も犠牲にしようとしてまで誓つてくれた。ウラデイミルは有頂天になつて彼らを抱擁した。そして萬事の用意をするために家に歸つた。

もう疾くに暗くなつてしまつてゐた。彼は忠實なテレシユカに委細の指圖をして、櫓を持たせてネナラドウヴァ村へ遣はし、自分は小さな櫓に一匹の馬を命じて馭者もなしに、二時間ばかりも経てばマリア・ガヴリローフナが着く筈のジャドリノ村へ一人て出掛けて行つた。彼は路順をよく知つてゐたので、せいぜい二十分もかゝれば、行けるのであつた。

しかしウラデイミルが圍場からやつと廣い野原へ出るか出ないに、風が吹き起つて、黑白も分かんぬ大吹雪になつた。瞬く間に道路はすっかり隠れてしまつた。あらゆる周圍の事物は濃い黄色い霧の中に姿を消してしまひ、霧の中を白い雪片が片々と降りしきつて、空も地も混沌となつた。ウラデイミルは、氣が附いてみると、野原の眞只中に自分があるの、再び路を見附け出さうと試みたが駄目であつた。馬は無茶苦茶に走つてゆくので、刻々に推雪の中に足を踏み込んだり穴に躓いたりして、櫓は絶えず顛覆しさうになる位であつた。ウラデイミルは正しい方角を失はないやうにと努めた。けれども彼にはもはや三十分以上も経つたやうに思れるのに、まだヂヤドリノの森へは來てはゐなかつた。それから十分は経過した——それでもまだ森らしいものは見えさうになかつた。ウ

ラディミルは深い溝渠の縦横についてゐる野を横ぎつて馬を駆つた。吹雪は吹き歇まず、空は一向に晴れて来さうになかつた。馬は疲れ出して来て、實際、絶えずもう雪に半分埋もれさうになつてゐるにかゝはらず、汗が大つぶな玉となつて流れるのであつた。

到頭ウラディミルは違つた方角に進んでゐることが分つた。彼は馬を駐めて、考へたり回想したりさうして比較したりしだした。そして彼は道を左の方へ取らなければならなかつたのだといふことを悟つた。彼はそこで左へ轉じた。馬はどうやらかうやら前へ引張つて行くといふ風であつた。彼はかうして一時間以上も途中にくづつておつたのだ。ヂヤドリノ村へはもう遠くないに違ひなかつた。しかるに彼が段々進むにつれて、仲々野原の涯はなかつた——堆高い雪と溝ばかりであつた。橋は絶えず顛覆しさうになつては、間断なくその度に再び立直るのであつた。時間は過ぎていつた。ウラヂミルはひどく不安になりだした。

到頭何かしら黒い物が遙か彼方に現はれた。ウラディミルはその方へ道を眞直にとつた。近づくにつれて、それは森であることが彼にわかつた。

「あゝ有難い——と彼は思つた。もう遠くはない。」

やがて案内知つた道路に出るか、それとも森を廻るだらうと思ひながら、彼は森の外側に沿つて馬を駆つた。ヂヤドリノ村は丁度その森の裏にあつたのである。彼は間もなく道路を發見したので、

多のために今は木の葉の剥がれた暗い森の中へ乗り込んでいつた。風もこゝでは吹き荒れることが出来ず、道路は平滑なめらかであつた。馬も元氣を回復したので、ウラディヂミルはほつと安心した。

しかし彼はぐんぐん馬を駆つたがヂヤドリノ村は見えさうになかつた。森はつきなかつた。ウラディミルは知らない森へ這入つてしまつたのだと氣が附いてふるへあがつた。森はつきなかつた。ウラディミルは馬に鞭をあてた。哀れな馬は速走になつたかと思ふと、ぢきに歩調を弛めて、十五分間と經たぬ中に不運なウラディミルがあらゆる奮勵をしたにも拘らず、一足毎にやつと足をずつてゆくといふ有様になつてしまつた。

段々立木も疎らになりだして、ウラディミルは森を出たが、ヂヤドリノ村は見られさうになかつた。今はもう最夜中に違ひなかつた。涙は彼の眼から溢れ出た。彼は無茶苦茶に馬を驅つた。兎角する中に嵐も風も雲は散つて、目の前には白いうねうねした敷物に掩はれた平坦な平野が展けた。夜はかなりよく霽れた。彼は遠からぬ所に四五軒の茅屋から成立つ小さな村を見た。ウラディミルはその方へ進んだ、最初の茅屋の所で彼は橋を跳び下りて、窓際へ走つて行つて戸を叩きだした。

「何かご用ですかい？」

「ヂヤドリノ村へはこれから餘程ありますかね」

「こゝからヂヤドリノ村まで餘程あるかつて？」

「さうです、さうです！ 遠いですか」

「いくらないさ、五露里ばかりだよ、」

この答へにウラディミルは、死を宣言された人のやうに、髪の毛を掴んで身動きもせずにつゝ立つてゐた。

「何處からおいでなすつたんだね」と老人は言葉をつゞけた。

ウラディミルはこの間に答へるだけの元氣もなかつた。

「ねえお爺さん」と彼は言つた。「ヂヤドリノ村まで私を連れてゆく馬をとりもつては」

「どうして馬なんぞ俺達がつつてゐませうよ」よ百姓は答へた。

「案内はして貰へまいか、金はお望みだけ出すよ」

「待たつしやい、」と老人は錠戸を閉めながら言つた。「伴に送らせませう、伴が御案内します。」

ウラディミルは待つてゐた。しかし一分も経つか経たぬ中に彼は又戸を叩きだした。錠戸があがつて、お鬚が再び現はれた。

「何ですな」

「息子さんはどうしましたね」

「今出掛る所ですよ、今靴を穿いてゐるんです、寒かあ、ありませんかい、内へ這入つて温まらつしやい。」

「有難う、息子さんを急がせて下さい」

戸が軋んで、一人の若者が棒を持つて出て來た。そして或時は道を指したり、又或時は積つた雪の中に道を搜したりして先に立つた。

「何時時分だらうね、」とウラディミルは彼に訊いた。

「おつゝけ夜明でかせうぜ、」と若い百姓は答へた。ウラディミルはその他に何事も言はなかつた。鶏が鳴いてゐた。そして二人がヂヤドリノ村へ著いた時はもう明るくなつてゐた。會堂の扉は閉

つてゐた。ウラディミルは案内者に金を拂つて牧師の家の中庭へ櫓を乗り入れた。マーシヤの乗つて來た櫓はそこにはなかつた。いかなる報知が彼を待ち受けてゐたことぞ！……………

しかし吾々はネナラドウヴァア村の金持の地主の方に歸つて、そこにどんなことが起つてゐるか、見ることにしよう。

何の變りもなかつたのである。

老人夫妻が眼を醒まして居間へ行つてみると、ガヴリール・ガヴリロヴィチは寢帽を冠つてフランネルの胸着を着て、プラスコーヴィア・ペトロヴナは綿入れの寢間衣を着てゐた。茶壺が持ち込まれ

ると、ガヴリール・ガヴリロヴィチは女中に、マリア・ガヴリロフナの気分はどうか、昨夜はどうだつたかと尋ねに遣つた。女中は戻つて来て、お嬢様はよくは眠れなかつたが、今は気分もさつぱりしたので、直ぐにこの居間へ下りて行くと仰しやつたと告げた。そして實際、扉が開いて、マリア・ガヴリロフナがその部屋へ這入つてきて、両親に朝の挨拶をした。

「マーシャ、頭はどんな腫れだね」とガヴリール・ガヴリロヴィチが訊いた。

「もうよつぽといふんですの、お父様」とマーシャは答へた。

「屹度お前は昨日の炭火の瓦斯を吸つたからなんだよ」とブラスコーヴィア・ペトロヴナが言つた。

「屹度さうだわ、お母様」とマーシャは答へた。

その日は大變幸福に過ぎた、けれども、夜になつてマーシャは俄に病氣になつた。醫者が町から呼び寄せられた。宵の中に醫者は来て、病める乙女が人事不省に陥つてゐるのを見た。劇しい熱が發して、二週間といふもの哀れな患者は死と生との境をうろついた。

家の者は誰一人として彼女の出奔について何一つ知つてはなかつた。あの前夜に彼女に依つて書かれた書翰は焼き棄てられてしまつてあつたし、彼女の召使は主人の叱責を恐れて、その事に就ては何事も洩らさなかつた。牧師も、退職の騎兵旗手も、お髯の検査官も、槍騎兵の少年も慎重で、わけのわからないやうな事はしなかつた。馭者のテレシユカも酔拂つた時ですから、一言も他言は

しなかつた。かう、いふ風で、秘密は半打以上の一味の者によつて保たれてゐた。

しかしながらマリア・ガヴリロヴィナその人は熱に浮かされてゐる間に、譫言でそれを口走つてしまつた。けれどもその言葉はまるで聯絡がなかつたので、病床の傍を片時も離れなかつた母親も、娘はウラデイミル・ニコラエヴツチを深く戀してゐて、この病氣もまさしくその戀が原因であるといふこと丈しか分らなかつた。母親は良人と近所の二三の人とに相談したが、これは明らかにマリア・ガヴリロフナの運命で、女といふものは一旦自分の良人と定めた男とはどうしても離れることが出来ないものだ、貧乏が罪惡だといふてはなし、人は富と結婚するものでもない、人物と結婚するのであるなどといふやうなことで遂に話は異議なく決まつた。道徳上の諺といふものは、吾々の判断で決定し兼ねるかういふ場合に不思議に役立つものである。

さうかうしてゐる中に娘は快くなりかけた。ウラデイミルは久しくガヴリール・ガヴリロヴィチの家に姿を見せなかつた。彼は例のやうに遇はれるのを恐れてゐたのだ。いよいよマリアとの結婚を許すといふ——思ひがけない吉報を、彼に使を遣つて知らせるに決めた。けれども彼らの招待に對する返事に、彼から半分氣狂ひになつて書いたやうな手紙を受け取つた時の、ネナラドウヴァ村の地主の驚きはいかばかりであつたことか。彼は決して二度とお宅へは足を踏み入れないつもりだから、何卒貴方々も、只死のみ希つてゐるこの哀れな人間を、忘れて頂きたいと言つて來たので

あつた。二三日経つて彼らは、ウラディミルが軍隊へ入つたといふことを聞いた。これは千八百十二年のことであつた。

永い間親達はこの事をマーシヤに知らさないで置いた。マーシヤは今ではもうすっかり快くなつてゐた。彼女は決してウラディミルの名を口に出さなかつた。それから數箇月経つてからのことであつたが、ポロダイノの戦に(譯註—モスコウから約五十哩離れた村で、ナポレオン一世の露國侵入の際、露佛兩軍の間に血腥い戦闘のあつた場所である)殊勳を樹てたり重傷を負つたりした、軍人の名簿の中に彼女の名を發見して、彼女は卒倒してしまつた。そして又しても熱に襲はれるのではなからうかと氣遣はれた。けれども幸なる哉！卒倒の發作は大した結果にもならなかつた。

又もや不幸が彼女の上に降りかゝつた。といふのは、ガヴリール・ガヴリロヴィチが全財産を相続人の彼女に遺して死んでしまつたことである。しかしながら遺産は彼女を慰めなかつた。彼女は哀れなブラスコヴィア・ペトロヴナの悲歎を眞心からともにして、自分は斷じて母の傍を離れないつもりだと誓つた。二人は多くの悲しい想出の地たるネナルドウヴァを引拂つて、他の所有地へ引越して行つた。

若い金持の相続者の周圍には求婚者達が群つて來た。しかし彼女は彼らのいかなる人にも、かすかな希望をすら與へなかつた。彼女の母は時折誰かを選ぶやうに勧めた。けれどマリア・ガヴリロ

フナは首を振つて物悲しさうにした。ウラディミルはもはや生きてはゐない、彼は佛軍侵入のその前夜モスコウに於て戦死を遂げたのであつた。彼の記憶はマーシヤの胸に聖く保たれてゐるやうに見えた。少くとも彼女は、彼の想出となるやうなものはどんなものでも、彼が嘗て讀んだ書籍や製圖や手帳や、彼が彼女のために寫してくれた詩の文句までも、大事に藏つて置いた。近所の人達はすべてこれらのことを聞いて、彼女の誠實な心に驚いた。そしてこの處女神アルテミシアの憂愁なる忠實を、最後に勝ち得る英雄は誰であらうかと、好奇心をもつて待つてゐた。

その中に戦争は光榮ある終を告げた。わが露西亞の軍隊は戰場から還り、人々は戶外に出て彼らを歓迎した。音楽隊は凱旋歌——「ヘンリー・カートル萬歳」や、「ジコンド」の歌曲やチロルのワルツの曲を奏した。出征する時にはまだほんの少年であつた士官達は、一人前の男となつて、勇ましい姿で胸に勳章を飾つて歸つてきた。兵士達は絶えず仲間同志で、佛蘭西語と獨逸語とを混ぜ合した言葉で、楽しみに喋舌つてゐた。忘るべからざるの時！光榮と熱狂との時！「祖國！」といふ言葉を聞いて吾々露西亞人の胸はどんなに躍つたらう！再會の涙はどんなに甘いものであつたらう！皆心を一にして露西亞人はいかに國民的な誇りと皇帝ツァーに對する愛との情を結びつけたことであらう！しかも皇帝にとつては——あゝ、どんなであつたらう！

婦人達は、露西亞の婦人達は實に比類がなかつた。彼女らの毎もの冷靜は消え失せた。彼女らの

狂熱は實に酔へるが如く、勝利の兵士達を迎へては「ウラア」を絶叫したのであつた。

「そして帽手をば空中高く投げあげた！」(グリボアドフ)

この際、どの士官も最善最上の報酬を受けたのは、ロシヤ婦人のお蔭だと告白しないものはなかつた。

この榮ある當時に於てマリア・ガヴリローフナは母親と一緒に×××といふ田舎に暮してゐたので、二人とも都ではどんなに華々しく凱旋軍の歓迎が行はれてゐるか知らなかつた。しかし地方や村落に於ける一般の狂熱は、かく言ふことができるならば、更に大きいものであつた。田舎での將校達の姿はそれこそ眞の勝利者たるの概があつて、質素の身装を愛する人達は、その將校の周圍を非常に氣遣つたのであつた。

吾人が既に前にも述べた通り、冷やかな態度をしてゐたにも拘らず、マリア・ガヴリローフナは相變らず求婚者達に取巻かれてゐた。ところが鈕穴に聖ジョージ勳章を下げて、近隣の若い女達が注視したくらくらゝ「床しく蒼ざめ」た顔色をした負傷將校の、驍騎兵ボウルミン大佐が田舎の屋敷に姿を現はすと、すべての人は皆舞臺裏に姿を消してしまつた。彼は年頃二十六位であつた。彼は自分の所有地へ歸省の賜暇を得てきたのであつたが、そこはマリア・ガヴリローフナの所有地の隣であつた。マリアは彼に對しては特別の注意を傾けた。彼の前では彼女の日頃の憂愁も消え失せてしまふ

のであつた。それは彼に媚ひてゐたのだといふことは出来ない。しかし詩人がこの様子を見たら、かう言ふに違ひなかつた。

‘Se amor nonè, che dunque?’ (もしもこれが愛でなかつたら一體何であらうか?)

ボルウミンは實際非常に人好きのする青年であつた。彼は女に殊更悦ばれる性質を持つてゐた、といふのは、彼の上品な心と物を觀察する心とはすこしの厭味もなく、それである、ちよつとした皮肉な傾向がないこともなかつた。マリア・ガヴリローフナに對する彼の態度は、單純で、淡泊なものであつたといへ、彼女が言つたりしたりする事に、彼の心と眼とがついて廻るのであつた。彼は物靜かな、内氣な氣性のやうに見えたが、噂によれば、以前には手のつけられない道樂者であつたとの事である。けれどもマリア・ガヴリローフナの意見では、これがために彼を非難はしなかつた。彼女は世間一般の若き女達のやうに——そんな馬鹿げたいたづらをも、彼の大膽な熱烈な氣性の反影として許してゐたのである。

しかし他の色々な事より以上に——彼の優しさより以上に、彼の心持ちのいゝ話振より以上に、彼の床しく蒼ざめた顔色より以上に、負傷した腕の吊帶より以上に——この若い驍騎兵の將校の黙り込んだ様子が、彼女の好奇心と想像とを刺激した。彼女は随分彼が好きだといふ感情を自ら表はさずにはゐられなかつた。恐らく彼とても亦、悟がよい上に經驗もあつたので、既に彼女が自分と



他の者との間を區別してゐることを認めてゐたに相違なかつた。ではどうして彼女は自分の足下に身を投げた彼を見もせず、彼の宣言を聞かなかつたのであらうか、何が彼を引止めたのか、眞實の戀には引離せない内氣さか、それとも誇か、それとも腕に覺えのある男の思はせ振りか、彼女にとつては謎であつた。長い間いろいろ思ひめぐらした末、それは只内氣なせいだと彼女は判断して、前よりもせか／＼しく一層心を勵ましてやらう。若しどうしても必要な場合には優しさを表して迄も、彼を大膽にさせようと決心した。彼女は最も思ひがけない大團圓の著くやうに用意して、ロマンティックな場面の來る時をちつと待ち構へてゐた。秘密といふことは、どのやうな性質のものであつても常に女性の心を重く壓しつけるものである。彼女の策略は望み通りに成功を遂げた。少くともポウルミンはいよいよといふ瞬間が近づいたやうなので黙想に耽つたり、彼の黒瞳勝な眼を彼女の上に燃ゆるやうに注いだりした。近隣の人達は恰も話がまとまつてしまつたかのやうに結婚のことを話し合つてゐたし。善良なブラスコイグアイア・ヘトローダナは娘が到頭秀れた戀人を見附けたのを喜んでゐた。

或時、老婦人が一組の骨牌を弄びながら獨り居間に坐つてゐた。その時にポウルミンが部屋へ這入つて來て、早速マリア・ガヴリロフナを尋ねた。

「あの娘は庭にゐます」と老婦人は答へた。「行つて御覽なさい、そして私はこゝで二人を待つてゐ

ませう。」

ポウルミンは出て行つた。そして老婦人は十字を切つて心に思つた。「多分今日は決まるだらうよ」と。

ポウルミンは池の畔の柳の木の下でマリア・ガヴリロフナが物語のまぎれもない女主人公のやな、白い衣服を着て、一冊の本を持つて佇んでゐるのを見附けた。先を越して二口三口問ひをかけた話をしてたりしてから、マリア・ガヴリロフナはわざと話をとぎらしてしまつた。それで二人は互にてれるばかりで、いきなり思ひ切つて心を打明けるより外逃れる途がない様になつてしまつた。そこでかういふことになつた。ポウルミンは自分の苦しい立場を感じて、自分は永い間貴女に自分の心を打明ける機会をねらつてゐたのだと言つて、暫くの間、注意を求めた。マリア・ガヴリロフナは本を閉ぢて、ちやうど彼の要求を承諾した合言葉のやうに眼を伏せた。

「私は貴女を愛してゐるんです」とポウルミンは言つた。「私は熱烈に貴女を愛してゐます……」

マリア・ガヴリロフナは顔を赫らめて、益々首垂れるばかりであつた。「私は無謀にも毎日のやうにお聲を聞いたりお顔を見たりして、甘い歡樂に耽つてゐたのです……」マリア・ガヴリロフナは聖ブルークス（譯註）チャン・ジャック・ルツリーの著（ラ・ヌーヴェル・エロ・エイズの中にある）最初の手紙を心に思ひ起した。「けれども今となつては私の運命に逆ふにはあまり遅くなりすぎました。貴女の記憶が、貴女のいとしい比類のない幻が、

これから先は私の生涯の苦痛ともなり慰めともなるでせう、しかし私にはまだ盡さねばならぬ重大な義務があるのです——私の恐ろしい秘密を打明けることなのです、それをお話ししてしまへば私達の間には越えることの出来ない障壁が築かれるでせう……」

「その障壁はいつも築かれてゐますわ」とマリア・ガヴリローフナは急いで言葉を遮ぎつた。「私はどんなことがあつても貴方の奥様にはなれませんもの。」

「そりや、知つてゐますとも。」と彼は靜に答へた。「貴女が以前に戀をなすつたことは知つてゐます。けれども亡くなられて、三年間の悲しみが……ねえ、親切なマリア・ガヴリローフナさん、私の最後の慰めを奪はないで下さい、私を幸福にするやうに貴女が承諾して下さいるものと私は思つてゐたのですが、もしも」

「何卒、お仰らないで下さい。お仰つちやいけません。貴方は私をお苦しめなさるといふものですわ。」

「え、それは解つてゐます、私は貴方が自分のものかも知れなかつたといふ氣がします、けれど——私はこの世の中で最も哀れな人間なんですよ。——私は既に結婚したのです！」

マリア・ガヴリローフナは驚いて彼を見た。

「私は既に結婚したのです」とポウルミンはあとを續けた。「私は四年前に結婚しました。さうして

私は自分の妻がどんな人やら、今はどこに居るのやら、再び又會へるのやらどうやら、それさへ知らないんです！」

「まあ、貴方、何と仰いますの」とマリア・ガヴリローフナは叫んだ。「まあ、随分不思議なことすわねえ！ つゞけて、どうぞもつと先を話して下さいな、それから私がお話しますから——だから、どうぞあとを話して下さいまし」

「千八百十二年の初でしたが」とポウルミンは言つた。「私は自分の聯隊が駐屯してゐたヴィルナへ行かうと急いでゐました。ある晩のこと遅く、ある驛場へ着いたので、大急ぎで馬の用意をしてくれつて吩咐けました、すると俄かに恐ろしい吹雪になつてしまつたので、驛長や馭者達は吹雪が歇むまで待つやうにと忠告したのです。私はこの忠告に従つたのですが、譯のわからぬ不安が私の心に宿りました。ちやうど誰かゞ出發を促してゐるやうな氣がしたのです。その間も吹雪は歇みませんでした、私はもう我慢がしきれなくなつたので、再び馬を命じて、嵐の中へ出かけました。馭者は河の流に沿つてゆくと三露里ばかり近道だといふことに氣がついたので、河岸は雪に掩はれてゐました、で、馭者は私達が道路に出なければならぬ場所を通り越してしまつたので、氣が附いてみると村の知らない所へきてゐるのです。——嵐は歇みませんでした、私は遙か彼方に灯を見附けたので、その方へ進むやうに馭者に命じたのです。私達はある村へ着きました。木造の會室の中に

は灯が點つてゐました。會堂は開け放たれてゐました。柵の外には五六臺の櫓が駐まつてゐて、人々が支關から出たり入つたりしてゐました。

「こつちだ！ こちつだ！」と數人の聲が叫びました。

「私は取者に奥へ乗り入れるやうに命じました。」

「一體全體どこをうろついてゐたんですか」と誰か私に言ひました。「花嫁さんは氣絶してゐるんですよ、牧師さんもうしていゝのか分らないので、私達はちやうど今歸る仕度をしてゐた所です、さあ、大急ぎでいらつしやい」

「私は一言も言はないで櫓を出て、教會へ這入つて行きましたが、そこには二三本の小蠟燭が薄暗い光を放つてゐました。若い女が會堂の暗い隅のべんちんに腰かけてゐて、その女の顚顚を別の娘が擦すつてゐました。」

「あゝ、有がたい！」と顚顚を擦つてゐた娘が言ひました。「貴方たうとういらつしやいましたのね、貴方はもう少しでお嬢様を殺したる所でしたわ。」

「老牧師は私の方へ進み寄つてきて、言ふのは、

「始めてもいゝですかい。」

「始めて下さい、始めて下さい。教父様」と私は浮つかり答へてしまつたのです。

若い娘は立上りました。彼女はちつとも悪い顔立ではないやうに見えました。……自分にも解らない、怒し難い輕々しい考に驅られて、私は説教壇の前の彼女の傍に席をとりました。牧師は慌てゝゐました。三人の男と付添の女とは花嫁を支へて、その事の方に彼らは氣を奪はれてゐました。私達は結婚しました。

「お互に接吻をなさい！」と立會人が私達に言ひました。

私の新妻は蒼白い顔を私の方へ振り向けました。私は彼女を接吻しようとしてました、と、その時彼女は「おゝ！ あの女ぢやない！ あの女ぢやない！」つて叫んで、氣を失つてしまつたのです。

立會人は吃驚して私を眺めました。私はくるりと身を返して、少しも妨げられずに會堂を出ると、<sup>キビトカ</sup>幌籠に飛び乗つて、「出せッ！」つて叫びました。

「まあ！」とマリア・ガヴリローフナは叫んだ。

「さうして貴方はその哀れな奥様が、どうなつたか知つていらつしやいますの。」

「知りません」とボウルミンは答へた。「私はその結婚した村の名も、私が出發した驛場の名も知りません。その當時には私は自分の罪深い悪戯をあまり重大なことゝもしなかつたので、會堂から出ると、ぐつすり寢込んでしまひまして、翌朝三つ目の驛場へ着いてしまふまでは眼を醒しませんで

モウルミン

した。私とその時一緒だつた従卒は陣中で死んだので、私がこんな残酷な戯談をしたために、今頃はどんなに酷い報いを受けてゐるか知れないその女の人をば捜し出す望みすらもないのです。」

「あゝ！ あゝ！」とマリア・ガヴリローフナは彼の手を掴みながら叫んだ。「それでは、貴方でしたの！ で、貴方は私がお分りになりませんか。」

モウルミンは眞蒼に顔色を變へた。——そして彼女の足下に身を投げた。

## エヂプトの夜

チャールスキーは聖ペテルブルグ生粋の住民の一人であつた。彼はまだ三十にもなつてゐなかつたし、結婚もしてゐなかつた。用務があまり多すぎて堪へられないといふでもなかつた。彼の死んだ伯父は全盛時代に副總督をしてゐたことがあつたので、莫大な財産を彼に遺していつたのであつた。彼の生活は甚だのんびりしたものであつた。けれども詩を綴り、詩を出版する方面では、不運であつた。新聞雑誌では彼は『詩人』と名ざされ、應接間では『作家』と呼ばれて居つた。

詩作家が享樂する大きい特權がある代りに、所有權の代りに目的格を使用するといふ權利やその他所謂それと同種類の詩的放縱をのぞいては、露西亞詩人の特權たるものを見落すといふことを告白しておかねばならないが、彼らに許された色々な特權がある代りに、これらの人々は多大の不愉快を耐へ忍ばねばならない。なかにも詩人にとつて最も堪へ難く、最も傷ましい不幸は、刻印を押されたところの、そしてそれが未始終つきまとふところの名目である。世人は自分達の所有物のやうにして詩人を眺める。世人の意見によれば、詩人といふものは、衆人の特種な利益や、快樂のために創作するであつた、若し假りに彼が田舎から歸つて來るとするならば、最初に行逢ふ人はかう彼に話しかけるに違ひない。

「何か新作をお持ち歸りにはなりませんでしたか」と。

彼の財政が紊亂するとか、若しくは誰か彼に親しい者が病氣だとかして、深い思案に暮れるやうなことでもあると、すぐお定まりの冷笑がかういふお定まりの叫びに伴ふのである。

「屹度何か構想つてゐるんだぞ！」と。

彼が戀に陥ちてもしようものなら、その美人は英國の商店で寫眞帖を買つてきて、哀歌を懇望するのである。

もし彼が殆んど知らない人を訪ねて何か重要な用件について話し込まうとすれば、その人はすぐさま自分の伴を呼び寄せて誰それの詩をどれほどか讀むやうにと強ひる。で、その息子は下らない詩をもつて詩人を饜應する。さうしてちよつと訪ねて行つたはなからこんな具合なのである。してみると、その結果はどんなものか、お分りにもならう！ チャールスキーはお世辭や質問や寫眞帖や少年に惱まされるあまり、何か少し亂暴な行爲をせずにはゐられないのを、いつもちつと怵へてゐなければならぬといふことを知つてゐた。

チャールスキーは常にこの堪へられぬ名目から遁がれようと、能る限りの努力をしてゐた。彼は文學仲間との交際を避けて、極めて淺薄な人であつても俗人達の方を選んだ。けれど結句これでも彼を救つてはくれなかつた。彼の話は最も平凡な性質のものばかりで、決して文學の方面に

轉じなかつた。衣服はいつもながら頗る時代遅れのもので、モスコイの若い青年が内氣と迷信とを  
 抱きつゝ、その生涯の門出に聖ペテルブルグに出てきた頃のものとやうに見受けられた。書齋はと  
 いへば婦人の寢室のやうに飾られてあつて、作家を想ひ起すやうなものは何一つなく、卓子の上  
 は書籍一冊も散らばつてはゐず、壁沿ひの長椅子にはインキの染もつてはゐなかつた。其所には  
 ミューズの神や箒や刷子の缺乏を表はすやうな、例の不整頓なものとはまるでなかつた。チャ  
 ルスキーはペンを手にしてゐるところを、誰か俗人に發見されてもすると絶望するのであつた。人  
 間は一方に才能と智力とを賦與されてゐても、つまらない者に墮落し得るといふことは信ずるに難  
 くはあるまい。彼も一時は馬に凝つたらしく、一時は無鐵砲な賭博者らしく、さうして亦或時には  
 上品な食道樂らしく装つたこともあつたが、彼は亞刺比亞馬と野生の馬との區別がまるで能きず、  
 トランプの切札を記憶してゐることも能きず、それにまた、いろ／＼工夫を凝した佛蘭西料理よりも却  
 つて焼芋の方をこつそり選ぶといふ風であつた。放埒な歡樂の月日を送つてゐた彼は、あらゆる舞踏  
 會に出席もし、あらゆる交際上の宴會にも大食をして、あらゆる夜會にはレザアンの水菓子をやめ  
 られぬやうに出てゆくのであつた。誰がなんと言つても彼は詩人であつて、熱情には仲々打克てな  
 かつた。彼が「馬鹿げた發作」の（これを彼は靈感と名づけてゐたが）襲つてきたのに氣が附くと、チ  
 ヤールスキーは書齋に閉ぢ籠つて朝から夜更けまで書きつゞけるのが常であつた。彼はその時こそ

眞の幸福か何であるかを知るのみだと親友に告白してゐた。その他の時は空とぼけた顔をして逍遙  
 してゐたけれども、一と足進む毎にかういふ相も變らぬ質問に攻め立てられるのであつた。

「新しいものを何か書いていらつしやるんぢやありませんか」と。

ある朝、チャールスキーは例の幸福な心持を感じてゐたので、幻想を最も明らかな色彩で想像し  
 たり、生々した思ひかけぬ言葉が人の幻像の化身として表はれてきたり、詩句が易す／＼ペンから  
 迸り出て、明らかなリズムが調和ある思想を迎へて跳び出したりした。チャールスキーは密かに快  
 い無我の境に没頭した……そして世間や俗界のいろ／＼のつまらぬ事や、彼特有なむら氣は、もは  
 や彼には存在してゐなかつた。彼は詩を書いてゐた。

不意に、彼の書齋の扉の軋る音がして、見知らぬ男の頭がぬつと現れた。チャールスキーはわれ  
 を忘れて跳びあがつて眉を顰めた。

「そこにゐるのは誰だ」彼は用のあるのに下男が支關にゐなかつたのを心中罵りながら、腹立たし  
 げにかう訊いた。

見知らぬ男は這入つてきた。それは丈の高い、見窄らしい姿をした、見たところ三十歳位の男で  
 あつた。その淺黒い顔の相好は甚だ意味有りげであつた、といふのは、若い、秀でたその額は、陰  
 鬱な縹毛と黒く輝く眼と鈎鼻とで飾り、濃い鬚は外國人らしい特長の落ち凹んだ、朽葉色の頬を掩

ひ包んでゐたからであつた。彼の身装はもはや縫目の白くなつた黒の燕尾服に夏ズボンで、夏ズボンでよい日は秋にはよくあつたけれども、ぼろ／＼の黒い襟飾の下や黄ろいシャツの胸のあたりにほ人造のダイヤモンドがきら／＼輝いてゐた。粗毛の帽子はまるで雨かそれとも天氣の悪い日に遇つたやうであつた。もしも森林の中でこんな男に逢つたならば、諸君は彼を追剣に、交際場裡でならば——政治上の陰謀者に、或は支關でならば——不老薬か砒素を賣りつける香具師に見誤つてしまふに違ひなかつた。

「何か御用ですか」とチャールスキーは佛蘭西語で訊いた。

「貴方」と外國人は數度鄭重なお辭儀をしながら伊太利語で答へた。「Lei voglia perdonar mi, si (どうぞ御免下さい、もしも)……。」

チャールスキーは彼に椅子も薦めないで、自ら立ち上つた。そして對話は伊太利語で續けられた。「私はナポリの藝術家ですが、餘儀ない事情で故國を去らねばならなくなつたものですから、自分の伎倆を信賴しながら露西亞に參つたのです」と見知らぬ男は言つた。

チャールスキーはこの伊太利人は何かセロの音樂會でも開かうとして、その入場券を戸別に賣り附けようとしてゐるのだなと思つた。彼は一刻も早く逐つ拂つてしまひたさに、今しも二十五留呉れてやらうとしたが、見知らぬ者はかう言ひ足した。

「貴方、私は貴方々お仲間友達すくめの後援をしていただきたいのです、貴方のお私己の家へ紹介していただきたいと思ひます」

これはチャールスキーの自尊心に、さして侮蔑を興へる筈がなかつた。彼は見知らぬ男が自分の仲間と呼んだ當人を、横柄な眼で眺め遣つた。

「僕に訊ねることを許して下さい、君はどなたですか、さうして誰の指圖で僕のところへいらしたのですか」彼は自分の憤激をやつと抑へながら言つた。ナポリ人は當惑したやうに見えた。

「貴方」と彼は口訥りながら答へた。「Ho creduto (私は信じたのです)……he sentito (私は感じたのです)……In vostra Eccellenza (足下は)……mi Perdonem (私を許して下さい)……」

「どんな御用です」とチャールスキーはすげなく繰り返した。「私は貴方の豊かな偉れた才能を承つておりました。確かにこの土地の紳士方はいふ偉れた詩人に、何事によらず、能る限りの保護を盡すのを、名譽に思つてゐるに違ひありません」と伊太利人は答へて「それで、僕は敢て貴方の許へ推參したやうなわけなのです……」

「君、君は誤解していらつしやるよ」とチャールスキーは遮つた。「詩人といふ職名はわれわれの間にはないので、われわれ詩人は紳士達の保護の勧誘なんかはしないのです。われわれ詩人はわれわれ自身が既に紳士なんですからね、もしわれわれのマーセナスの連中が(えゝくそつ!)さういふ

ことを知つてゐないんたら、それだけ失策なのです、われわれの仲間には劇詩を成作るからつて、鑑樓をまつた僧侶を市街から連れてくるやうな音楽家はみません、われわれの仲間には、詩人たるものが補助してくれと頼みながら、家から家へてくく、歩いて出掛けるものもありません、剩へ、世間の人が僕のことを大詩人だと君に話したとしたら、冗談に言つたのに違ひありません、僕は以前に一度下らない諷詩を書いたことは本當ですが、しかし噫、僕は詩人の方々に共通なものといつては何一つ持つてゐないので、それに持ちたいと思つてゐません」

哀れな伊太利人は困惑した。彼はあたりをじろく見廻した。繪畫や大理石の像や青銅像やさうしてゴチック式裝飾棚の高價にびか／＼した飾物に彼は驚いた。彼は總のついた錦欄の帽子を冠つて自分の前に立つてゐる横柄な伊達者が、金の刺繡をした紫花布の上被服（はき）に土耳其式の飾帯を締めてゐると、ぼろぼろの襟飾に見すぼらしい燕尾服をきた貧しい宿なしの藝術家なるわが身——と比較べて、そこに何一つ共通なものもないのを悟つた。彼は何かしらわけの分らない言ひ譯を口吃りながら、お辭儀をして、お暇しようとした。その哀れつぽい様子にチャールスキーの心は動かされた。チャールスキーその人は彼の徳性にいろ／＼な缺點があつたにも拘らず、善良な氣高い感情を持つてゐたのであつた。彼は高ぶつた自尊心を恥しく思つた。

「どこへ君はゆかうとしてゐるんですか」と彼は伊太利人に言つた。「お待ちなさい……僕は身分不

相應な尊稱を強ひて避けてゐなければならなかつたので、僕は詩人でないと言つたのです、さあ君の用事を承りませう、僕の力に及ぶことならお役に立ちたいと思ひます、君は音楽家なんですかね」

「音楽家ぢやありませんよ、貴方」と伊太利人は答へた。「僕は貧乏な即吟者なのです」

「即吟者！」とチャールスキーは客あしらひに何から何まで冷酷なのを感じつゝ叫んだ。「何故君はもつと早く即吟者と言はなかつたんですか」

さうしてチャールスキーは眞に悔恨の情をこめて彼の手を握つた。

この親しい振舞ひは伊太利人を勇氣づけた。彼は自分の計畫を飾り氣なく談した。その外観は虚偽ではなかつた。彼には金錢が要るのであつた。そして彼は何とかして露西亞で家庭の暮し向きを改良したいと望んでゐた。チャールスキーは注意をあつめて傾聴してゐた。

「僕は君が成功されるのを望みます」と彼は憐れな藝術家に言つた。「この社交會ではまだ一度も即吟歌を聞いたことがありません、珍らしがられますよ、實際のところ、伊太利語はわれわれの間に使はれてゐませんから、理解されないかも知れませんが、しかしそれもない不幸にはなりません、大事なことは君が流行ればいゝんですからね」

「けれど、一人も伊太利語が解らないとすると誰か聞きに来てくれませう」と即吟者は考へ深くなりながら言つた。



「そんな心配はありません。誰か物好きに來ますよ。またなかには、何のかのと言つて夕方通りがかりだとか、なかには伊太利語の分るやうな顔をして來るでせう。僕は繰返して言ひますが、唯一つ大事なものは、君が流行るやうになることですよ、さうして、君が流行るやうになる——それは僕が請け合ひます」

チャールスキーは即吟者の住所姓名を聞きとつてから、頗る懇ろに即吟者を送り出した。そしてその夜、彼は能るだけの事をしてやらうと奔走に着手したのであつた。

## 二

次の日、旅籠屋の暗い、汚い廊下でチャールスキーは三十五號室を見つけた。彼はその入口に立ち駐つてノックした。扉は昨日の伊太利人によつて開けられた。

「成功だ！」とチャールスキーは彼にかゝ言つた。「君の事は都合よくいつたよ、N——侯爵夫人が客間を君に提供されることになつたんだよ。昨日君とお別れしてから僕は、聖ペテルブルグの半分をまんまと賛成させてしまつたんだ。だから入場券と案内状とを印刷させておきたまへ、僕は成功を保證しないまでも、少くとも君は、衣囊ポケットの方ぢやあ勝利者になれるとお答へするよ……」

「それが何より大事な事なんです」と伊太利人は南國出産うまれの特徴である身振り、頻りに歡びを表

はしながら叫んだ、私は貴方が援けて下さるに違ひないと思つてみました。Corpo di Bacco! (註 パツキエス(酒神)の身に纏つての意) 貴方は私のやうに詩人です、さうして詩人が秀れた者だといふことは打消されません。まあ、どうしたら貴方にこの感謝が表はせるでせう! あゝ、ちよつと待つて下さい……貴方は即吟歌を聞いて下さいませうね」

「即吟歌を!……ぢや君は聴衆もなく、樂譜もなく、それに拍手喝采もされずに演れるんですか。」  
「だつて、これよりよい聴衆がどこにありますか? 貴方は詩人です、聴衆よりずつとよく僕を理解して下さい、貴方お一人に認められるのは満場の嵐のやうな喝采よりもずつと僕には有りがたいんです、……どこかそこいらにおかけ下さい、そして題を出して下さい」

「それぢやあ、こゝに題があります」とチャールスキーが言つた。「詩人は自ら、おのが歌の主題を選ぶべし、聴衆はその靈感を導く権利なし」

伊太利人の眼は輝いた。と、彼は數語音鳴らしてみた。誇りやかに彼は頭を擧げて、——刹那の感情を表す——情熱的な詩を肩から抑揚をつけて吐き出した。……

伊太利人は罷めた。……チャールスキーは歡喜と驚愕とに充たされてちつと沈黙してゐた。「どうです」と即吟者が訊いた。

チャールスキーは彼の手を掴んで、堅くそれを握りしめた。

「どうです」と即吟者は訊いた。

「素敵だ！」と詩人は答へた。「何一つ他の觀念が殆んど君の耳に入つてゐない。長い年月君が勵んだり、愛撫したりして、上達したもののやうに、もう疾うに君のものになりきつてゐるね。さうしてそれだけ、無理もなく拍子抜けもせず不安もなく、靈感がさきに立つんだね、素敵だ、素敵だ！」

即吟者は答へて言つた。「いづれの技術でも説明し難いものですよ、彫刻家はどうしてカルララの大理石の塊の中に、隠れたるデューピターを見出して、どうして鈍や鑿でその封皮をけずつて作り出すのか？ 詩人の脳裡から湧き出た思想はどうしてちやんと四韻を備へてゐて、程よく、調和のいゝ調子に整つてゐるのか、誰も即吟者その人をのぞいちやあ、その敏捷な信念、それ相應な靈感と、他目にも不思議な意志との間の細い連絡はわからないものです。ですから、私は徒らに説明しようとはしません。しかし……知は初回の晩のことも考へねばなりません、貴方はどうお考へになりますな、聴衆にもあまり無理して出させないやうに、また同時に僕の衣囊からも出さないやうにするのにはやあ、入場券はいくらにしたらいゝでせうか。噂によればラ・グノラ・カタラニは(現世紀の初め三十五の主な都市に於て未曾有の人氣を博した有名な伊太利の聲樂家)二十五留ですとさ、いゝ値ですわ……」

俄かに詩の絶頂から帳簿机にまで話が落ちたのは、チャールスキーにとつて非常に不快であつた。けれども彼はこの浮世にはそれがなくてはならぬものであることをば中々よく知つてゐたので、伊太

利人の金銭上の計畫にも彼は力を添へた。即吟者はこの金儲の段になると、チャールスキーと口論をするくらゐまでに癡猛な貪慾を、金儲の飾りけのない楽しみを、顯はすので、チャールスキーは見事な即吟詩によつて醒めさせられた陶酔の感情を互に失はないがために急いで暇乞ひをした。豫算に心を奪はれてしまつてゐた伊太利人は、かういふ變化には氣もつかず、丁寧に辭儀をなして、永久の感謝を述べなから、チャールスキーを廊下へ、それから石段の外へと導き出したのであつた。

三

N——侯爵夫人の客間(サロイン)は即吟者の意のままに委かせてあつた。で、樂壇を選択したり、椅子を十二列に列らべたりした。當日の晩七時には電飾(イルミネーション)に部屋は照らされてゐた。入口には小さい卓子を前にして、入場券を賣つたり受付けたりする鼻の高い婆さんが、灰色の帽子に折れた羽毛をさし、指といふ指には指輪をはめて坐つてゐた。石段の近くには憲兵が立つてゐた。

聴衆は集まりだした。チャールスキーも最初に到着した中の一人であつた。彼は出演の首尾に大變力を入れてゐたので、即吟者が萬事に満足してゐるかどうか見たいものだ、逢ひたがつてゐた。彼は側部屋で伊太利人が、もどかし相に懷中時計を見てゐるところを發見した。即吟者は華美な服装をしてゐた。頭から足のさまで黒づくめに装つてゐた。シャツの笹縁(レリス)の襟は背後に折り屈けてあ

つて、むきだしの頸の異様に白いのが、濃い黒い鬚とくつきりした対象を見せてゐた。頭髮の毛は前の方へ下げて、額と眉毛とを掩ふてゐた。

すべてこれらはチャールズスキーにとつてあまり喜ばしいものではなかつた。といふのは、チャールズスキーが浮浪詐欺師のやうな服装をした詩人に逢はうとは思つてゐなかつたからである。短い對話ののち、いよく益々混んでくるサロンへ歸つた。間もなくあらゆる列の座席は、きらびやかな服装の婦人達で塞がり、紳士達は樂壇の周圍を取巻いてこみ合つたり、壁に沿つたり、またはあとの方の椅子の背後に立つたりしてゐた。音楽家達は音楽家といふ立場から、樂壇の兩側に座を占めてゐた。中央の卓子の上には、磁器の花瓶が載せてあつた。

聴衆は多勢だつた。どの人もどの人も始まるのをもどかし相に待つてゐた。やがて七時半になると、音楽家達が騒々しくさはいで、退場しかけたので、序曲として『タンクレディ』を弾いた。皆の者は銘々席に着いて、黙つてしまつた。序曲の最後の音は罷んだ……即吟者は四方八方から起る耳を聳せんばかりの喝采に迎へられて樂壇の最も端のところへ低い辭儀をして進んだ。

チャールズスキーは彼がどのやうな最初の印象を與へるであらうか、見たいものだ、不安に思ひながら待つてゐた。けれども彼にあれほど不釣合に見えた服装も、聴衆にはそれと同じ結果を與へなかつたらしいのに氣がついた。チャールズスキー自身ですら、樂壇の上に多數のランプや蠟燭に

明るく照された伊太利人の、蒼白い顔を見た時にはまるで可笑いところなどはちつとも見出されなかつた。喝采は静まり返つて、人の談聲も罷まつてしまつた。……

伊太利人は拙い佛蘭西語で言ひ表はしながら、満場の紳士淑女に何か題を夫々紙片に書いて見せていた。と頼んだ。この思ひ懸けない案内に、人々は相互に無言の眼を見合せたまふ、誰一人應ずる者もなかつた。伊太利人はほんの少時の間待つてから、おづおづした謙遜な聲でその要求を繰り返した。チャールズスキーは樂壇のすぐ下に立つてゐた。不安な感じが彼の胸一ぱいに塞がつた。彼は自分でなくてこの難事は始められるものではあるまい、してみると、どうしても自分が題を書かねばなるまい、と豫感した。事實數人の婦人は顔を彼の方へ振り向けて、初めは低い調子でそれから段々聲高に彼の名を口にしだした。その名を聞くと即吟者は眼で彼を捜してゐたが、自分の足もとに彼があるのを見つけると、親しげに微笑みながら鉛筆と紙片とを渡した。この喜劇の役割を演ずるのは、チャールズスキーにとつて甚だ不快だつたらしいけれども、さりとしてどう仕様もなかつた。彼は伊太利人の手から鉛筆と紙片を受取ると何ごとかを書きつけた。伊太利人は卓子の上から花瓶を執りあげて、樂壇を降りてチャールズスキーの前に差出したので、チャールズスキーは自分の書いた題をその中に収めた。この先例は効果があつた。二人の新聞記者は、文學者としても一流の人達だつたので各々題を書く義務があると考へた。ナポリ大使館の書記官や最近にフローレン

スの旅びから歸つた一青年は、夫々折り疊んだ紙を壺の中へ入れた。最後には極めて飾氣のない風をした少女が、その母親に言ひ附けられて、眼に涙を漫へながら伊太利語で數行認めてゐたが、耳まで赤くなつて即吟者にそれを與へたのを、その間婦人達は殆んど怵へ切れぬほどの可笑しさをやつと押し怱へて無言のまま打見成つてゐたのであつた。樂壇に歸つてゆくと、即吟者は卓子の上に壺を置いて、順々に紙を執り出しては一つ一つ大きな聲で讀みあげだした。

「La famiglia del Cenci(サンシの家庭)……L'ultimo giorno di Pompeia(ポンペイアのこよなき光榮)……Cleoptra ei suoi amanti(クレオパトラとその戀人)……In primavera Veduta da una prigione(牢獄から見たる春)……Il tronfo di Tasso(タッソーの勝利)」

「これを名譽ある諸君はお吟咐なさいますか」と伊太利人は恭しく訊いた。「一つ題を仰しやつていただきますか。それともまた、圖で定めませうか」

「圖さ」と群衆の中で一聲言つた者があつた。……「圖だ 圖だ」と聴衆は繰り返した。

即吟者は再び樂壇から下りてきて、手に壺を持ちながら懇願するやうな視線を前列の椅子に沿つて放げかけつゝかう訊いた。

「どなたか、題を引いてはいただけませんか」

そこに坐つてゐたきらびやかな婦人達は誰一人びくとも動揺しなかつた。北方人の冷淡に慣れた

い即吟者は非常に狼狽したらしかつた……突然、彼は部屋の一方に、小さな白い手袋をはめた手が擧がつたのを見つけた。彼は早速振返つて、二列目の端はしに坐つてゐる脊の高い若い美人の方へ進んで行つた。彼女は微塵もわるびれずに立ちあがつたが、頗る簡単にその貴族的な手を壺の中にさし入れて、圓るめた一葉の紙を抜き出した。

「どうかそれを披いて、お讀み下さい」と即吟者は彼女に言つた。

若い貴婦人は紙を披いて大きな聲でかう讀んだ。

「クレオパトラとその戀人」

これらの言葉は優しい聲で呟かれたのではあつたが、深い沈黙が部屋中を領してゐたので、誰の耳にも聞えた。即吟者はいとも深く感謝した態で、若い貴婦人に丁寧な辭儀をして樂壇に戻つた。

「諸君」と彼は聴衆の方に振り向きながらかう言つた。「圖は即吟詩の題として(クレオパトラとその戀人)といふのができました。私はこの題をお選び下さつた方に、この場合どんな戀人達が *perche la Grande regina haveva molto?* (聖母は何故天へ昇られたか)といふ事を問題にするか、その思想を願くば説明していただきたいのであります。」

かう言つたので、六七人の紳士は嘖き出してしまつた。即吟者は聊かどぎまぎした。

「私は」と彼はつゞけて「クレオパトラをどんな歴史的な特徴のある人物にしたものか、誰を諷し

てこの題をお選びなすつたのか、知りたいのであります……もし懇ろに説明して下さるならば、僕は非常に有がたく思ひます」

誰一人直坐に答へる者とはなかつた。五、六人の婦人は彼女らの視線を、かの母に言ひ附けられて題を書いた地味な風采の少女の方に向けた。憐れな少女はこの敵意ある注目に氣附くと、涙が眼に泛び出る程に困惑してしまつた。……チャールスキーは見るに忍びなくなつたので、即吟者に立て直つて、伊太利語で言つた。

「題を出したのは僕です、アウレクアス・ヴィクトルの一章のつもりだつたのです、してそのアウレリアス・ヴィクトルが言つてゐるのには、クレオパトラは常も戀の犠牲には死を宣告してゐましたが、それをも恐れず、否みもせぬほどの崇拜者がゐたといふことです。さりながらその題は聊か難かしいやうに思ひます、……で、他のを選択させていたゞけませんか」

しかし即吟者はもはや感興の迫りくるのを感じた。……彼は樂人達に彈奏するやうに合圖をした。彼の顔は恐ろしく蒼ざめて、發熱したかのやうに身をふるくく慄はし、眼は異様な情火に輝いた。彼は片手で黒い頭髮の毛を掻きあげ、ハンカチーフをもつて、玉なす汗に蔽れた高い額を拭つた。……それから俄かに前へ歩み出て、腕を胸に組み合せた。……樂人達は罷めた、……即吟者は歌ひだした。

宮殿は照り輝き、合唱の唄は

笛と堅琴との音に和し、

聲と眼差とをもて、威風堂々たる女王は

饗宴の席場に活氣を興へ

また人々の眼は高き彼女の玉座を仰ぎて、

人々の心もまた燃ゆる戀に烈しく鼓動せり。

されど俄かに、かくも誇らかなる肩は

憂鬱なる雲に影らされ、

かくてその喘げる胸の上にしづしづと

彼女の愁はしげなる頭は頂垂れぬ。

音樂は歇み、おのくの呼吸は静み、

饗宴の上に死の沈黙は落ちたり。

\* \* \* \* \*

譯者記す——この物語は原本が未完成になつてある。  
エチオピアの夜

ス  
ペ  
ー  
ド  
の  
女  
王

近衛騎兵ナルーモフの下宿で骨牌會があつた。長い冬の夜も何時の間にか明けはなれ一同朝餐の膳についたのはかれこれ朝の五時であつた。勝つた連中は中々の食慾で食つたが、他の者は空になつた皿をぼんやり眺めたまゝ坐つてゐた。それでもシャンパンが出ると、談話はまたも弾んできて、誰も彼もそれに加つた。

「で、首尾はどうだつたね、スーリン」と主人が訊いた。

「むゝ、例の通り負けたよ、僕は運が悪いんだね、ミランドルをやつてね、いつも冷静に構へてもゐたし、どんなことがあつてもどきまぎするなんてことはなかつたんだが、それであつてもいつも負けるテ！」

「で君はあの赤を黒にしようといふ氣にはならなかつたんだね、……君のお堅い事にやあ驚いてしまふ。」

「時に、ヘルマンの事をどう思ふね」と客の一人が、若い工兵士官を指しながら言つた。「あの男は生れてから一度も骨牌を手にしたこともなければ、生れてから一度も賭をしたこともないんだが、それでゐて朝の五時迄こゝに、吾々の勝負を見てござらつしやるんだよ」

「勝負が僕は非常に好きだからなんだ」とヘルマンは言つた。「けれど僕は餘分の儲けをしたいばかりに必要な金まで犠牲するやうな自分ぢやないんだよ。」

「ヘルマンは獨逸人だなあ、だから勘定高いや——それだけのことさ」とトムスキーは説明した。

「しかし解らない人といつたら、僕の祖母のアンナ・フォウドロヅナだ。」

「どうしてだい」と客人達は聞き質した。

「僕にや解らないのさ」とトムスキーは言葉を續けた。「なぜ僕の祖母が賭博をやらないかどだよ。」  
「八十歳にもなるお婆さんが賭博をしないたつて、何も不思議はないぢやないか」とナルーモフは言つた。

「だつて君はどういふ理由だか知るまいがな。」

「さうだ、全くだ、ちつとも知らない。」

「おゝ！そんなら聴き給へ。六十年ほど前に祖母が巴里へ行つて、大評判になつたといふ事をまづ承知しておいて貰はう、佛蘭西人は『このモスコウの女神』を一目見ようといふので附纏つたものであつた。リチエリユ（譯註：當時、佛蘭西の大政治家）などは祖母を戀して、祖母の無情を怨んだ揚句、すんでのこと

に自殺するところだつたつて、祖母は言つてゐたよ。その頃の貴婦人達はよく賭骨牌をやつたものだつた。ある時、宮廷で祖母はオルレアン公に莫大な金額の損をした。家へ歸ると祖母は顔の飾

物をはずし、腰の鎗骨を取除くと、祖父に骨牌で損けたことを打明けて、金を拂つてやつて下さいと吩咐けた。死んだ祖父は僕が覚えてゐる範圍ぢや何でも祖母の執事といった風であつた。祖父は祖母を火のやうに畏敬してゐたんだ。けれども、こんな莫大な負債を聞くと、殆んど氣も狂はんばかりになつて、彼女が負けた度々の金額を數へ立て、半年の間に五十萬フランから消費したことや、モスコイやサラトフ州の所領地にゐると巴里にゐるとは譯が違ふ事などを指摘して、最後に負擔の支拂ひを頭から拒絶してしまつた。祖母は祖父の横つらに平手打を喰はして、不貞寢をししてしまつた。かうした家庭の不和が祖父に效驗があつたらうと思ひながら翌日祖母は良人を呼びに遣つたのだが、さて會つてみると祖父は一向へこたれてはゐなかつた。生れてから初めて彼女は、負債にもいろいろある事だの公爵と馬車屋との間には大變な相違がある事だのを祖父に言ひきかせて、良人を納得させるつもりで、説明したり理屈をこねたりした。しかしそれも皆無駄であつた。そして祖父は猶頑として肯かなかつた。と云つて、その儘に放つておく譯にゆかなかつた。祖母はどうしていゝのか分らなかつた。彼女はその少し以前に甚だ妙な男と知合ひになつてゐた。君達は色々不思議な噂をされたサン・ジェルメン伯を知つてゐるだらう。君達が知つてゐるとほり、伯は流浪の猶太人で、不老不死の藥だの仙丹だのを、金にする方法の發見者だと自稱してゐたんだ。世間では彼を山師だと嘲笑してゐたが、カサノヴァは伯の調査記録の中に、軍事探偵だと書いてゐる

る。しかし、彼の境遇が不可思議千萬であつたが、サン・ジェルメンは甚だ人好きのする男で、交際場裡の最も上流の集團では慕ひ求められてゐた。今日でさへ祖母はその男に對して愛情のある回想を心に保存してゐて、あの男について無禮なことでも言ふ者があつたら、ひどく怒るんだ。僕の祖母はサント・ジェルメンの非常に金廻りのいゝのを知つてゐた。彼女はサント・ジェルメンに頼まうと決心して、時を移さず來て呉れるやうに手紙を書いたんだ。その奇妙な老人は早速やつてきて、悲嘆にくれてゐる祖母に會つたんだ。祖母は口を極めて良人の残忍な事を話して、自分の希望のすべては彼の友情と愛とに頼らなければならぬと言つて言葉を結んだ。

サン・ジェルメンは考へ込んだ。

「貴女のお望みの金額はお立替してもよろしい」と、彼は言つた。(だが、貴女はそれをお返ししておしまひなさる迄は、お氣が休まるまいと思ひます、で、私は貴女に新しく御心配をおかけしたくはありません。しかし、貴女の難局を救ふ一つ別な方法があります。それはお金を勝つて取戻すことができることです。)」

「(だつて、伯爵)と祖母が答へた。(ちつともお金が残つてゐないんですもの。)」

「(金なんかは要りません)」とサン・ジェルメンは答へた。(どうぞ私の言ふことをお聴き下さい。)

「そこで彼は一つの秘訣を彼女に打明けた。その秘訣のためなら、吾々の誰もがいくらでも金を出



すだらうよ……」

三四四

若い士官達はいよいよ注意を増して聴耳を立てた。トムスキーはパイプに火を點けて、一服やつてから、後を續けた。

「その同じ晩、ベルサイユの賭博場に出掛けて行つた。オルレアン公は銀行をやつてゐた。祖母は何かちよつとした口實をもふけて、まだ負債の金は拂はれないからと無造作に言ひ譯をしたが、それから公爵と勝負をしかゝつた。彼女は三枚の骨牌を選んで、順々にそれで戦つた。が、三枚とも見事に勝つて、祖母は負けてゐた金を一文残らず回収してしまつたんだ。」

「單なる偶然だ！」と、客の一人が言つた。

「作話だよ！」とヘルマンが口を出した。

「成程、骨牌らしいね！」と三人目の人が言つた。

「僕はさうは思はない」とトムスキーは眞面目に言つた。

「してみると何かい！」とナルローフが言つた。「君は三枚もつゞけて運の好い骨牌をあてる仕方を知つてゐる祖母さんを持つてゐるんだから、今までに君は祖母さんからその秘訣を受ついで勝ちつづけたことがあるんじゃないかい。」

「そりやないでもないさ！」とトムスキーが答へた。「祖母には四人の子供があつて、その一人が僕

の親父だ。が、その四人が悉く道樂者ときてゐるんだ。だから子供らのためにも、僕のためにもならないと思つたんだらう、到頭その秘訣を打明けなかつたよ。けれどもこれは伯父から聞いた話だが、伯父は僕に名譽に賭けてこれは本當の話だと言つたよ。あの死んだチャブリツキーが——あの何百萬かを蕩盡して、貧乏で死んで行つたあれさ——若い時分に一度三十萬留ばかり負けたんだ。

——僕の覺えてゐるのに間違がなかつたら、ゾリチェに負けたんだ。あの男は絶望してしまつた。若い人達の贅澤にはいつも随分入釜しかつた祖母ではあつたが、チャブリツキーを氣の毒に思つた。祖母は三枚の骨牌を興へて、順々に勝負することを教へると同時に、彼の生きてゐる間は決して骨牌をやらなさいといふ嚴格な約束をさせたんだ。チャブリツキーはそこで自分に勝つた相手の所へ出掛けて行つて、新たに勝負を始めた。最初の骨牌で五萬留賭けて、見事に勝つた。あの男は賭けを二倍にして、再び勝つたが、最後まで同じ策略をつゞけたので、負けた金よりずつと餘計に取返してしまつたのさ。……」

「だが、もう寝る時刻だ。かれこれ六時十五分前になるよ。」

さうして實際、もう夜は明けかゝつてゐた。若い人達は盃を飲み乾して、それから銘々散會した。

伯爵老夫人は化粧室で姿見の前に坐つてゐた。三人の小間使が彼女のまはりに立つてゐた。一人は臙脂べんじの小さい壺を持ち、一人は髪針かみはりの箱を持つて、いま一人のは派手な赤いリボンをつけた山の高い帽子を捧げ持つてゐた。伯爵夫人はもはや美しく見せつけやうなどといふ山氣は些かも持つてゐなかつたのだが、それでも猶若い頃の習慣を守つて七十年前に流行つた通りにきちんと衣裳を着けたり、六十年前にしてゐたやうに長い間、しかも注意深く身ごしらへをしたりした。窓に近く刺繍架に向つて彼女のお付き役である若い娘が坐つてゐた。

「お祖母さん、今日は」と若い士官は部屋に入りながら言つた。「リーザさん、今日は。お祖母さんにちとお頼みしたいことがあるんですがね。」

「何ですの、パウル。」

「僕の友人の一人を紹介させていたよきたいんです、さうして金曜日の舞踏會に伴れて來ることを許して戴きたいんです。」

「舞踏會に伴れておいで。さうしてそこで紹介しておくれ。お前さんは昨日B——の舞踏會へ行きましたか。」

「參りましたよ。何もかも大變愉快でした、五時迄踏をどりつめました。エレッツカイヤは何んてまあ美しいでせうね！」

「だつて、お前、どこが美しいんだい。エレッツカイヤは、彼女の祖母のダリヤ・ペトロローヅナ侯爵夫人に似てゐやしないの、それはさうと、あの方も随分お年を召したらうね、ダリヤ・ペトロローヅナ侯爵夫人もね。」

「どういふ意味です、年老ちよつたなんて？」とトムスキーは浮つかり叫んだ。「あの人は七年も前に死んだんですよ。」

若い娘は頭を擧げて、青年士官に目くばせをした。彼はそこで、同年輩の人の死は知らせないことにしてあつたのに氣がついたので、唇をぐつと噛みしめた。しかし老伯爵夫人は至極無頓着にこの報告しやうこを聞いてしまつた。

「お亡くなりになつたの！」と彼女は言つた。妾は知らなかつたね、妾達は同時に官女に任命されたのだが、皇后様の御前に出た時には……」

さうして伯爵夫人は百遍も話したことのある彼女の逸話の一つを孫に聞かせた。

「ちよいと、パウル」と彼女は話が終ると言つた。「妾を起しておくれ。リーザニカ、煙草入れはどこにあるの。」

そして伯爵夫人は三人の小間使ひを連れて、身仕舞ひをしあげるために衝立の裏へ行つた。トムスキーは若い娘と二人つきりになつた。

「伯爵夫人に紹介なさりたいといふ方はどなたですの」と、リザヴェタ・イワノヴナは叫き聲で訊いた。

三四八

「ナルームフつていふ男です。知つてゐますか。」

「いゝえ、軍人ですの、それとも文官？」

「軍人です、」

「工兵のでせう？」

「いや、騎兵だ。どうして君、工兵だなんて考へたんだい。」

若い娘は微笑んだが、返事をしなかつた。

「バサルや」と衝立の裏から伯爵夫人が叫んだ。「私に何か新しい小説を届けておくれ、でも、當世風のだけは御免だよ。」

「それはどういふ事です、お祖母さん。」

「主人公が父親や母親を絞め殺したり、土左衛門が出て來たりしないやうな小説よ、妾、土左衛門は眞平だからね。」

「そんな小説が今時あるもんですか。露西亞物はお好きぢやありませんか。」

「何か露西亞の小説があるのかい。一つ届けておくれよ、ねえ、どうぞ一冊届けておくれ！」

「ぢや、左様なら。お祖母さん。僕急ぎますから……左様なら。リザヴェタ・イワノヴナさん。どうしてナルームフを工兵だなんて考へたんですね。」

そしてトムスキーは婦人部屋を去つた。

リザヴェタ・イワノヴナはひとりになつた。彼女は仕事をほつたらかしたまゝ、窓の外を眺めだした。二三分輕つと往來の向ひ側の端れの家から若い士官が現れた。深紅の血潮が彼女の頬を掩つた。彼女は再び仕事を取りあげて、顔を刺繡架の上に俯向けた。ちやうどそれと同時に、伯爵夫人はすつかり身造へを整へて歸つてきた。

「リザヴェタ、馬車を吩咐しておくれ」と彼女は言つた。「妾達は馬車で出掛けるんだよ。」

リザヴェタは刺繡架から立ちあがつて、仕事道具を片付け始めた。

「どうしたの、えゝ、お前は豊なのかい。」と伯爵夫人は叫んだ。「馬車をすぐ用意するやうに吩咐けなさいよ。」

「只今すぐいたします」と娘は答へて、玄關へ急いだ。

召使が這入つて來て、パウル・アレクサンドロヴッチ公爵から届いた書物を、五六冊伯爵夫人に渡した。

「どうも御世話様でしたと言つておくれ」と伯爵夫人は言つた。「リザヴェタ！ リザヴェタ！ お前

はどこへ駈けてゆくのか。」

「着物を着換へて参りますの。」

「お前、まだたつぷり間があるんだよ、こゝにお掛けよ、一卷を開いて大きな聲で読んでおくれ。」  
相手の娘は書物を取りあげて、三四行讀んだ。

「もつと大きな聲をお出し」と伯爵夫人は言つた。「ねえ、どうしたのだい。聲が出なくなつたの。ちよつとお待ちよ——椅子を妾の方へお寄せ——もつともつと近くへ——さうすりゃ聞えるだらうよ。」

リザヴェタは更に二三頁讀んだ。伯爵夫人は欠伸をした。

「もう書籍はおよし。」と彼女は言つた。「なんて馬鹿々々しいんだらう！ 有がたうと言つてポウル侯に返しておしまひ。……ところで馬車はどこにあるの。」

「馬車のお支度はできております」とリザヴェタは往來の方を見て言つた。

「なぜお前は着物を着更へて來ないの」と伯爵夫人は言つた。「いつもお前を待つてゐなきやならぬのね。まあ、じれつたい！」

リーザは急いで自分の部屋へ行つた。二分とは経たない中に伯爵夫人はもう力限り呼鈴を鳴らし始めた。三人の小間使が一方の戸口に、さうして一人の従者は別な人口に駈けつけた。

「どうしてお前達は、私が呼ぶ時に來ないのだい」と伯爵夫人は言つた。「リザヴェタ・イワノーヴナに妾が待つてゐるつて言つておくれ。」

リザヴェタは帽子を冠り外套を着て戻つてきた。

「たうとう來たのね！」と伯爵夫人は言つた。「どうしてそんなに念入りにおめかしをするの。誰をお前は迷すつもりでおいでだね、天氣はどんな鹽梅かね、ちと風があるやうだね。」

「いゝえ、奥様、大變長閑な日でございますよ」と従者が答へた。

「お前はいつも川鱈目を言ふのね、窓を開けてごらん、ほら、風もあるし酷く寒いぢやないか、馬車をおししておしまひ、リザヴェタ、出掛けるのは止さうよ。そんなにお前、めかし込む必要はなかつたわね。」

「妾は何といふ生活をしてゐるのであらう！」とリザヴェタ・イワノーヴナはしみじみと思つた。

ところで、實際、リザヴェタ・イワノーヴナは甚だ不幸な女であつた。「他人の麵麩は苦く、他家の階梯は登るに難し。」とダンテは言つてゐる。けれども奉公のいたまじさをこの老貴婦人の憐れなお附き女のやうによく知つたものが誰あらう。A——伯爵夫人は別にこれといつて悪い心の人ではなかつたが、世間でちやはやされた女の例に洩れず我儘で、自分の全盛を見てきたとして過去の時代にこだわつてばかりゐて、現代を顧みないあらゆる老婦人達のやうに慾が深く、主我的であつた。

彼女が世の中のあらゆる辱れにかゝり合ひを持つてゐたので、舞踏會にも出たが、舞踏室の畸形なしかも不用な裝飾物といつた恰好に、昔風に化粧をしたり衣裳をつけたりして隅つこに腰掛けてゐるのであつた。入り来る客といふ客は皆彼女に近づいて、きまりきつた儀式で、もあるやうに丁寧な時儀をするのであつたが、その後では誰一人もう夫人に眼をくれる者はなかつた。彼女は街中の人を自分の家に対待するので、夫人の方で人々の顔をもはや見分ける事が出来なかつたのに、厳格な禮儀を受けてゐた。彼女の夥多の召使達は支那や女中部屋で肥え太つては齡取りながら、好き勝手な事をしたり、この年老いた伯爵夫人の物を、最も圖迂々々しく互に競ふて掠め取つたりしてゐた。リザヴェタ・イワノヴナはこの家庭の殉難者であつた。彼女は茶を造ればあまり砂糖を入れ過ぎたと言つて叱られる。小説を伯爵夫人に大きな聲で讀んできかせれば、作者の缺點は彼女の頭上に見舞はれる。伯爵夫人の散歩のお伴をすれば、天氣や敷石の具合までに責任を持たなければならぬ。月給は彼女の地位に伴つてゐた。しかし彼女が他の人達のやうな、つまりあんまりざらにないやうな服裝を期待してゐたに拘らず、その俸給を受取ることは極めて稀であつた。世の中で彼女は最もみじめな役目を勤めてゐた。誰も彼も彼女を知つてゐるがまだ、誰一人注目する人もなかつた。舞踏會では相手から望まれる時のみ踊り、貴婦人達は彼女らの着物を繕はせるために彼女を部屋から連れ出さなければならぬ時だけ彼女の手を執るのであつた。女は非常に自意識が發達

してゐて、自分の地位を鋭く感じてゐたので、自分の地位を救ひに来てくれる救ひ主をいらいらしながら物色してゐた。けれども輕薄な誇りを持つた若い男達は、彼女にはまるで注意を向けなかつた。がその實リザヴェタ・イワノヴナは、彼らがその周圍を取巻いて、うろつき廻る厚かましい、冷淡な結婚期の令嬢達よりも百倍も綺麗であつたのだ。幾度か彼女はげげしいが、しかし退屈な客間をそつと抜け出て、貧しい自分の小部屋へ泣きにいつたものであつた。その部屋には簞笥や姿見や塗寢臺があつて、銅製の燭臺には脂蠟燭が弱々しく燃えてゐたのだ。

ある朝——これはこの物語の冒頭に書いた夜會から二日許り経つて、吾々がつひ今臨んだ場面から一週間前の事であつた。——リザヴェタ・イワノヴナは窓際の刺繡架に向つて坐つてゐたが、その時ふと、往來の方を眺めやると若い工兵士官が瞳を凝らして彼女の窓を見詰めながら身動きもせず突立つてゐるのが眼に止まつた。彼女は頭をすつと低めて再び仕事をつけた。五分間はかりして彼女はまた外を覗ひてみた——若い士官がやつぱり同じ場所に立つてゐた。通りがかりの士官達に秋波を送るなどといふことに慣れてゐなかつたので、彼女は往來を眺めつゞけにはしてゐられなかつた。さうして二時間も頭もあげずに縫ひつゞけてゐた。中食の知らせがあつた、彼女は起ちあがつて刺繡架を片付け始めたが、何氣なく窓の外を眺めると再び士官が限に入つた。これが彼女には甚だ變に思はれた。中食を済ましてから彼女はある不安な感情を持つて窓の所へ行つた。

しかしもはや士官は居なかつた。——そして彼女はそれつきり考へなかつた。

三五四

二日経つて、恰度彼女が伯爵夫人と馬車で出掛けようとした時、またもやその士官を見た。その男は顔を毛皮裏の襟に半分埋めて黒い眼を帽子の下にぎよろぎよろさせながら、扉の背後にびつたり身をよせて立つてゐた。リザヴェタは理由もなくぎよつとして、馬車の中に坐つたときはふるふる身を慄した。

家に歸ると、彼女は窓の所に急いで行つた——士官は眼を彼女にちつと据ゑていつもの場所に立つてゐた。彼女は好奇心の生贄となり、彼女にとつて全く新しい感情に擾き亂されて身を引込めた。この時以來その若い士官がいつもの時刻に彼女の窓下に現はれない日とは一日もなく、二人の間には一種の無言の馴染が成り立つた。仕事をしてゐながら彼女は、若い士官の近附いて來るのが解るのが常であつた。で彼女は頭を上げて毎日々々長い長い間士官を眺めるのであつた。若い男はそれを非常に感謝してゐるやうに見えた。彼女は若い者の鋭い眼で、二人の視線が出會ふ度毎に男の蒼白い頬がどのやうにすぐ眞赤に染まるかを見て取つた。一週間ばかり経つてから彼女は男に微笑んでみせるやうになつた……。

トムスキーが彼の祖母なる伯爵夫人に、一人の友人を紹介させて呉れと頼んだ時、娘の胸は劇しくどろいた。しかしナル・モフは工兵でないと聞いてから彼女は、浮つかり質問したことによつ

て、自分の秘密を輕薄なトムスキーに洩らしたことを後悔した。

ヘルマンは露國に歸化した獨逸人の息子で、父からすこしばかりの資産を世襲してゐた。ヘルマンは自分の獨立を保たねばならぬと堅く決心したので、自分の利子には手も觸れず、ちよつとした贅澤品にすら眼もくれずに月給だけで生活を立てゝゐた。それに彼は無口で野心家だつたので、同僚達が彼の極端に節儉する費用を、揶揄ふ折も減多になかつた。彼は烈しい情熱と燃るやうな想像とを有つてゐたが、彼の堅い意志は若い人々に有り勝ちの心得違ひをさせることはなかつた。かやうに内心は賭博者であつたが、彼はこれまで一度も骨牌を手にしたことがなかつた。何故なら彼は自分の生活状態を考へると——彼の謂つたやうに——「餘計な金が欲しさに必要な金まで賭ける」といふことは許されなかつたからであつたが、それでも骨牌机には夜通し皆と一しよに坐つて、さまざまな勝負の移り變りに熱狂的な心配を伴ふのが常であつた。

かの三枚の骨牌の話は彼の想像に強い印象を刻みつけた。そして一晚中彼は何も他の事を考へることができなかつた。「もしも」と彼は翌日の夜、聖・ペテルブルグの街路をぶら／＼歩きながら獨り考へた。「もしも伯爵老夫人がその秘訣を俺に洩らしてくれたら！もしも三枚の勝札の名を教へてさへくれたら、どうして運だま試しをしないでゐられよう。こりやどうしても伯爵老人に紹介して貰はなければならぬ、さうして夫人のお氣に入りになる、——夫人の戀人になつてしまふ。……しかし、

こりやあ、皆時日を要することだ、夫人は八十七歳になる。一週間内に死んでしまふやら、こゝ二日て死んでしまふやら分らぬのだ。……しかしあの話そのものが本當かしら、信じられるものか！節約、克己、勤勉、これらが俺の三枚の勝札だ、これらを用ひれば俺は財産を倍にすることもできるし——七倍にも増されよう、さうして安樂と獨立とを得られるのだ。」

こんな風に黙想しながら、彼は聖ペテルブルグの大道の一つの、古風な建築をした住宅の前に出た。往來は馬車で塞がつてゐた。馬車はあとからく華やかな電燈の輝く門内へ引き込まれて行つた。さうして、一しきりは若い美人の恰好のいゝ、小さな足が、又一しきりは騎兵士官の重たい長靴が、それから又一しきりは外交官社會の人々の絹靴下や靴が敷石の上に下り立つのであつた。さまざまな毛皮や外套が、入口の巨大な門衛の前をさつさとつゞいて中へ入つて行くのであつた。

ヘルマンは立ち留つた。「これはどなたのお屋敷ですか」と彼は片隅に立つてゐた門番に訊いた。「A——伯爵夫人のお屋敷です」と門番は答へた。

ヘルマンは吃驚した。三枚の骨牌の不思議な話が再び彼の想像の中に現はれた。彼はこの家の女主人と彼女の不思議な秘訣との事を考へながら、家の前を往きつ戻りつし始めた。夜おそくなつて貧しい下宿に歸つた彼は、長い間眠りにつく事が出来なかつた。さうしてやつとうとうとすると、骨牌や緑色の卓子や紙幣束や積み上げられた金貨の夢ばかりに襲はれた。彼は骨牌を順々に勝負

させて、心ゆくまで勝つては、金貨を集めたり紙幣を衣嚢に一ぱい詰め込んだりした。翌くる朝おそく眼を醒した時、幻しの富が消えてしまつたのを思つて溜息を吐いた。それから町へ飛び出して行つたが、氣が附いてみると彼はまたも伯爵夫人の屋敷の前に来てゐた。何かしら知られない力がそこへ彼を引ずつて來たやうであつた。彼は立ち止まつて窓を見あげた。とその窓の一つに、房々した黒い髪の毛が書物の上にてあらうか、それとも刺繡架の上にてあらうか、俯向きになつてゐるのを見た。頭があがつた。ヘルマンは二つの黒い眼と生々した顔とを見た。その瞬間に彼の運命は決したのである。

### 三

リザヴェタ・イワノヴナがやつと帽子と外套を脱ぐか腕がぬに、伯爵夫人は彼女を呼び寄せ、再び馬車の用意をさせて呉れと命じた。馬車は入口の前へ牽き寄せられて、彼女らは乗り込まうとしてゐた。二人の馬丁が老夫人を扶けて車内へ入れようとしてゐるちようどその瞬間に、リザヴェタは工兵士官が車輪の側に身を寄せて立つてゐるのを見た。工兵士官は彼女の手を握つた。吃驚して彼女は氣が遠くなつた。そして若い男は姿を消してしまつた。——が、それより前に男は彼女の指の間に手紙を残して行つた。彼女はそれを手袋の中に匿した。さうして馬車に乗つてゐる間

中、彼女は何物も眼に止まらず何事も耳に入らなかつた。伯爵夫人の癖として馬車に乗つて外出すると、「今逢つた人は誰だ」とか、この橋の名は何といふんだとか、あの看板には何と書いてあるかとか」と、ひつきりなしにこんな事を訊くのであつた。けれども今度は、伯爵夫人が怒つてしまつたほど、リザヴェタは曖昧なそして途方もない返事をした。

「まあお前はどうしたんだね」と彼女は呶鳴つた。「茫んやりしてゐるぢやないか、何かあるのかい、妾の言ふ事が聞えないのかえ、それとも妾の言ふ事が分らないの……有難い事にはまだ妾は正氣だし、よつく解るやうに話されもするのだよー」

リザヴェタ・イヴノーヴナはそれをも聞いてゐなかつた。屋敷へ歸ると彼女は自分の居間へ駈けて行つて、手袋から手紙を引き出した。手紙には封がしてなかつた。リザヴェタはそれを讀んだ。手紙といふのは戀の告白で、やさしく恭々しい態度で、一句一句獨逸の小説を模寫して書いてあつた。しかしリザヴェタはてんで獨逸語を知らなかつたので、彼女はすつかり喜んだ。

それにも拘らずその手紙は彼女に大變不安な感じを起させた。生れてから始めて彼女は若い男と秘密な關係を結ぼうとしてゐる。男の大膽に彼女は驚いた。彼女は自分の不謹慎な行爲を譴責したのであつたが、さてどうしていゝやら分らなかつた。窓際に坐るのを止めて、彼女に交際を求めてくる若い士官の希望をはねつけ、知らん顔をしてみせてやらうか、彼に手紙を突返してやらうか、そ

れとも、冷淡な、決斷的の返事を出してやらうか、彼女には女性のお友達も、相談する人もないの、この當惑を拂ひのけてくれる人は誰一人あなかつた。……到頭彼女は返事を出す事に決心した。彼女は小さな文机に坐つてペンと紙とを執つた。そして考へ始めた。數度彼女は手紙を書きかけではそれを引裂いた。彼女の言ひ表はし方があまり懇願めいたりあまり情なく果斷すぎたりするやうに思はれたので。最後に彼女は満足するやうな文章を二三行書くことができた。

「わたしは貴方のお意志が誠實である事を信じてゐますし、何ら不躰な行爲をもつてわたしを侮辱しようと思つていらつしやらない事も信じてはゐますが、わたし達の交際はこんな風にして始めてはなりません。お手紙は貴方にお返しますが、この不當な非禮を惡意におとりにならないやうに望みます」と彼女は書いた。

翌日ヘルマンが現はれるや否や、リザヴェタは刺繡架から立ちあがつて、客間へ這入り通風筒をあけた。そして青年士官がそれと悟つて拾ひ上げてくれるだらうと心に信じながら往來に手紙を放げた。

ヘルマンは走り寄つて、それを拾ひあげると菓子屋の店へ這入つてしまつた。封筒の封を破つて、彼はその内部に自分の手紙とリザヴェタの返事とがあるのを見出した。彼はこれを豫期してゐたのであつた。で、彼は家へ歸つた、彼の心は陰謀で深く充たされてゐた。



三日してから、小間物店から賢しい眼附をした若い少女が、リザヴェタの所へ手紙を持つてきた。リザヴェタは金の請求かと内心ひやひやしながら、非常に心配して開封すると、思ひ掛けなくも彼女はヘルマンの手跡であるのに気が附いた。

「ねえ、これは間違つてゐるよ」と彼女は言つた、「これは妾宛ぢやないわ。」

「いゝえ、いゝえ、貴女様でございますわ。」と少女は故意とらしい微笑みを泛べながら答へた。「何卒お読みなすつて下さいまし。」

リザヴェタは書面を見た。ヘルマンは會見を乞ふてきたのであつた。

「そんな筈はないわ。」と彼女は大膽な要求と要求してきた手段とに呆れながら叫んだ。「この手紙は屹度妾に來たんぢやないことよ。」

そして彼女はそれをびりびりに引裂いてしまつた。

「そのお手紙が貴女に來たのぢやないのでしたら、なぜお破り遊ばすの」と少女は言つた。「妾は頼まれた方にお返しなけりやならないんですのに。」

「ねえ、お前」とリザヴェタはこの言葉にどきまぎして言つた。「これからも手紙なんぞ持つて來るんぢやありませんよ。さうして先様へ、恥をお知りなさいつて、言つて頂戴ね……」

しかしヘルマンはこれ位の事では止めるやうな男ではなかつた。彼女は毎日毎日手を變へ品を變へ

て届く彼からの手紙を受取つた。それらの手紙はもう獨逸語から譯したのではなかつた。ヘルマンは感情の迸るがまゝに綴り、心からの言葉で話し掛けて、希望の不變である事だの、抑へきれぬ想像の取亂れた状態だのが紙上にありあり表はされてあつた。リザヴェタはもはや手紙を彼に送り返さうとは思はなかつた。彼女は有頂天になつて、返事を書きだした。そして少しづつその返事も長くなり、情愛がこもるやうになつた。到頭彼女は次のやうな手紙を窓から彼に投げた。

「今夜大使館のお屋敷で舞踏がある筈になつてゐます。伯爵夫人もそこへお出でになります。妾達は二時まで大使のお屋敷に居るでせう。こんどこそ貴方と二人つきりでお目に掛る機会がきました。伯爵夫人がお出掛けになるや否や、召使達は恐らく出て行つてしまふでせう。さうして瑞西人の外は誰も残つてはゐません。その瑞西人も大抵は自分の詰所へ行つて寝るでせう。十一時半にいらして下さい。眞直ぐに階段を登つて下さい。もし玄關で誰かにお會ひになつたら、伯爵夫人は御在宅かどうかとお訊きなさいまし。お留守ですと申すでせう、その場合には再びお歸りなさるより外に仕方ありません。けれども大丈夫誰にもお會ひなさるやうなことはございません。小間使達は皆一しよに一つ部屋に居ります。玄關をお通りになつたら左に曲つて、伯爵夫人の寢室まで眞直にお進みなさいまし。寢臺の衝立の背後に、二つの扉が見當ります。右の方の扉は、夫人が一度も這入つたことのない小室へ行く口で、左の方のは廊下へ出られる口です。その廊下の端に狭い曲り

くねつた階段がありますが、そこを行けば妾の部屋です。」

ヘルマンは指定された時日の来るのを待ちわびながら虎のやうに身を慄はしてゐた。夜の十時といふのに彼はもはや伯爵夫人の屋敷の前に来てゐた。恐ろしい天気であつた。風が烈しく吹いて、雲混りの雪が大きな雪片となつて降りしきつてゐた。街燈は朦朧とした光を放つて、往來の人は全く絶えてなかつた。稀れに哀れつぽい瘦馬に牽かれた籠が、行き暮れた乗者を捜しながら、通つて行く位のものであつた。ヘルマンは厚い外套に身を包んでゐたので、風も雪も感じなかつた。

やがて伯爵夫人の馬車は整つた。ヘルマンは二人の馬丁が、黒黃鼯の毛皮にくるまつた老婦人の腰の曲つた體軀を、抱へるやうにして出てくるのを見た。すると老婦人のすぐ後から温かい外套を著て、生々した花環で頭を飾つたりザヴェタが隨いてくるのが見えた。扉は閉された。馬車は降りしきる雪の中を重々しく動いて行つた。門番が門の扉を閉めた。窓々は暗くなつた。

ヘルマンは寂閑とした屋敷の近くを往つたり來たりした。最後に彼は街燈の下に立ち留まつて懐中時計を見た。十一時二十分過ぎてあつた。彼は街燈の下に立つたまま、時計を見詰めて、残りの數分が早く經つのを待つてゐた。きつちり十一時半にヘルマンは屋敷の石段を登つて、あかあかと電燈の點いてゐる玄關へ這入つて行つた。門番はそこにはゐなかつた。ヘルマンは急いで階段を登り控室の扉を開けて、そこに一人の下男が洋燈の側で古びた椅子に腰を下ろしたまま居眠りしてゐるの

を見た。軽いしつかりした足取りでヘルマンはその傍を通つた。客間も食堂も眞暗であつたが、控室の洋燈の淡い反影が、そこまで射し込んでゐた。

ヘルマンは伯爵夫人の寢室に辿りついた。古めかしい聖像が一ぱい祭つてある神棚の前には、金の洋燈が燃えてゐた。毛織物の色褪せた肘掛椅子や、柔かいクッションの附いた長椅子が、部屋のまはり、支那絹布をかけ壁と憂鬱な調和をなしてゐた。部屋の一方の側にはレブラン夫人が巴里で畫いた二枚の肖像畫が懸けてあつた。その肖像畫の一つは晴れやかな緑色の軍服を着て勳章を胸につけた頑丈な、赭顔の約そ四十位の男の肖像で、いま一つの——は額の髪を縮らし、髪粉をつけた頭髪に薔薇の花を挿した鉤鼻の若い美人であつた。部屋の隅々には陶器製の牧羊者や牧羊婦、有名なレフロイエ場製の食堂用の柱時計、紙匣、髪の手を縮らす器具、扇子、さうして前世紀の末モントゴルフィール氏の輕氣球やメスミル氏の催眠術が大流行であつた頃盛んに貴婦人間の娛樂に用ひられたさまざまの玩具が置いてあつた。ヘルマンは衝立の裏へ行つた。衝立の後には小さな鐵製の寢臺があつた。右には小部屋に行く扉があつて、左のは廊下へ出る扉であつた。彼はその方を開けて、不幸なお付き女の部屋へゆく狭い曲りくねつた階段を見た……けれども彼は踵をめぐらして、眞暗な小部屋の方に這入つた。

時間はゆるやかに過ぎていつた。すべては靜まり返つてゐた。客間の置時計が十二時を打つた。

その鳴つた音が一つ一つ部屋中に反響したが、再びあらゆる物は静寂となつた。ヘルマンは冷たい燠爐に凭れて立つてゐた。彼は落著いてゐた。彼の胸は危険なそして避け難い企を果すことに決心してしまつた人のやうに、規則正しく鼓動してゐた。朝の一時を打ち、それから二時を告げた。そして遠くに馬車の轍の響が聞えてきた。われ知らず彼は身を震はした。馬車は近づいて来て駐まつた。馬車の踏臺が降りる音が聞えた。屋敷の中はすべて騒々しくなつた。女中達が彼地此地走り廻り、混雑な物音が起つて、部屋々々には電燈が點つた。二人の年寄つた女中が、寢室に這入つてきたが、暫く經つて、ヴォルテール肘掛椅子に生きてゐるといふよりか死んでゐるやうに深く身を埋めた伯爵夫人を伴つてきた。ヘルマンは隙間から覗いてゐた。リザヴェタ・イワノヴナはヘルマンのすぐ傍を通つて行つた。さうして狭螺旋形の階段を急いで登つてゆくせわしい足音を彼は聞いた。一瞬間彼の胸はちくちくする意識のやうな何物かに責められたが、その情緒はほんの鳥渡の間で、彼の胸はぢきに前のやうに硬くなつてしまつた。

伯爵夫人は姿見の前で衣物を脱ぎ始めた。薔薇模様の帽子を取り除けて、それから髪粉をつけた髪を綺麗に刈つた白髪頭から外した。髪針が彼女の身のまはりに驟雨のやうにこぼれた。銀糸をあやなした黄色い縞子の上衣は彼女のいきな足下にすべり落ちた。

ヘルマンは伯爵夫人の厭らしい装ひの秘密を見破つてしまつた。到頭伯爵夫人は、寢帽を冠り寢

衣を着た。か、さうした風彩の方がよつほど彼女の年齢に相應しく、醜くもなれば厭味でもなく見えた。

世間一般の老人の常として、伯爵夫人も不眠に悩んでゐた。着換をしてから彼女は窓際のヴォルテール肘掛椅子に腰掛けて、女中達を斥けた。蠟燭は持つて行かれて、再び部屋の中は燈明の灯ばかりになつた。伯爵夫人は弛んだ肩をもぐもぐやつて、身體を左右にゆすぶりながら、何となく黄味を帯びて腰掛けてゐた。どんよりした眼つきは全くの無心である事を表はしてゐた。そして彼女を見た者は、彼女が體軀をゆすぶつてゐるのが、彼女自身の意志の働きてはなく、何か隠されてゐる電気仕掛の作用によるやうに思つたに違ひなからう。

突然死人のやうな彼女の顔は、言ふに言はれぬ表情になつてきた。唇の慄ひが止まつて、眼は生じてきた。と、伯爵夫人の前に見知らぬ男が立つてゐたのである。

「吃驚なさいますな、どうぞ、吃驚なさいますな」と男は低いけれどもはつきりした聲で言つた。

「私は決して貴女に害をしようといふつもりはないのです。私はお願があつて參つただけなんです。老婦人は恰も彼の言つた事が聞えないものゝやうに、黙つて彼を眺めた。ヘルマンは彼女が豊かしらと思つたので、彼女の方へ身を屈めて、今謂つた事を繰り返した。年寄つた伯爵夫人はやつぱり前のやうに黙りこくつてゐた。

「貴女は私の生涯の幸福を保證なさる事ができるのです」とヘルマンはあとをつづけた。「さうしてそれは貴女に御迷惑にはなりませんまい。貴女は三枚の骨牌を順々におあてなさる相ですわね——」

ヘルマンは口を噤んだ。伯爵夫人は今となつて男の要求が何であるか分つたやうに見えた。彼女は返事の言葉を捜してゐるらしかつた。

「それは戯言ですよ」と彼女は到頭答へた。誓つて言ひますが、それはほんの戯言だつたのです。「戯言だなんて事はない筈です。」とヘルマンは腹立しげに答へた。貴女が手傳つて勝たしたチャブリツキーを、覚えていらつしやいませうがな。」

伯爵夫人は明らかに當惑した。彼女の様子には強い感動が表はれた。けれどもすぐ以前の無感覺の状態に戻つた。

「三枚の勝骨牌の名を教へてはいたゞけませんか」とヘルマンは言葉をつづけた。伯爵夫人は黙つてゐた。ヘルマンは言葉をつづけた。

「誰のために貴女は秘訣をお守りなさるのですな、お孫さんのためにですか、お孫さん達は秘訣を知らなくつてもお金持ちになつてゐらつしやいます、で、あの人達はお金の有難味といふものを御存じありません。貴女の三枚の骨牌は放蕩者には何の役にも立たないに違ひありません。親の遺産さへ保てないやうな者が都合のいゝ魔神を手に入れたところで、矢張り一文なしで死にます。私は

そんな類ひの男ぢやありません。私はお金の價值を知つております、貴女の三枚の骨牌も私なら無駄にはしません。さあ！……」

彼は息をついで、わなわな震へながら彼女の答を待つた。伯爵夫人は相變らず黙つてゐた。ヘルマンは跪つた。

「貴女のお胸が一度でも戀感情を知つていらしたら」と彼は言つた。「もし貴女が戀の歡樂を憶えてゐらつしやるんなら、もし新たに生れたばかりの子供の泣聲に微笑まれたことがありましたら、もし少しでも人情といふものが貴女の胸に宿つた事がありましたら、私は貴女に妻としての、戀人としての、母としての情をもつて、生涯の最も神聖なあらゆるものをもつて、歎願いたします。私の願ひを拒ばないで下さい。貴女の秘訣を私に打明けて下さい。何でもないぢやありませんか。……そりや、何か恐ろしい罪が伴ひませう、永久のお恵みも消えませう、悪魔と何か契約もしてあるでせう。……だが、まあ、考へてもみて下さい——貴女はお年齢を召していらつしやる。生きておいでになるのも長いことぢやございませぬ——貴女の罪は私の魂が引受ける覺悟をします。只々私に貴女の秘訣を打明けて下さい。人間ひとりの幸福は貴女の掌中にある事を思つてみて下さい。いゝえ、私一人ぢやあません、私の子も孫も貴女の遺徳を讚美して、聖徒のやうに貴女を尊敬するであります……」

伯爵老夫人は一言も返事をしなかつた。

ヘルマンは立ちあがつた。

「この老鬼婆め！」と彼は歯ざしりしながら叫んだ。「ぢや、かうして言はせてやるぞー」かう言つて彼は衣囊から短銃を引出した。

短銃と見て伯爵夫人は再び心の烈しい動搖を示した。彼女は頭を振つて射撃から身を擁ふとするかのやうに手を舉げた。……それから彼女は後ろに倒れて、そのまま動かなくなつてしまつた。

「おい、こんな子供だまはもうやめだ！」とヘルマンは彼女の手を執りながら言つた。「最後にもう一度訊くが、三枚の骨牌の名を聞かせてくれるのか、聞かせてくれないのか。」

伯爵夫人は答へなかつた。ヘルマンは夫人が死んでゐることに氣がついた！

#### 四

リザヴェタ・イワノヴナはまだ舞踏服を着たまゝ深い物想ひに沈んで、自分の部屋に坐つてゐた。家に歸ると彼女は着更へは自分でするからと言つて、さも不承不承に手傳ひに來た小間使を急いで追ひ返した。そしてヘルマンに會ふのを豫期しながら、しかし、どうか彼に會はねばいゝがと思ひつゝ、おのゝく胸を抱いて自分の部屋へ登つてきたのであつた。「と眼見て彼女はヘルマンが部屋に

ゐないことを悟ると、彼との約束を妨げてくれた運命に感謝した。彼女は着更へもしないで腰を下して、かくも短時日にかくも深く彼女を運んだありとあらゆる事情を心の中に思ひ返し始めた。窓からあの青年士官を初めて見た時からまだ三週間にもならないのに――もはや彼と文通もし、彼は密會の承諾を彼女にまふと約束させてしまつたのだ！ 彼女は男の手紙の端くれに書いてあつたので、彼の名だけは知つてゐたが、話をしたこともなければ、聲を聞いたこともなかつた。そしてその晩までには彼の噂も耳にした事はなかつた。しかし不思議な話ではあるが、その夜の舞踏會で、トムスキーはブウーリネ・N——公爵令嬢がいつになくじやらつかないといふので、不機嫌だつたが、無頓著な風を見せつけて復讐をしてやらうと思つたものか、そこで彼はリザヴェタ・イワノヴナを呼んで、彼と間斷なしに舞踏を踊つた。その間中彼は、彼女が工兵士官ばかり晶頂にしてゐるなんて揶揄つた。彼は彼女が想像してゐるよりもずっと深く知つてゐるやうな振をしてみせた。そしてその戲談のなかには、リザヴェタが幾度か、自分の秘密を彼に嗅ぎ出されてしまつたかと思つた程圖星を指された事もあつた。

「貴方はどなたからそんな事を聞きなすつたの」と彼女は微笑みながら訊いた。

「貴女をよく知つてゐる人のお友達からさ」とトムスキーは答へた。「全く毛色の變つた人からだよ。」

「その毛色の變つた人つて、どなたですの。」

「その人の名はヘルマンといふんだ。」

リザヴェタは答へなかつた。が、手も足もすつかり感覺を失つてしまつた。

「そのヘルマンといふ男はね」とトムスキーは言葉をつゞけた。「小説に有り相な柄の男ですぜ。横顔はナポレオンのやうで、心はメフィストフェリーズのやうな奴さ(譯註ゲエテの戯曲中の博士ファウストトがその靈魂を賣りし惡魔をいふ)。僕は尠くとも、あの男の良心には三つの罪惡が潜んでゐると信ずるね……大變貴女お顔色が蒼くなつてきましたぜ！」

「私頭痛がいたしますの……けれどそのヘルマンといふ方がどんな事をお話しなすつたの——いえ、その方はどんな方です——聞かして頂戴」

「ヘルマンは自分の友達に一方ならぬ不平があるんですよ、自分ならもつと違つた事をするだらうつて言ふんです。……僕はヘルマン自身が貴女に思召があるときへ思つてゐるんです。尠くともあの男の友達が貴女のことを話してゐると、そりや熱心に耳を傾けるんですよ。」

「けれど、どこで妾を御覽になつたんでせうね。」

「教會かも知れない、それとも町を歩いてゐた時かも知れないね——それは神様ひとりが御存じです。貴女が寢てゐる間に、貴女のお部屋で見たのかも知れない。それ位の男なんだからね——」

三人の貴婦人が彼に近づいてきて「*l'oublion regret?*」(忘れたんですかそれとも後悔してゐるんですか)と訊ねたので、リザヴェタにとつて氣が揉める位興味深くなつてきたこの話を中断された。

トムスキーに選ばれた婦人といふのはボウーリネ公爵令嬢その人であつた。彼女は幾順番かの舞踏の間に彼と仲直をしたので、それから、トムスキーは夫人を彼女の椅子へ導いた。自分の席に戻つてくるとトムスキーはもうヘルマンの事もリザヴェタの事も考へてはゐなかつた。リザヴェタは中絶した例の話をどうにかして始めたいものだと思はれてゐた。けれどもマズルカも終を告げたので、程なく伯爵夫人は歸宅してしまつた。

トムスキーの話は只踊りには付きものゝ鳥渡とした戯言に過ぎなかつたが、これらの言葉が若い夢想者の魂に深く沈澱したのであつた。トムスキーによつて描かれた面影は、リザヴェタが心中に描いてゐた幻影とそつくりそのまゝであつた。さうして今夜の物語のお蔭で、彼女の慕ふてゐる人の平凡な容貌が彼女を恐れしむると同時に彼女の想像を酔はしてしまふことのできるやうな特性を與られた。彼女は今、あらはな腕を組み、花飾をしたまゝの頭を、露出<sup>むき</sup>しの胸の上に垂れて坐つてゐた。不意に扉が開いて、ヘルマンが這入つてきた。彼女はふるふる身と身を震はした。

「どこに貴方いらしたの」と彼女は恐ろしげに小聲で訊いた。

「伯爵老夫人の寢室にゐたんです」とヘルマンは答へた。今そこからきたんです。伯爵夫人は死に

ましたよ。」

「え、ッ！ 何ですつて？」

「それがね、夫人を殺したのは僕のやうな気がするんです」とヘルマンは言ひ足した。

リザヴェタはぢろりと彼を眺めた。するとトムスキーの言つた事が彼女の心に反響してきたやうに彼女には思はれた。「この男の心には尠くとも三つの罪悪が潜んでゐる！」ヘルマンは彼女に近い空際に腰を下ろして、事の起つた顛末をすつかり喋舌つた。

リザヴェタは怖々ながらその話を聴いてゐた。それでは、あのあらゆる情熱的の手紙、あの燃えるやうな願ひ、この大膽な執拗い追求——これらはすべて戀ではなかつたのか！ 金銭——これこそ彼の心が憧れきつてゐたところのものであつたのだ！ 彼の希望を叶へてやる事も、彼を幸福にしてやる事も彼女には出来なかつたのだ！ 不幸な乙女は彼女の年寄つた恩人の殺害者の、強盜の盲目的な手足となつたに過ぎなかつたのだ！……彼女は惱ましい悔恨の痛ましい涙を流して泣き入つた。ヘルマンは黙つて彼女を視つめてゐたが、彼の心も亦、劇しく痛しい感情の餌食となつて、哀れな少女の涙も、憂ひに洗んだ彼女の美の驚くべき魅力も、彼の無情な心には何らの感銘を與ふる力がなかつた。彼は死んだ老夫人の事を思ひ泛べても良心の呵責を覺えなかつた。只一つ、彼が莫大な富を得ようと豫期した秘訣を、取り返しの附かない所に失くしてしまつた事が彼には悲しかつた

「貴方は人非人です！」やつとリザヴェタは言つた。

「僕は夫人を殺さうとは思つてゐなかつたのです」とヘルマンが答へた。「僕の短銃には丸がこめてなかつたんですよ」

二人とも黙つてしまつた。

夜が明け始めた。リザヴェタは蠟燭を消した。蒼白い光が彼女の部屋を照した。彼女は泣き腫らした眼を拭つて、ヘルマンを見あげた。ヘルマンは腕を拱き、額に恐ろしく皺を寄せて窓に近く腰掛けてゐた。かうした態度をしてゐると彼は、ナポレオンの肖像畫に實によく似て見える。この似顔にはリザヴェタすら驚いてしまつた。

「妾、どうして貴方を此家から逃してあげようかしら」と彼女は到頭言つた。「妾、非常口へ御案内しようと思ふんですけれど、さうすれば、どうしたつて夫人の寢間を通り抜けなきやならないし、妾、怖いわ、」

「非常口へ出るのはどう行つたらいいか教へて下さい——僕、獨りで行きますよ」

リザヴェタは立ち上つて、簞笥から鍵を出してそれをヘルマンに渡し、必要な指圖をした。ヘルマンは彼女の冷たい、撓やかな手を握りしめ、頸垂れた彼女の頭に接吻して部屋を出た。

彼は曲りくねつた階段を下りて再び伯爵夫人の寢間に這入つた。死んだ老婦人は、化石したやう

に腰掛けてゐた。その顔には深い安靜が表はれてゐた。ヘルマンはその前に立ち停つて、恐ろしい現實を確認しようとするかのやうに長く、熱心に彼女を見つめた。遂に彼は小室に這入つて、掛け毛氈もふじの背後に扉を手探りして、それから妙な感情に充たされながら、暗い階段を下り始めた。この同じ階段を」と彼は考へた。「多分この同じ小室から出て、六十年前のこの同じ時刻に、刺繍のある上衣を纏ひ、頭の髪は a Toisain royal (王冠鳥)のやうにして、三角帽を胸に押しあてた、誰か若い優男がそつと降りて行つたものだつたらう。その男は長い間墓場で腐つてしまつてゐるが、その男の年寄つた情人の心臓も今やつと鼓動がとまつてしまつたのだ、……」

階段の行ずまりにヘルマンは扉のあるのを見出した。で、鍵でそれを開けて、それから彼は往來に通ずる廊下を横きつて外に出た。

## 五

この宿命的な夜から三日経つた朝の九時に、伯爵老夫人の遺骸に最後の禮が施される×××僧院へ、ヘルマンは出掛けて行つた。後悔をしてゐないまでも彼は「お前が老婦人を殺したんだぞ」といふ良心の聲を抑制することができなかつた。宗教的信仰を殆んど持つてゐなかつたにも拘らず、彼は非常に迷信に陥つてゐた。で、死んだ伯爵夫人が彼の生命に祟るに違ひないと信じながら、夫

人の赦しを乞ふために葬儀に出席しようと思つたのであつた。

教會は一ぱいであつた。ヘルマンはやつと骨を折つて、群衆の中を押し分けて通つた。柩は天鵝絨の天蓋の下に、立派な葬籠むすぶの上に載せてあつた。伯爵夫人の死骸は、腕を胸に組み合して、レースの頭巾を冠り白絹子の衣を着てその中に横はつてゐた。葬籠の周圍には彼女の家族の人々が肩に紋章付きのリボンをつけた黒いカフターを着て、手には蠟燭をもつて、立つてゐた。身寄りの人達も——夫人の子供や孫や曾孫も——黒い喪服をきてゐた。

誰も泣いてはゐなかつた。涙は *Une effection* (わがこと) であつたに違ひない。伯爵夫人はあまりに老齡であつたので、誰も彼女の死には驚かさなかつた。そして親戚の者ともせずと前から夫人をこの世に生きてゐる者として眺めてはゐなかつた。ある有名な説教者が葬儀の時する説教をやつた。簡単な、哀れを咬るやうな言葉で説教者は、平和にこの世を去つた正しい女が基督教徒としての最後を長い年月の間靜かに覺悟してゐたといふ事を話した。死の天使は、敬虔な冥想に耽りて、眞夜中の花聲を待ちわびてゐた彼女を見出した」と講演者は言つた。

儀式は深い沈黙のうちに終つた。血縁の人達かまづ遺骸に告別をするために進み出た。それから大勢の會葬者達がつゞいた。その人達は長い間空しい歡樂を俱にした夫人に最後の禮拜をしにきたのであつた。それらが済むと、伯爵夫人の屋敷の召使達がつゞいた。最後に故人と同年輩位の老婦人



が一人ゐた。二人の若い女がその老婦人の手を引いて連れて出た。彼女は低く頭を下げるまでの力がなかつた——彼女は自分の女主人の冷たい手を接吻して、少しばかり涙を流したよけであつた。ヘルマンはそこで柩に近づかうと決心した。彼は冷たい石の上に跪いて、そのまゝそこに暫くじつとしてゐた。彼はまるで死んだ伯爵夫人のやうに眞蒼な顔をして立ちあがつた。彼は葬籠の階段を登つて、遺骸に禮拜をした……その瞬間、死人は片眼を瞬いて、嘲笑するやうな眼差しを彼に放げたやうに、彼には思はれた。ヘルマンは驚いて跳び退さつたが、足を踏み外して、地面にばつたり倒れた。五六人の人は慌て、駈け出してきて、彼を助け起した。それと同時にリザヴェタ・イヴァノヴナは教會の入口のところまで倒れてしまつた。この挿話は少時の間憂鬱な儀式の嚴肅さを亂した。群衆の中には深いぶつぶついふ聲が起つた。さうして故人の近い親戚に當る、脊の高い瘠せた侍従官は、傍に立つてゐたある英國人の耳に、あの若い士官は伯爵夫人の私生兒なんだよと叫びたが、英國人は冷淡に「はゝう！」と答へたよけであつた。

その日は一日中ヘルマンは、不思議な位昂奮してゐた。晩飯を食ひに人氣のない料理屋へ行つて、彼は心の動亂を鎮めようといふ心から、何時になく酒をどつさり呑んだ。しかしながらその酒は尙一層彼の想像を挑撥するのに役立つばかりであつた。家へ歸ると彼は着物も脱がずに寢床に身を投げて、そのまゝぐつすり寢込んでしまつた。

彼が眼を醒ましたのは、既に夜も更けてゐた。そして月光が室内を照してゐた。彼は懐中時計を見た。三時に十五分前であつた。眠りは醒めきつてしまつてゐた。彼は寢臺の上に坐つて、伯爵老夫人の葬式の事を考へた。

その時誰だか往來から彼の部屋の窓を覗き込んで、直ぐにまた行つてしまつた。ヘルマンはその事を別に氣にもかけなかつた。二三分経つて控への間の扉が開く音がした。ヘルマンは自分の從卒がいつもの通り酔だくれて夜遊びから歸つて來たのだなと思つたが、間もなく聞き慣れぬ聲音を聞いた。誰かしら床の上を靴で忍び歩きをしてくる者があつた。扉が開いて眞白な着物を着た婦人が部屋へ這入つてきた。ヘルマンは自分の齡老つた乳母だと思ひ違ひをして、今時分この眞夜中に何しにきたのだらうと不審を抱いた。しかし、白衣の女は忽ちすると部屋を横ぎつてきて、彼の前に立つた——ので、ヘルマンは伯爵夫人である事が分つた！

「妾は心ならずも貴方の所へ來ました」と彼女はしつかりした聲で言つた。「さうして貴方の願を叶へてあげようと思つて來ました。三と七とポイントをつゞけて使へば、勝てるのです。けれども二十四時間の中に、一度しか、骨牌をやらぬ、そして一生二度と再び決して勝負をしないといふ條件附きでなくてはなりませんぞ。妾の附添人のリザヴェタ・イワノヴナと貴方が結婚する條件を附けるなら、妾を殺した罪を赦してあげようよ。」

「かう言ふと彼は静かにくるりと振り返つて、するすると滑るやうに扉の方へ、姿は消えた。ヘルマンは表口の扉が開いて、又閉つた音を聴いた、そして再び誰だか窓越しに覗いたのを彼は見た。暫くの間ヘルマンは正氣に返ることができなかつた。彼はそれから立ち上つて、次ぎの部屋へ這入つた。彼の従卒は床に寝轉んでゐた。で、彼は無理矢理に従卒を起した。従卒は相變らず酔拂らつてゐたので、彼から何らの見聞も聞き得よう筈がなかつた。表口には鍵がかゝつてゐた。ヘルマンは自分の部屋に立戻つて、蠟燭に火を點した。そして自分の目撃した一伍一什を殘らず書き留めた。

## 六

物質界に於て二つの物體が同一の空間を占め得ないのと同様に、精神界に於ても二つの固定した思想が一緒に存在する事は斷じて出来ない。「三と七とポイント」は程なくヘルマンの心から死んだ伯爵夫人の幻を追ひ出してしまつた。「三と七とポイント」は間斷なく彼の腦裡を駆けめぐつて、絶えずその口に繰返へされた。今もし彼が若い娘を見るならば、「なんといふすんなりした女だらう！ほんとうにハートの三のやうだなあ」と言ふだらう。もし誰か「何時ですか」と訊ねると、彼は「七時に五分前ですよ」と答へるだらう。丈夫な男さへ見れば、ポイントを思ひ出した。「三と七と

ポイント」は眠つてゐる間も彼を襲ひ、あらゆるできる限りの形となつて現はれた。三が彼の前に見事な花の形となつて咲き亂れ、七はゴチック式の門となつて現はれた。そしてポイントは大きな蜘蛛に化けた。只一つの思想のみが彼の全心を領してゐた、——といふのは、あれほど高價に買つたところの秘訣を有利に用ふる方法についてであつた。彼は外國へ旅立つだけの賜暇を願ひ出ようかと考へつた。彼は巴里へ行つて、彼地の富んだ賭博公開堂にゐる者と金を賭けてみたくなつた。が、機會がそんな一切の心勞から彼を引離してくれた。

モスコウには有名なチエカリンスキーといふ男を座頭にした、有福な賭博者の俱樂部があつた。が、この男は一生涯骨牌で暮し、勝つたり負けたりして、百萬留の金を積んだ。永年の經驗は彼に仲間達の信用を固めさせた。彼の公開堂とその名高い料理とその愛想のいゝ、魅力のある素振とで彼は世間の尊敬を贏ち得た。その男が聖・ペテルブルグにやつて來た。都の若い人々は骨牌のために舞踏會も忘れ、浮氣女を口説くよりもフアロー（一種の骨牌）の時の感激を好んで、彼の宿へ集つて來た。ナル・モフもチエカリンスキーの所へヘルマンを連れて行つた。

彼ら二人は、慇懃な召使が一ぱいゐる一對の立派な部屋を通り抜けた。そこは人が混雜をしてゐた。將校連と樞密顧問官がホイスト（譯註四人一組になつてやる骨牌）をやつてゐた。若い人達は天鵞絨張りの安樂椅子にしどけなく横はりながら、アイスクリームを飲んだりパイプを煙らしたりしてゐた。客間には細長

い卓子の端を取り巻いて十人ばかりの遊人が集り、この家の主人は金を取扱ひながら腰を下してゐた。彼は年の頃六十歳位。威厳のある人で、頭は銀のやうな白髪に掩はれ、福々しい緒みを帯んだその顔は人の善い性質を示し、眼は絶えずほゞ笑みに光つてゐた。ナルーモフはヘルマンを彼に紹介した。チェカリンスキーは親しげに彼と握手して、改つた挨拶はしないことにしませうと言つて、それから骨牌を配りつゝけた。

勝負は暫くの間暇どつた。卓子には三十枚以上の骨牌が置かれてあつた。チェカリンスキーは一枚一枚投げ出すたびに、遊び人達の骨牌を打合せる猶豫を興へたり彼らの損額を書き留めたりするために手を休めて、念入りに彼らの要求に耳を傾けながら、しかし一層念入りに、遊び人の誰かの手がうっかり曲げた骨牌の角を延ばしてゐるのであつた。到頭勝負もお仕舞になつた。チェカリンスキーは骨牌をかき交せて、もう一度配らうとした。

「僕にも骨牌を撒いて下さいませんか」とヘルマンが、金を賭けようとしてゐる頑太な紳士の背後から、手を差し伸べながら言つた。

チェカリンスキーはにつこり微笑んで、黙話の合圖に黙つてうなづいた。ナルーモフは笑つて、ヘルマンがこの長い間守つてゐた骨牌の禁戒の誓ひを破つたのを祝し喜んで、幸運な手始めを祈つてゐた。

「さあ、賭けよう！」とヘルマンは白墨で自分の骨牌の裏に何か数字を書きながら言つた。

「何程です」と預主は眼の筋肉を擧めながら訊いた。「御免なさい、僕にはよく見えないんだからね」「四萬七千留て」とヘルマンが答へた。

かう言ふと部屋中の頭といふ頭が一時に振り向ひて、すべての眼はヘルマンの上に釘づけにされた。

「此奴は氣が變だぞ！」ナルーモフはかう思つた。

「御注意までに申し上げておきますが」とチェカリンスキーは相變らずのこゝろ顔で言つた。「貴方、少し多過ぎやしませんか、こゝてはまだ誰も、一度に二百七十五留以上賭けた人はありませんよ。」

「あゝ、さうですか」とヘルマンは答へた。「だが一體、貴方は勝負を承知して下さるのか、して下さらないのですか。」

チェカリンスキーは承知したといふ證據に頭を下げた。

「たゞ一言申し上げておきたいんですが」と彼は言つた。「仲間の方には、随分信用しきつてをりますけれども、私は現金でなくちや勝負をしないことにしてゐるんです。私一人なら、貴方のお言葉だけで十分で、全く信じますが、勝負の規則のためにも勘定する便利のためにも、札の上に現金を

置いて戴くやうにお願いしたいのです。」

ヘルマンは衣囊から小切手を一枚取り出して、チェカリンスキーに渡したので、チェカリンスキーはそれをさつと調べたのち、ヘルマンの札の上に置いた。

彼は勝負を始めた。右の方では九がめくられ、左の方では三が出た。

「勝つた！」とヘルマンは自分の札を見せながら言った。

驚嘆の吹き聲が遊び人達の間に起つた。チェカリンスキーは顰めつ面をしたが、微笑みがすぐもとの顔に返つた。

「受とつて下さいませうか」と彼はヘルマンに言った。

「御都合がよかつたらどうぞ、」と後者は答へた。

チェカリンスキーは衣囊から澤山の銀行紙幣を取り出して、すぐに支拂をした。ヘルマンは金銭を受取ると、卓子を離れた。ナルームフは驚愕から正氣にかへることができなかつた。ヘルマンは一杯レモン水を飲んで家に歸つた。

翌日の晩、彼はまたチェカリンスキーの所に現れた。主人は勝負をしてゐた。ヘルマンは卓子へ進み寄つた。骨牌をやつてゐる人達はすぐ彼のために席を譲つた。チェカリンスキーは丁寧な時儀をもつて彼を迎へた。

ヘルマンは次の勝負まで待つて、札を一枚取寄せ、その上に彼の四萬七千雷と昨夜勝つた金額とを合せて載せた。

チェカリンスキーは勝負をやりだした。チャツクが右の方でめくられ、七が左の方から出た。ヘルマンは自分の七を見せた。

人々は皆一聲に感嘆の聲を放つた。チェカリンスキーは眼に見えて俄かに機嫌が悪くなつたが、彼は九萬四千雷を算へて、それをヘルマンに渡した。ヘルマンは落着きはらつてそれを衣囊に挿ち込むと、直ぐにその家を出て行つてしまつた。

翌晩ヘルマンは卓子の所に姿を現はした。皆の者も彼の來るのを豫期してゐた。將校連も編密顧問官もかうした突飛な勝負を見物しようがために、自分達のホイストを止めてしまつた。若い士官連は安樂椅子から離れ、召使達までが部屋へどやどやと押入つてきた。皆ヘルマンのまはりにつめ寄つた。その他の遊び人達も、勝負を中止して、どういふ結果になるだらうと氣を揉んだ。ヘルマンは卓子の所に突立つて、眞青だが、それでも尙微笑みを泛べてゐるチェカリンスキーと二人で勝負をしようと身構へてゐた。お互に骨牌の包みを解いた。チェカリンスキーは札をかき交ぜた。ヘルマンは一枚札を取寄せて、銀行紙幣の山でその上を蔽つた。それは恰度決闘のやうであつた。深い沈黙があたり一面を領してゐた。